新世紀エヴァンゲリオンANIMA ヴィジュアルブック

EVANGELION

DENGEKI HOBBY BOOKS

IKUTO YAMASHITA PRESENTS

ANIMA

VISUAL BOOK

Project EVA

FIGRATIO

HOMO HOMINI DEUS ■ LEVEL

（ヒトはヒトの神である）

初号機は両手で水でもすくい上げたような
仕草で手を掲げ、ミサトが下から見上げると
その手を天井大地の抜けた空の青に
差し上げているようだ。
「何を持ってるの？　シンジ君」
彼女の問いかけに気付いたシンジは
外部スピーカーで答えた。
『加持さんの畑です』

このジオフロントに、天からは天井大地が落ち
戦自に爆撃され、量産型エヴァの群れが
羽ばたき吹き飛ばし踏み荒らした。
この畑が潰れなかったのは奇跡だ。

ただし崩落時の建材ダストが降り積もり
辺り一面灰色で、そこが畑と思い出せたのは
引いてあった水道の蛇口が壊れて
水が高く吹き上がっていたから、そのたまたまだ。
シンジがダストを払いのけると
スイカのツルや葉はまだ生きていた。
その後、主人が出かけたままの畑を面倒見ていたが

「このあたり
もう埋めちゃうって言うじゃないですか」

「正確には、埋めるわけじゃないけど」
ミサトはネルフ本部ビル一帯を覆う
巨大なコンクリートの封印ドームを指さして

「あれが出来たら
このあたりも天井大地で覆うから
もう集光施設もないし、陽は当たらないわね
上には新しい本部施設が建って
ここは封鎖区画になるわ」

『でしょ、だから地上に移します』
「リョウジは、なんて？」
『好きにしてくれ、だそうです』
加持はそのあとに――何しろ君が選択して
作った世界だ――そう続けたが
シンジはそこまでを語らなかった。

LUPUS

（あるいは狼）

EVANGELION
ANIMA

EVANGELION ANIMA

IKUTO YAMASHITA PRESENTS

CONTENTS

[Mechanism]

06 エヴァンゲリオン初号機CQB装備
08 エヴァンゲリオン初号機F型
10 エヴァンゲリオン零号機F型
11 エヴァンゲリオン弐号機F型
12 エヴァンゲリオン零号機Ⅱ式改·領域制圧機
14 エヴァンゲリオン弐号機Ⅱ式
15 エヴァンゲリオン初号機Ⅱ式·B型装備
16 エヴァンゲリオン弐号機Ⅱ式·アレゴリカ
17 エヴァンゲリオン·ユーロⅡ·ウルトビーズ
18 スーパーエヴァンゲリオン
24 新型兵装ビル アーミングツリー
26 アルマロス／エンジェルキャリヤー／ロンギヌスの槍
28 あかしま／メーザー砲車／プラティバス2

[Character]

30 綾波レイ
31 惣流·アスカ·ラングレー
32 碇シンジ
33 綾波レイ No.カトル&No.サンク
34 綾波レイ No.シス
35 葛城ミサト
36 伊吹マヤ
37 その他のキャラクター

[Model]

38 超合金スーパーエヴァンゲリオン
42 スーパーエヴァンゲリオン ヴォルテックス
44 新型兵装ビル·アーミングツリー&武器セット
48 アーミングツリー ジオラマ

[Novel]

50 エヴァンゲリオンANIMA #1·#2／山下いくと
70 POSTSCRIPT

[Rough sketch]

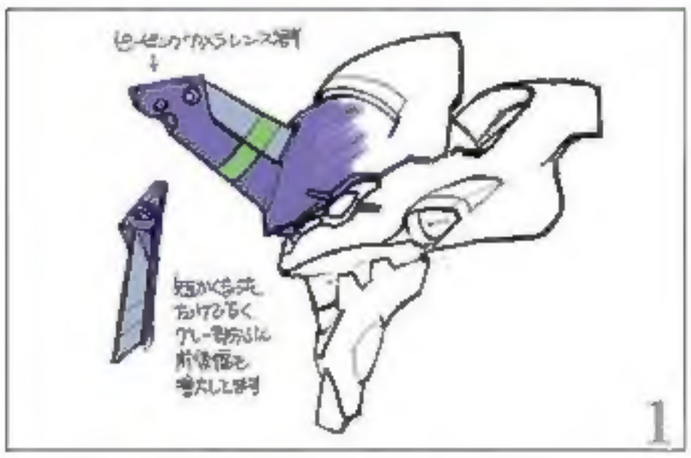
72 ラフデザイン:メカニック
74 ラフデザイン:キャラクター
75 駆け足で読むANIMA
80 グッズ監修
81 シス 造形計画

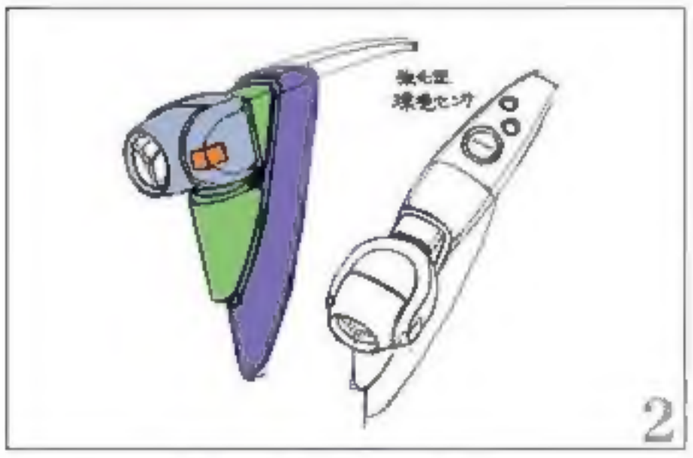
対エヴァ戦をにらみ初号機を改修

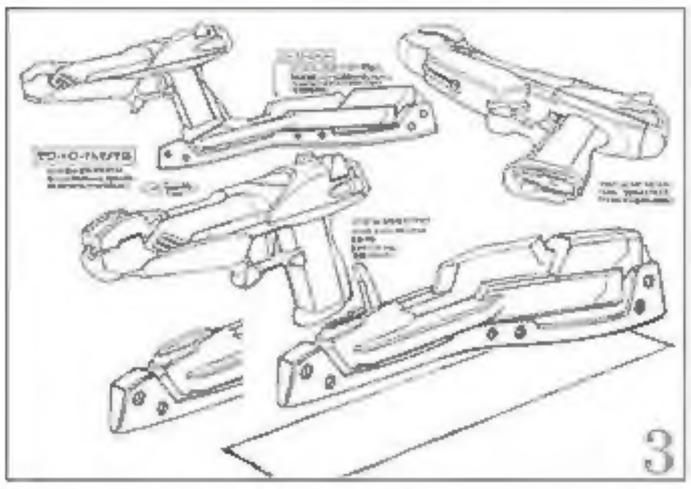
STAGE.1 Reconstructed model

[エヴァンゲリオン初号機 CQB装備]

使徒との闘いを終えたエヴァンゲリオンを待っていたのは、自身と同じ、あるいはそれ以上の実力を有するゼーレのエヴァシリーズとの戦闘だった。実験機レベルのステージ1仕様エヴァンゲリオンに限られた期間で施せる改修案は…。絶望的な状況で「CQB装備」は生まれた。







1.CQB装備用頭部拘束具

眼窩に跳弾防止用の波状装甲が加えられ、クリアー装甲で保護されているとはいえ比較的脆弱とされる生体受光部の防御を強化している。頭部に増設されたピーピングセンサーは遮蔽体に身を隠しての索敵用に設けられた。巨大なエヴァが物陰に身を隠し、角だけを突き出し、周囲を警戒している姿はかなり珍妙であるが。

2.CQB装備用肩部パイロン特設センサー

B型装備用パイロンからペンシルロックとの内蔵武器を廃し余剰スペースに統合センサーアレイとサーチライトを追加、探査能力を強化した新型パイロンである。装甲表面には使徒の残骸より鹵獲した感覚素子を塗布、「エヴァのヒゲ」と呼ばれる一種のATフィールドセンサーの発生が可能となった。

3.CQB対応ハンドキャノン

左右2丁で1分間に1880発の迷射が可能。

使徒と呼ばれる正体不明の生体兵器への対抗策として造られた汎用人型決戦兵器が「エヴァンゲリオン」である。ネルフ日本本部は3機のエヴァの実戦化に成功。度重なる戦闘に勝利し、死海文書にて予言されていた使徒シリーズの殲滅に成功した。しかし、その時点で実行機関であるネルフと上部組織ゼーレとのパワーバランスに齟齬が生じ、内戦をも含む衝突の危険性をはらむようになった。ネルフ特殊監査部担当官加持リョウジよりもたらされたゼーレのネルフ本部襲撃要項にはゼーレ側エヴァンゲリオン複数機によるネルフ防衛機能の沈黙化と戦略自衛隊空挺師団による浸透作戦が明記され、ネルフ本部の現有戦力では対抗できないのは明白であった。

CQB装備はS^2機関を装備し実質無限大ともいえる活動時間を手にした初号機を有効に使用するために考案された局地戦装備である。入り組んだ要塞都市内であればゼーレのエヴァ群を分断し各個撃破も可能、できうる限り高速で閉所をすり抜け遮蔽物を利して闘うための専用装備がCQB装備なのである。肩部パイロンにはサーチライトと張り出しセンサー、頭部アンテナは短く整形されピーピングカメラ群が装備されている。また、全身の装甲は使徒の残骸より入手した生体素材を取り入れた軽量かつ強靭な新素材を用いた被弾回避に優れた新型に変更された。

実際には、ネルフによる日本政府に対する政治交渉の成功による戦略自衛隊の中立化のためゼーレによる本部侵攻作戦は遅延し、ATフィールド技術を導入したよる強力なF型エヴァシリーズの開発が間に合ったためCQB装備の実戦投入は行われなかった。

modeled by TATSUYA YONEZU

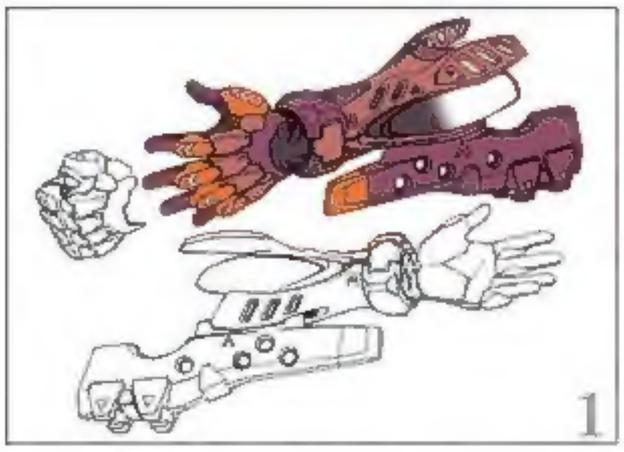
4.CQB用ハンドキャノン&バヨネット

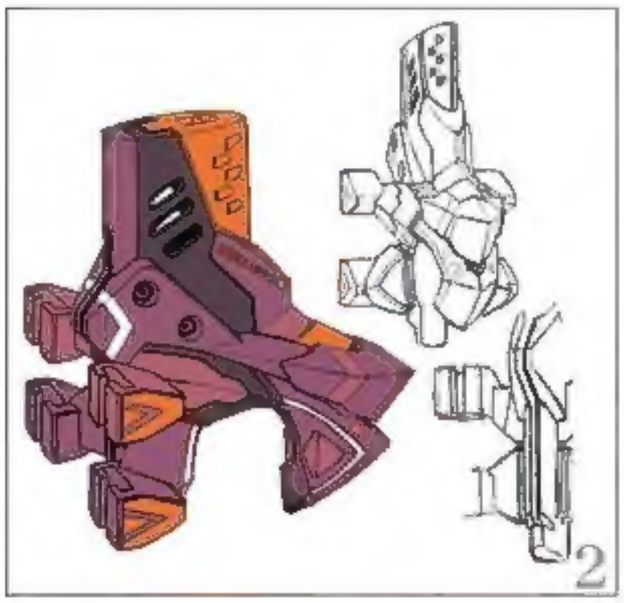
対使徒戦における白兵戦時にプログナイフ刀身にATFが発生、使徒の体表に展開された防壁型ATFを相殺破壊浸食する効果が発生した。現在ではビゼンオサフネ級の長刀にもATFは展開可能であることがわかっているが、当時としてはナイフ程度が発生限界だと思われていた。この火器は銃剣部で敵ATFをこじ開け、その間隙に砲弾をたたき込むことを目的としたものであり、肉弾特攻以外のなにものでもないそれまでの肉薄攻撃より効果が高いと目されていた。このコンセプトは後のカウンターソードに継承された。

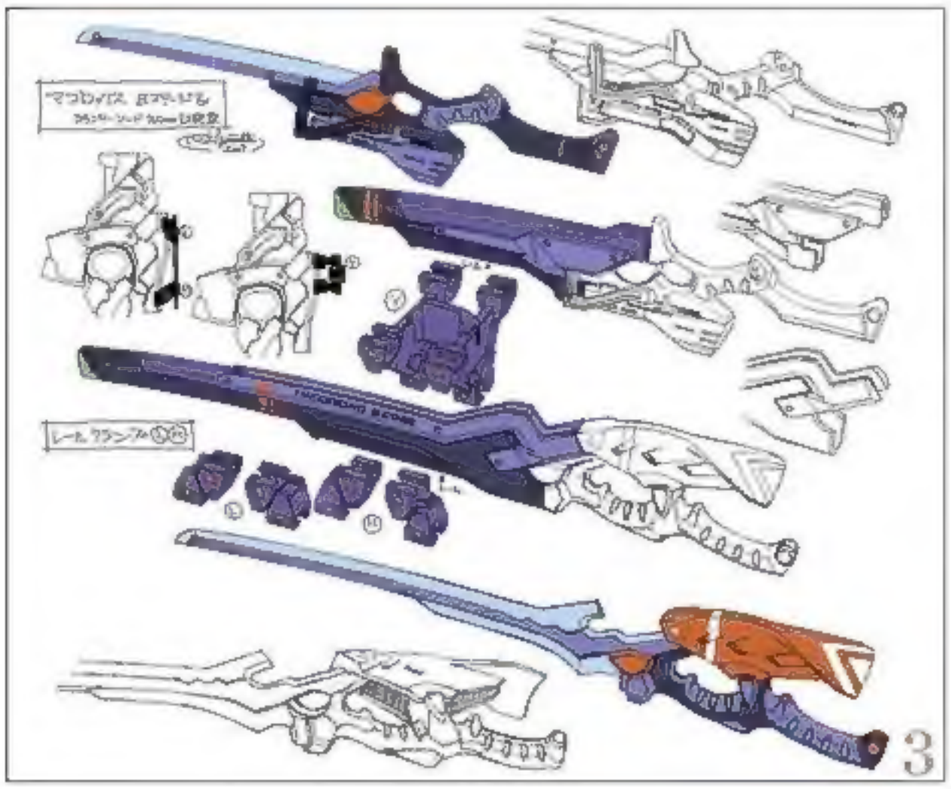
最初にロールアウトしたステージ2 エヴァンゲリオン

STAGE.2 Type field control examination
[エヴァンゲリオン初号機F型]

ゼーレに隠れ改修された諏々たる戦闘型エヴァンゲリオン。ATフィールドを攻撃、防御に使用、内蔵火器のインパクトボルトは複数機の量産型エヴァンゲリオンの無力化に成功した。


1


2



3

1.初号機F型改修キット・アームパーツ

腕はマゴロクステージ2が運用可能な形状に変更された。なおステージ1仕様の武装類、および専用装備であるプログレッシブダガーももちろん使用可能となった。

2.初号機F型改修キット・兵装パイロン

マゴロクおよびカウンターソード装備用に肩部にも武装装備用のジョイントが設置された。このジョイントはステージ2以降のエヴァすべてで共通規格であり、スーパーエヴァンゲリオン用の特殊兵装を除けば、ほぼ装備可能である。

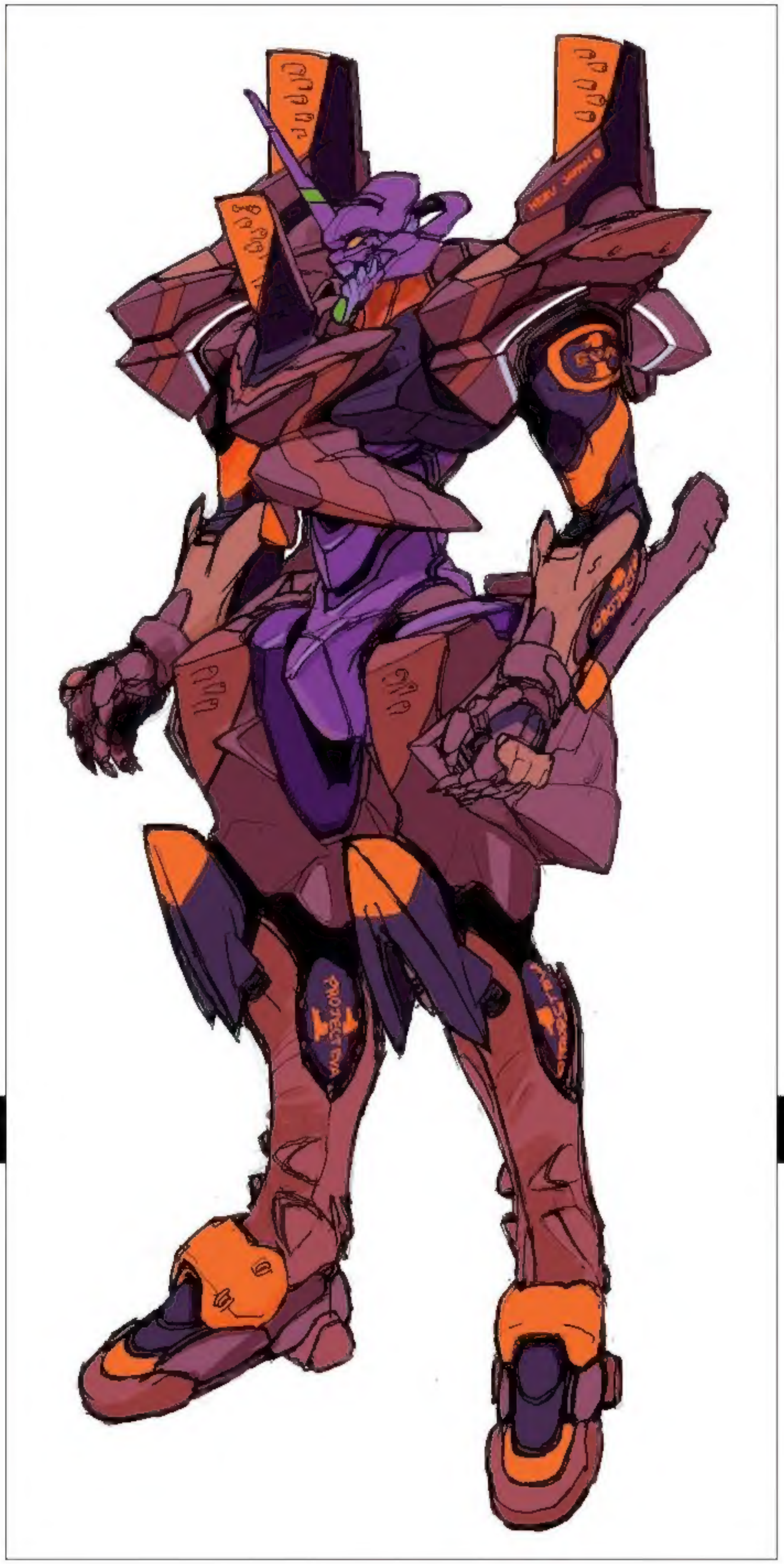
3.マゴロクス&カウンターソード ステージ2

試験用のステージ1・ソードはATフィールドが展開できず、単なる傾斜金属素材のソードにすぎず実戦では使用されなかった。ステージ2・ソードには情報宮が装備されATフィールドを刃全体に展開することが可能となった。そのため敵機のATフィールドを相殺・突破する能力がある。Sエヴァでのテスト時には予想外の破断効果(20%の確率でマイクロブラックホールの発生が観測された)が認められ、後に新型プログナイフに技術転用された。

「ATフィールド偏向制御運用実験機」の俗称。機体全面にATフィールドを展開することで装甲強化を施し、両肩にATフィールド技術から派生した高出力指向性電撃投射兵器「インパクトボルト」を装備した新型兵装。現場配備されているエヴァンゲリオンでは複数の使徒級兵器の攻撃を受けた場合、対応が難しいことから開発された。しかし、ゼーレは、実験機としては強力すぎるF型建造をネルフ日本本部の造反の予兆と見ており、同機の火器運用を限定的なものに留めるように変更を求めてきた。

ゆえにF型の手は大型兵器の保持ができない形状に改められ、小型刺突兵器の「プログダガー」装備のみに留められることとなる。しかし、ネルフは極秘裏に各種大型火器が運用できるF型改修キットを製作、エヴァ輸送用アームとして偽装配備、ネルフ日本本部防衛戦に投入された。

インパクトボルトは実戦運用時に巨大な電流サージを発生、それにともなうシステムダウンなど多くのアクシデントが発生、必ずしも効率的な武装とは言えず、F型初号機以降の機体に装備されることはなかった。しかし、インパクトボルトのATFチェンバーによるATF圧縮誘電システムは弐号機アレゴリカに実装されたN²揚力場スラスターの開発基盤となった。



modeled by GAS

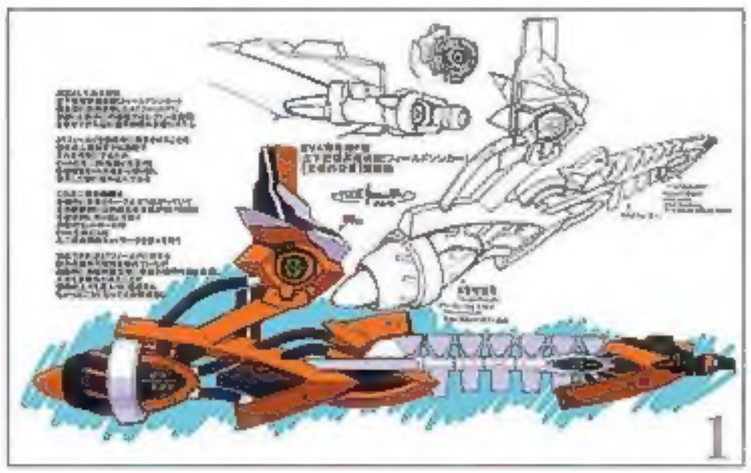
敵性エヴァンゲリオン戦への切り札、ネルフJPNの最終防衛ライン

STAGE.2 In the force field inclination control experiment model:00

[エヴァンゲリオン零号機F型]

人類最強の超長距離狙撃銃「天使の背骨」を装備するために零号機は右腕・右脚を切り捨てた。理論上、重力による偏向以外の障壁は本兵器には存在しない。通称、ネルフの絶対防壁、それが零号機F型だ。

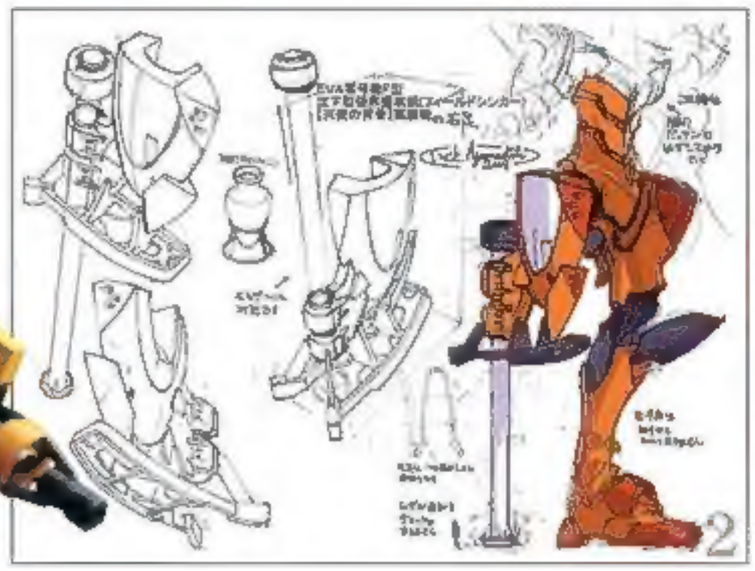
modeled by MITSUAKI MISAKI



1

1.天使の背骨

片腕に装着された主武装の「天使の背骨」は現在考えられる最強のATフィールド兵器である。浸食型に位相変換したATフィールドに加速した重粒子を乗せ、従来のATフィールドの反発力によってよってさらに加速させ目標に到達させる超遠距離型ATフィールド兵器。強化加速された重粒子は敵ATフィールドを瞬時に相殺、目標物を破壊する。



2

2.右脚用仮設スキッド

切除された右脚にはスキッド状の義足を設置。これは移動よりも安定した砲撃姿勢を零号機F型に取らせるためのものである。走輪移動司令棟ZZ01には零号機F型専用の固定用狙撃ベッドが設営されている。

使徒アルミサエル戦で大破した零号機よりコアを回収、セントラルドグマ内でモスボール保存されていた試作零号機パーツと新造のF型装甲を合わせて再生した。狙撃専用に特化された機体であり、「沈下型領界侵攻銃(フィールドシンカー)=通称・天使の背骨」を装備する。ATフィールドを銃の中に発生させるために、零号機の右腕と右脚を切断。そのため機動性は低く、F型装甲の除装もできない。S²機関は持たず、エネルギー供給は従来通りアンビリカルケーブル経由で有線供給される。強力な装甲と超射程の砲撃力は零号機F型単機での対ラミエル戦(ヤシマ作戦)の再現を可能とした。

重装甲・高速、白兵戦に特化した抜刀装備型エヴァンゲリオン

STAGE.2 In the force field inclination control experiment model:02

[エヴァンゲリオン弐号機F型]

給電方式が定まらず実戦化が遅れていた弐号機F型装備だが、N²リアクターの導入で配備が進みつつある。強力だがマンパワーがかかるアレゴリカ装備に対し、整備性が高く実戦向きなF型装備。当面、弐号機は二つの装備を使い分けることになると思われる。

modeled by MITSUAKI MISAKI

1.弐号機F型用ATF曲刀

本装備は拘束装甲の一部とされており、個別の兵器ナンバーはない。両腕に内固定武装として曲刀を設置したため、ライフル等の遠距離火器の装備は原則的に行われない。これは零号機F型の超遠距離射撃 初号機F型のインパクトボルトによる中距離攻撃とのコンビネーションを想定してのことである。

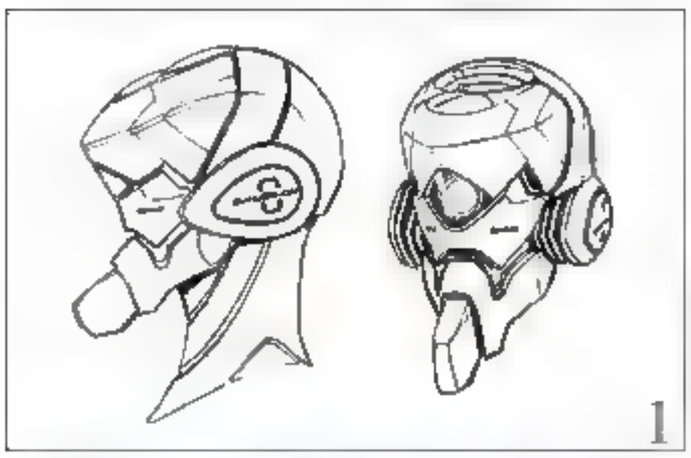
初号機F型用に開発された試作型より、S²機関の使用を前提としたインパクトボルト等の大出力系装備を取り去り、白兵戦用に特化した装備である。メインの武装はATフィールドにより刀身を強化されたグルカナイフ状の曲刀、特殊装備として両手持ちの大型剣「ビゼンオサフネ」がある。他のF型シリーズは装備が複雑で入念な調整が必要だが、弐号F型は装甲強化に特化したため整備性も非常に良好であり、場合によっては装甲拘束具の現地換装も可能とされる。本来、本装備はネルフ日本本部攻防戦を想定して建造されたが、専任パイロットの同調不良等で調整が間に合わず参戦を見合わせざるを得なかった。現在、N²リアクター対応の改修を受けており、ステージ3仕様弐号機のバリエーション装備として待機中である。なお、その際には頭部拘束具はアレゴリカ装備と同型のものが使用される予定である。

ゼーレ無きあとの新秩序を形成するために

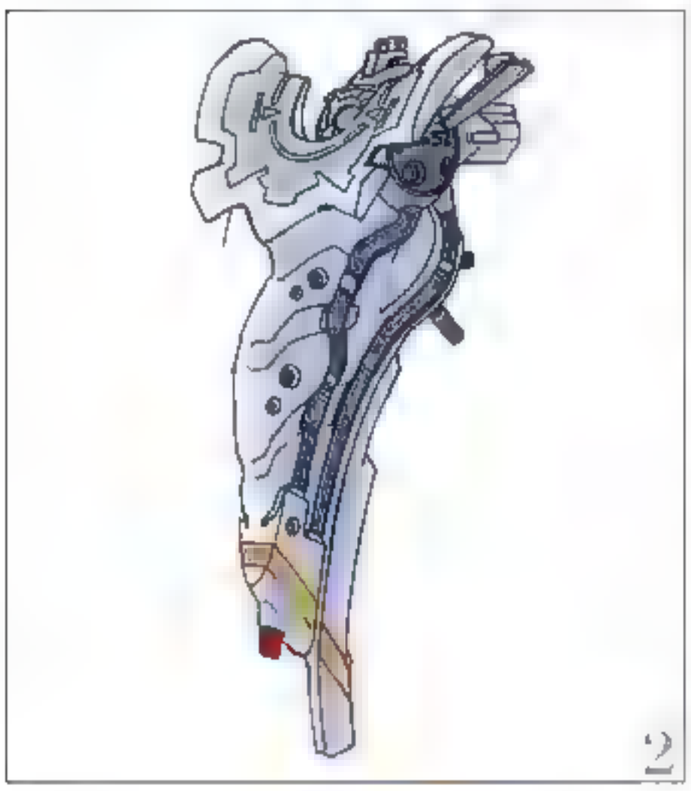
STAGE.2 Zero atmospheric pressure & zero gravity model

[エヴァンゲリオン零号機試製II式改・領域制圧機]

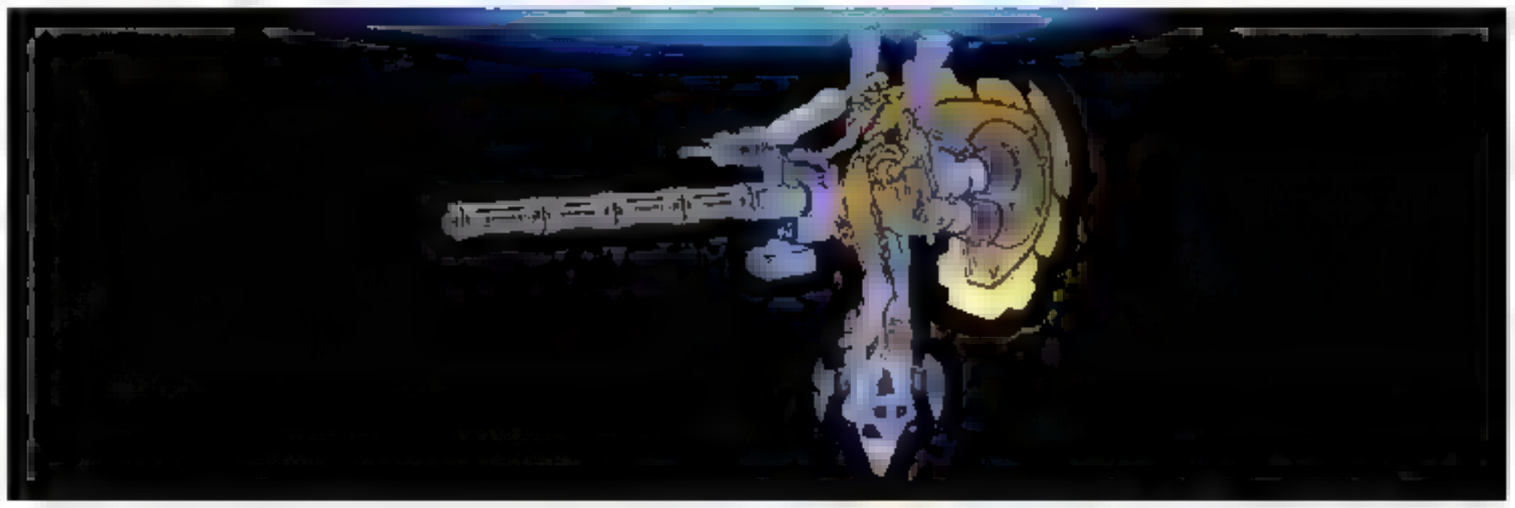
ネルフ上空絶対防衛圏を守る3機の守護天使。綾波レイとミラーリンクで結ばれた3人の妹たちによって操縦されるダモクレスの剣は3年にわたり敵対勢力の侵入を許さなかった。だが、絶対ということはない…。



1



2



軌道上での0-0エヴァ。宇宙で活動するため数々の補機類が装備され、砲台状の形態をとっている。0-0エヴァ本体の軌道上への打ち上げは大型ELVで行われたが、補給物資の供給はネルフ、PN本部の起動走輪指揮機ZZ01用の移動レール上に設けられたリニアカタパルトによって投擲される。

1. 0-0エヴァ頭部

ステージ1仕様よりもセンサー系が増強、宇宙用の廃熱ヒートシンクなどが増設されている。

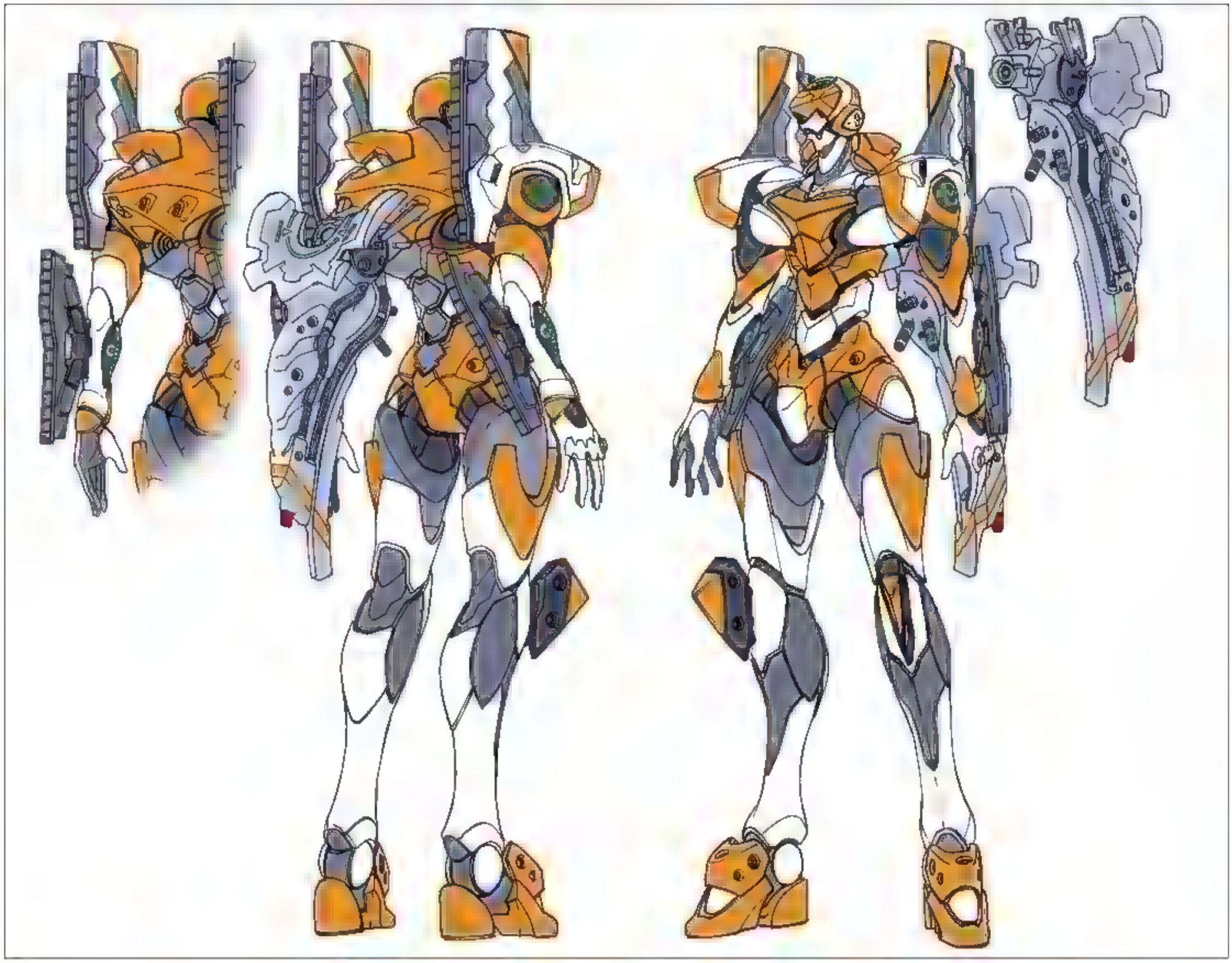
2. 0-0エヴァ用のS²機関

接続部は弐号機II式、スーパーエヴァとも共通であり、応接続は可能である。ただし、機体ごとのマッチングがあまりにもデリケートであり、流用はほとんど不可能と思われる。

ネルフ日本本部防衛戦で鹵獲したエヴァンゲリオン量産機の残骸をベースにセントラルドグマ内でモスボール保存されていた試作零号機パーツを移植、実戦化した機体。3機が中軌道に位置し、常にそのうちの1機が第三新東京市空域を攻撃可範囲とする宙域に駐留する。軌道上からのS²機関の大出力を利用した超高出力レーザーによる超遠距離射程射撃により2年にわたり日本本部への外敵の侵入を防いできた。

パイロットは長期宇宙任務用に特化された綾波クローン体であり、それぞれレイ／カトル、レイ／サンク、レイ／シスと呼称される。綾波クローン体は通常、エントリープラグ内で低活動状態に調整され、第三新東京市空域に突入・警備開始時または緊急事態にのみ起動される。これは綾波クローン自体に人格が発生せず、地上の綾波レイにより同期運用する方法がとられているためである。なお、複数の綾波クローン体の同時起動は、綾波レイ本体に非常に負担を強いるためまず行われることはない。

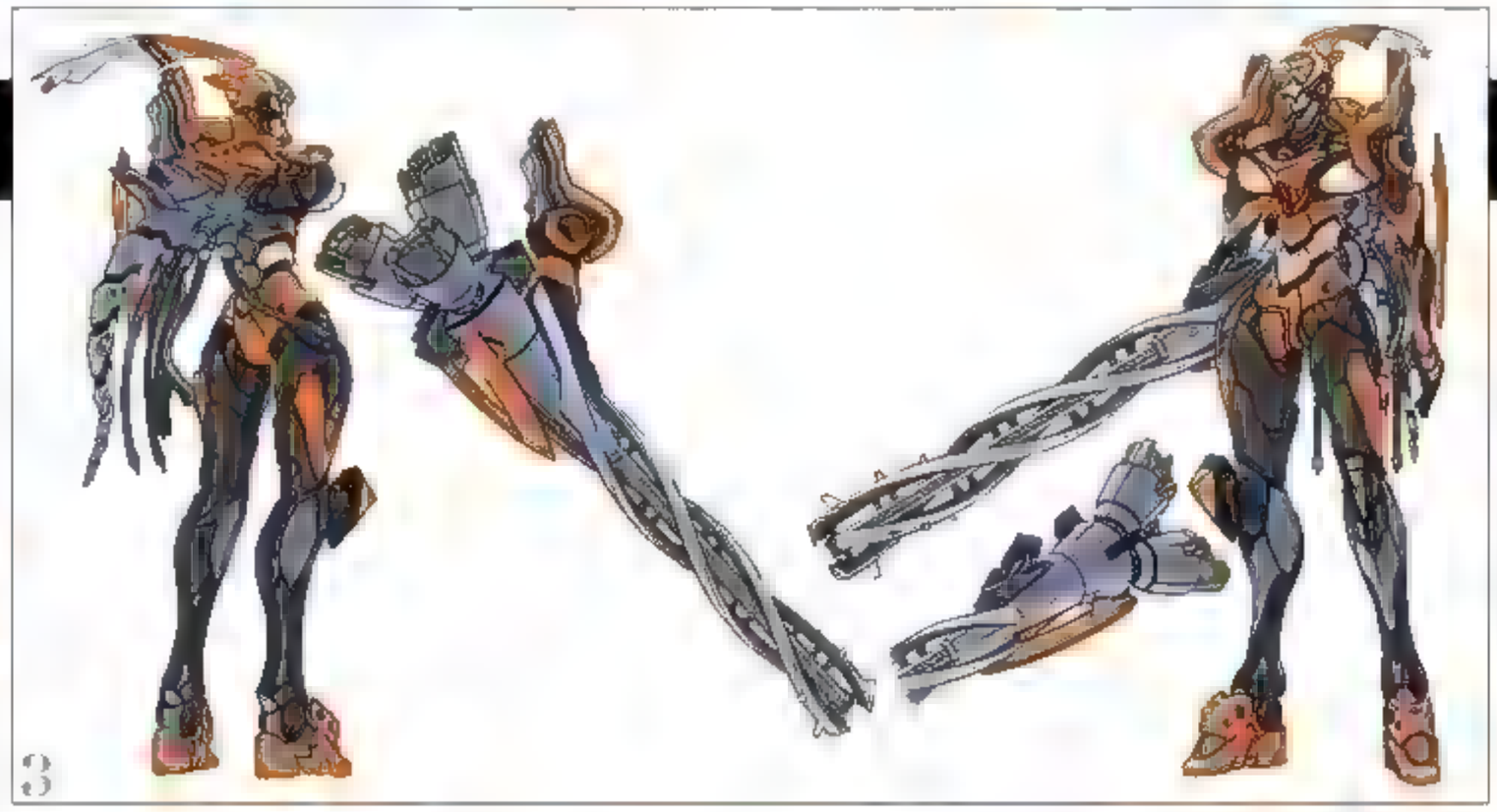
本機は量産機残骸中のS²機関を再利用したものであるが、単体での運用が非常に困難である（機動状態を上げるすぎると量産機ボディを無秩序に復元、少なすぎるとS²機関が自壊を始める）。そのため、S²機関自体に、量産機として完全な形で体が存在していると誤解させるように、量産機当時の感覚器を圧縮配置した外装と偽の手足に相当する突起物（パイプ等）を設けてある。このようにエヴァ本体とS²機関との完全な出力同調はなされてなく、エヴァが急な出力変動が生じるような動作を行った場合、S²機関自体が追随することができず危険な余剰出力が生ずる危険性がある。行き場のない一瞬の膨大な余剰出力は左右の翼の間のブローオフバルブから空中原子を赤熱化するエネルギーの奔流になって放出される。常に暴走とエネルギーバーストの危険性をはらんではいるが、S²機関の超絶な出力は魅力的であり、宇宙での限定運用ではあるが配備されることになったのである。



1

4.カトル機頭部

カトル機に試験的に装備された頭部ブレードアンテナも精神汚染時に曲刀のような形状に変形してしまった。



3

3.0-0エヴァ用廃機・カトル

軌道上より墜落、重大な損傷および原因不明の制御系の汚染を受けていると思われるため、ネルフ日本本部の手により用廃処理を進められている最中にエントリープラグなしで再起動、初号機F型を襲撃後、消失した。外観は右腕にガンマ線レーザーを、胸体にS²機関を同化するなど、著しく変貌している。各部より突きだしているパイプ類はS²機関の補機類の残滓である。

アンビリカルケーブルというくびきから解き放たれた新たな弐号機

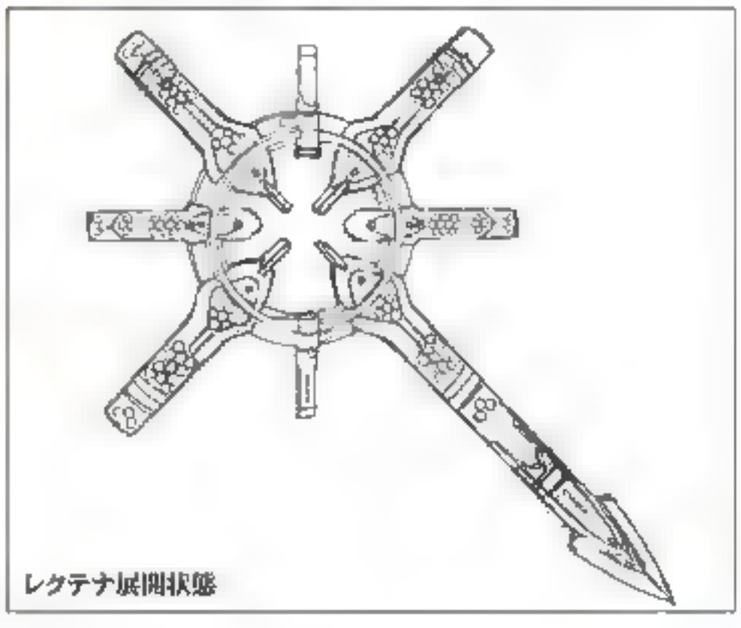
STAGE.2 Electromagnetic wave feeding model
[エヴァンゲリオン弐号機Ⅱ式]

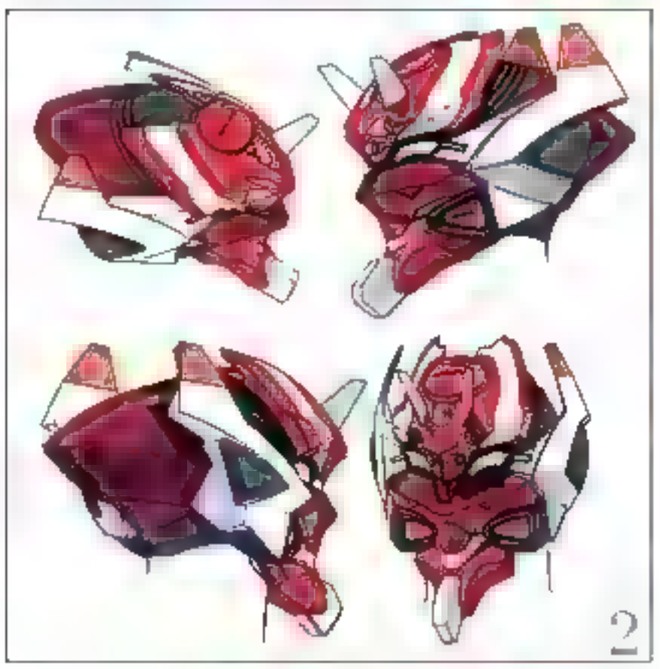
ツインアイ、背部の給電レクテナと、弐号機は新しい装いを得て高速戦闘型に生まれ変わった。マイクロウェーブによる無線給電は高い機動性と運用の柔軟性を与えた。

1

1.弐号機Ⅱ式 暫定無線給電装備

弐号機の背部に、マイクロ波メーザー給電レクテナを装備。第二新東京市各地に設けられたマイクロ波メーザー発信機を介して無線給電を実施、高速かつ長時間の活動を可能とした装備である。背部に設けられた折りたたみ式の大型給電レクテナは、上空の中軌道、滞空する制宙型0-0.1ヴァからのメーザー遠距離給電も視野に入れた設計がなされているが、カトル機の墜落により地上施設型メーザーよりの給電に限定されている。なお、マイクロ波給電レクテナとしては特異すぎる形状であり必要以上に強固な作りから、実はこれ単体でなんらかのメーザー兵器として運用できるのでは?との噂もあるが、さだかではない。なお、レクテナにある地表側のブームの先端にはアース兼用スパイクが設けられていて、レクテナ自体を電磁防壁として使用することも可能である。


レクテナ展開状態


2

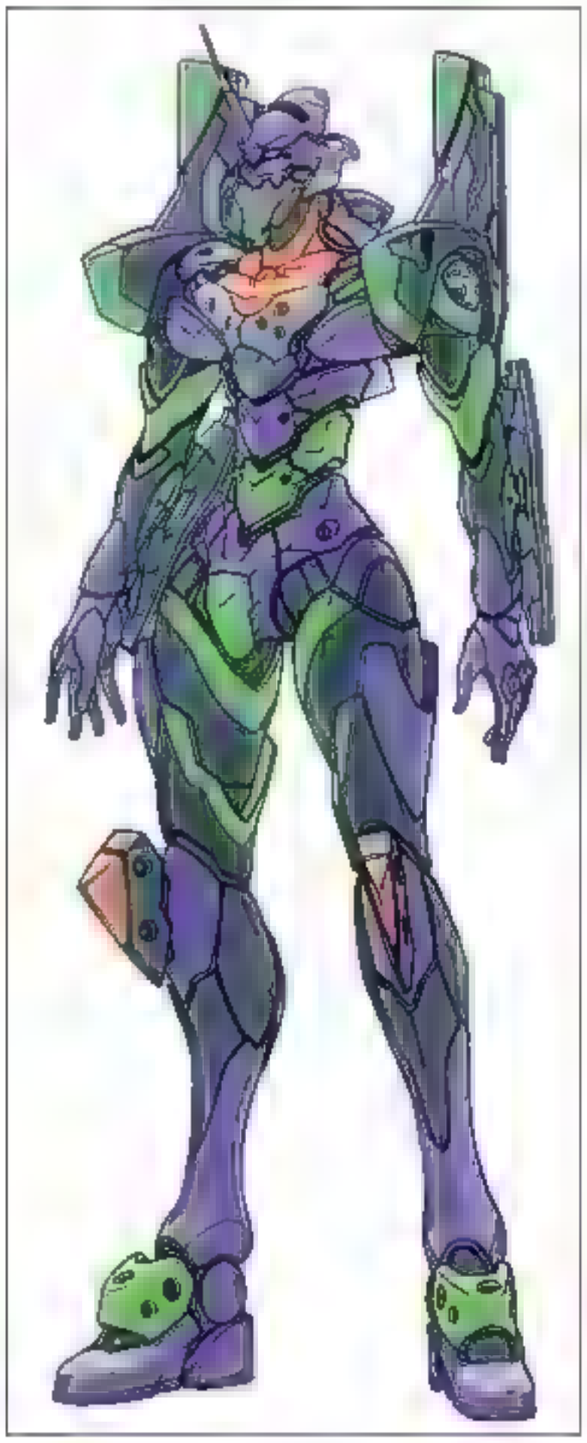
ネルフ日本本部防衛戦時に中破、40%を新造、大改修を受ける。頭部にロンギヌスの槍を受けたため、神経系統の修復を試みるが完全な復旧は見込めず、目を4ツ目から双眼に変更するなど外形的にも大きく変貌を遂げた。拘束具は零号機改と同型のステージ2仕様に変更、機体の追従性もより良好なものとなった。

動力系は機動性向上のため、アンビリカルケーブルによる有線供給を廃し、新たに背部にマイクロウェーブ受信グリッドを装備、無線による動力伝達が可能となった。またネルフ本部内に設置されたS²機関よりマイクロウェーブ送信機で供給される莫大な電力により、活動時間、出力ともに増強され、初号機用のS²対応装備のいくつかも運用可能になった。

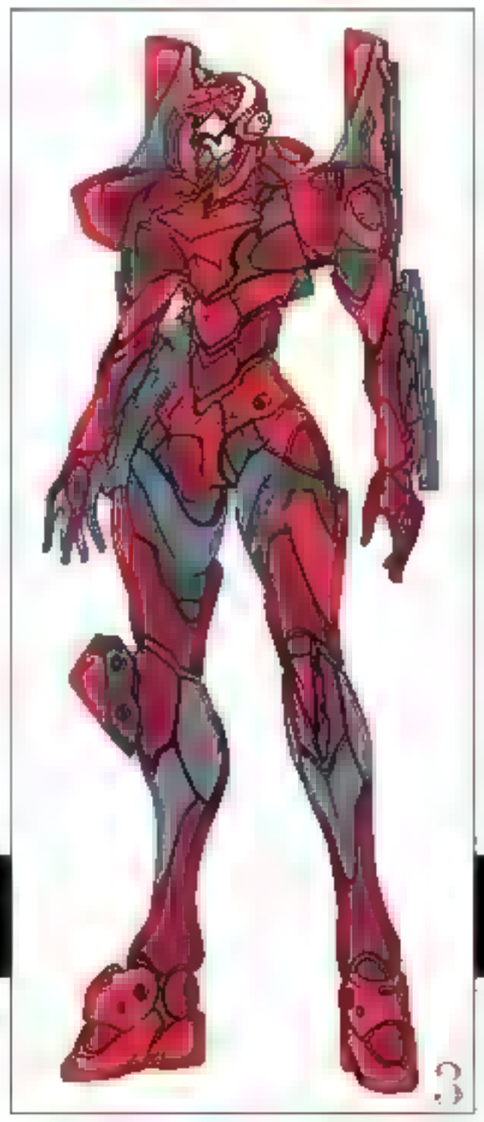
なお、本部内の固定型S²機関は使徒ラミエルより鹵獲した生体タイプのものを復元したものであるが、安定が保てず補機が巨大化しエヴァに搭載することは適わなかった。これはネルフアメリカ支部における使徒シャムシエルより鹵獲したS²機関の暴走事故から得た教訓に基づき、複数のフェイルセーフ機構を装備したためである。なお、暴走の危険をはらむS²機関の地球上での運用は非常に危険視されているため、ネルフ日本本部での運用は秘匿事項とされ公表されていない。

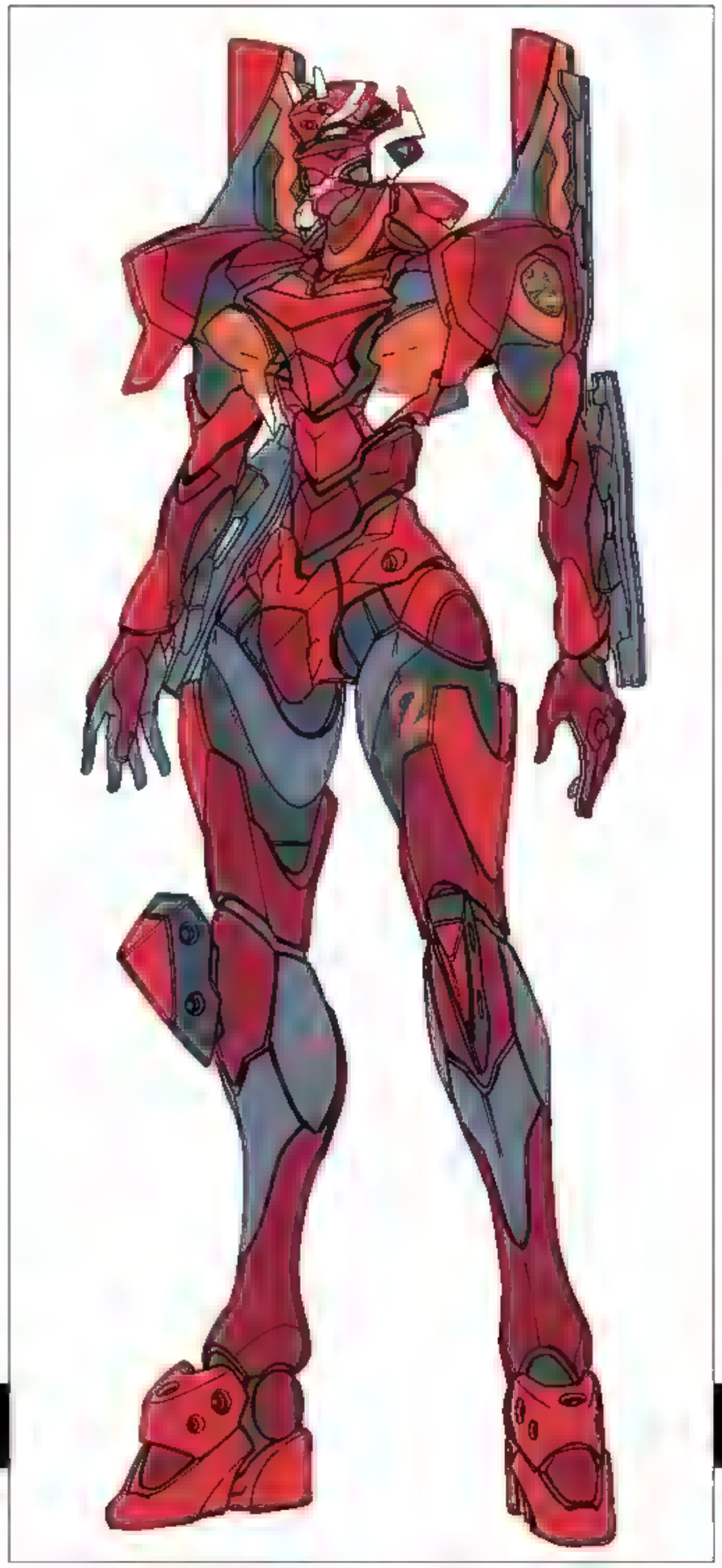
STAGE.2 Type 01 model B

[初号機ステージ2・B型装備]



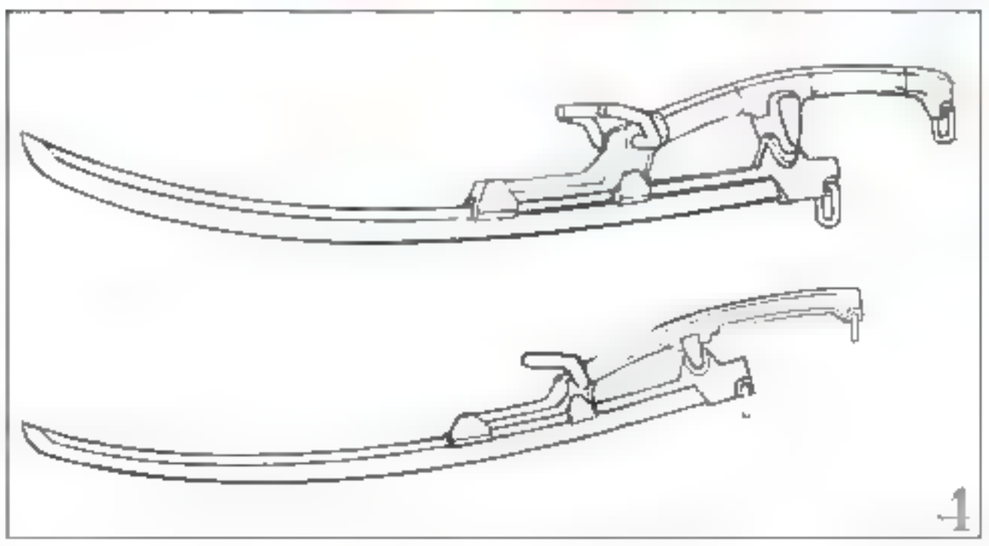
エヴァンゲリオン初号機にATフィールドによる駆動系の補助など、使徒との戦訓から得た技術蓄積を導入した新型拘束具を装備、試験機から実戦型にリニューアルしたものがステージ2仕様だ。武装面では各部兵装ステーションに戦自兵器との共有化も視野に入れた新規格レールシステムを導入、それにともないF型装甲装備との換装も可能となった。しかし、S²機関の出力は想定以上であり、初号機の機動を制限しかねないと思われたF型装備の質量も問題とならず、強固なATフィールド装甲を常時展開可能なF型装備が通常装備同然となり、テスト以外でのB型装備での運用はほとんど実施されなかった。





4.ビゼンオサフネ

弐号機Ⅱ式用の新型装備として、両手持ちの大型刀「ビゼンオサフネ」がある。これは「マゴロク ステージ2仕様」の運用実績に基づいて開発された新型ATフィールド兵器である。マゴロク同様、刃にATフィールドを展開、敵機のATフィールドを相殺両断する機能を有す。刀身長はエヴァが展開できる最長のATフィールドの長さから逆算されていると思われる。運用実績は良好であり、後にスーパーエヴァンゲリオンを含むエヴァンゲリオン用の汎用装備として採用された。



2.弐号機Ⅱ式頭部

回復不可能となった2対の両眼を補うために両類に初号機と同型の大型センサー、額にサブカメラが増設されている。頭部拘束具自体は弐号機用CQB装備用に開発していたものを流用したものである。

3.弐号機Ⅱ式頭部変更案

弐号機の頭部損傷は著しく、その修復はかなり難航していた。当時のネルフ、PNIは0.0エヴァのロールアウト前であり、弐号機の速やかな再就役が望まれていたのだ。これは弐号機の破損した頭部を切除し、モスボール保存されていた試作零号機頭部を移植し再生する案である。実現性は十分あったが、弐号機専任パイロイットと機体とのマッチング不備の可能性が高く、見送られた。

人類の英知の全てをつぎ込んだ最精鋭

STAGE.3 Ux-1 Allegorica model

[無限航続型強行偵察仕様 弐号機Ⅱ式・アレゴリカ]

得体の知れないS²機関に代わり信頼できるN²リアクターを出力系に装備。潤沢となった出力はATフィールド兵器の標準装備を可能とした。兵器として成熟期に達したエヴァンゲリオン、それがステージ3だ。

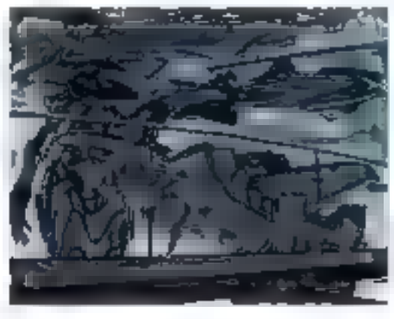
1.無限航続型強行偵察仕様 弐号機Ⅱ式・アレゴリカ：完全装備状態

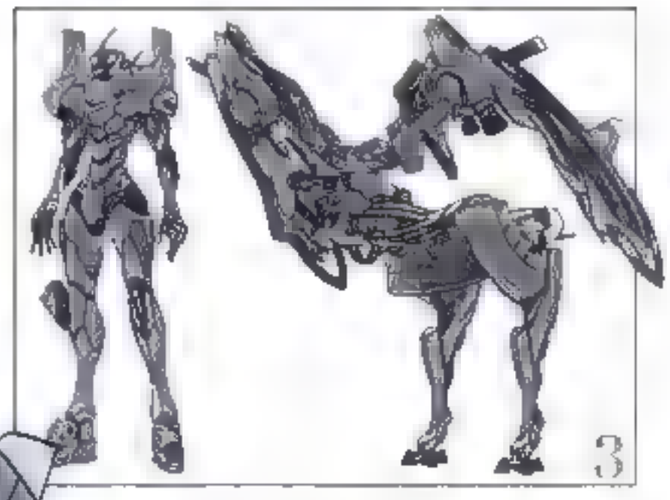
対アルマロス戦にあたりネルフジャパンは弐号機に考えられるありとあらゆる装備を行った。アルマロスのATフィールドを破るためには、対ATフィールド浸食機能があるステージ2以降の新装備が不可欠であり、開発中の新兵器群のいきなりの実戦投入が行われた。新型パレットライフル「パワードエイト・ロングバレルタイプ」、「マ 1ロクカウンターソード・ステ ジ2」、そして現在もっとも破壊力があるとされるN² ATFペネトレー タ 爆弾（N²爆弾の爆発時の衝撃を収束し、ATフィールドに対する貫通力を付加したもの）など、まさにネルフジャパンと戦自技研の新兵器博覧会の様相を呈することとなった。

2.アレゴリカ頭部

綾波レイNoトロフの不調、スーパーエヴァの慣熟などの事由によりエヴァシリーズ自体の運用が難しくなり、唯一完動状態に近い弐号機は頻繁に連続運用されることとなる。その結果、もしくは弐号機パイロットの心身状況の好転が影響したのか、回復不可能と思われた旧複眼の視神経が再生。そのため、初号機形状系列の二眼マスクから頭部は基本四眼のマスクに戻った。増設されたネックガード内部にはセンサー類を増加し偵察力を強化している。背部に大きく伸びたプラグカバーは密閉状態のままプラグが引き抜けるように延長された形になっている。これは長時間、弐号機を独立運用するために、パイロットの居住性を考慮したためである。なお低重力下機動によるエヴァ躯体頸椎構造の損傷を避けるために、頭はほとんど動かせないよう固定されている。

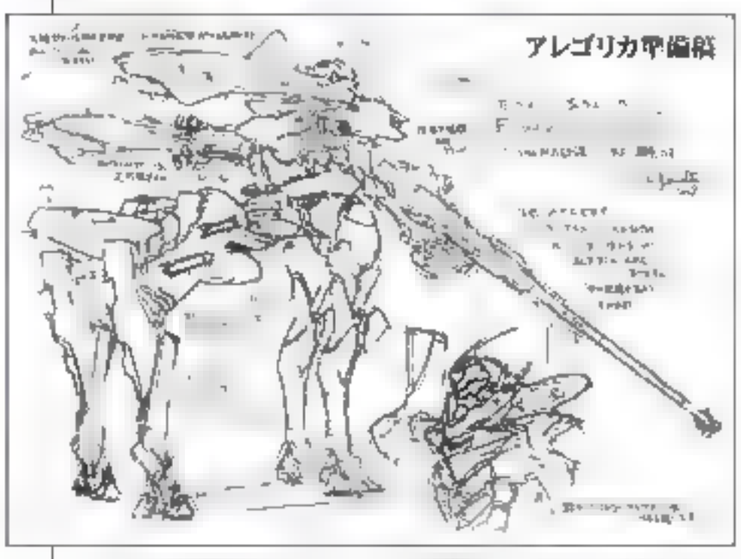
N²フランカーで実用化されたN²揚力場スラスターを装備。翼面に並んだ無数のスリット上に等間隔に人工潮汐力場を発生し、翼面上に発生させた不均等な重力場を利用した揚力場により飛行・推進する。当然、推進剤の必要もなく、ほぼ無限の機動時間を可能としている。出力等に関してはS²機関に譲るものであるが、S²機関の起動原理が推測の域を出ず、敵性体であるアルマロスによる障害すら予測できるため、確実性の高いN²リアクターが人類の切り札たるアレゴリカに装備された。アレゴリカユニットは弐号機の背部 尾部 腰部に新設されたジョイントによって接合、アンビリカルケーブル用のジョイントは使用されていない。アレゴリカユニットは弐号機に飛行能力に加え、月面の脆いレゴリス上でも機動性と安定性を保証する。地上・大気中・宇宙 月面とあらゆる環境での行動を可能とした全領域対応装備なのだ。



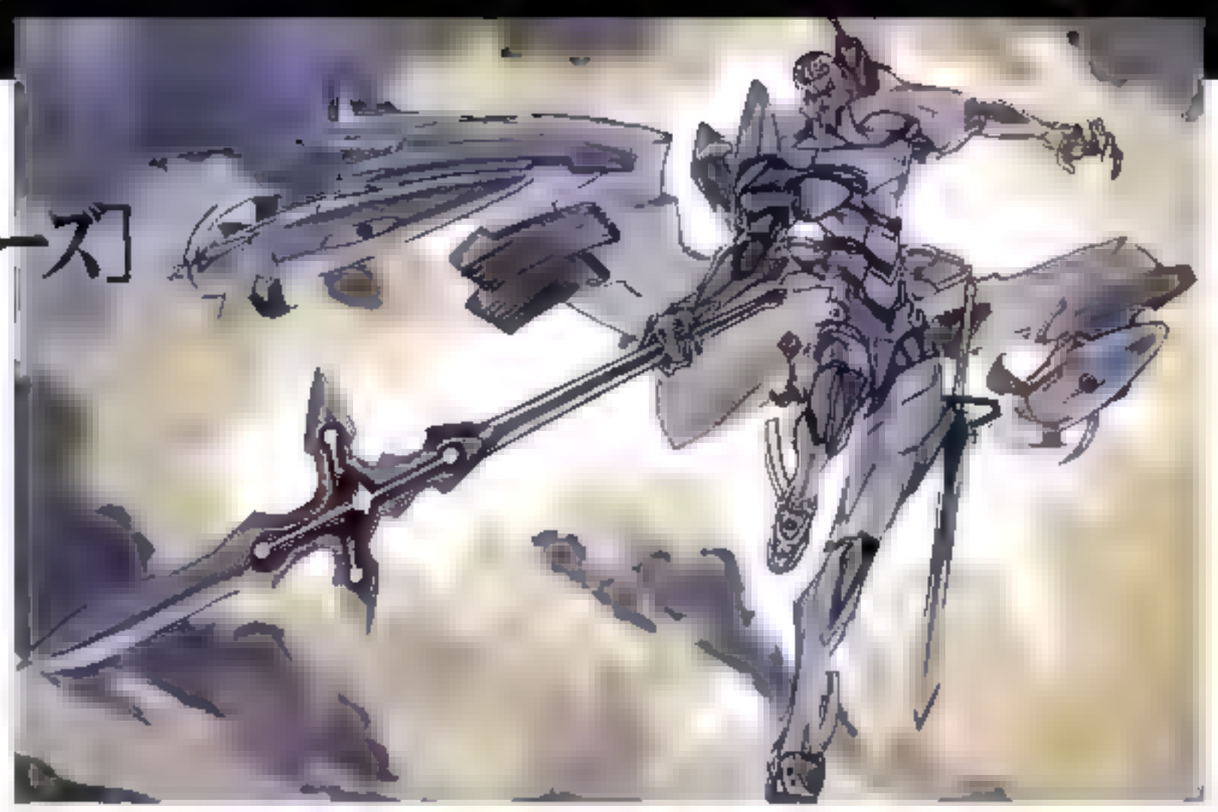


3.アレゴリカユニット分離形態

アレゴリカユニットと弐号機本体の分離、再合体はほぼ瞬時に行われ、ストレスは皆無である。分離されたアレゴリカユニットは自動制御で正立姿勢で待機、再接続に備える。なお、N²リアクターはアレゴリカユニット側にあり、弐号機単体での活動限界はステージ1機体と変わらず5分程度である。



ラフ段階でほぼイメージが完成していることがわかる。



STAGE.3 Eva Heurtebize
[エヴァンゲリオン・ユーロⅡ・ウルトビーズ]

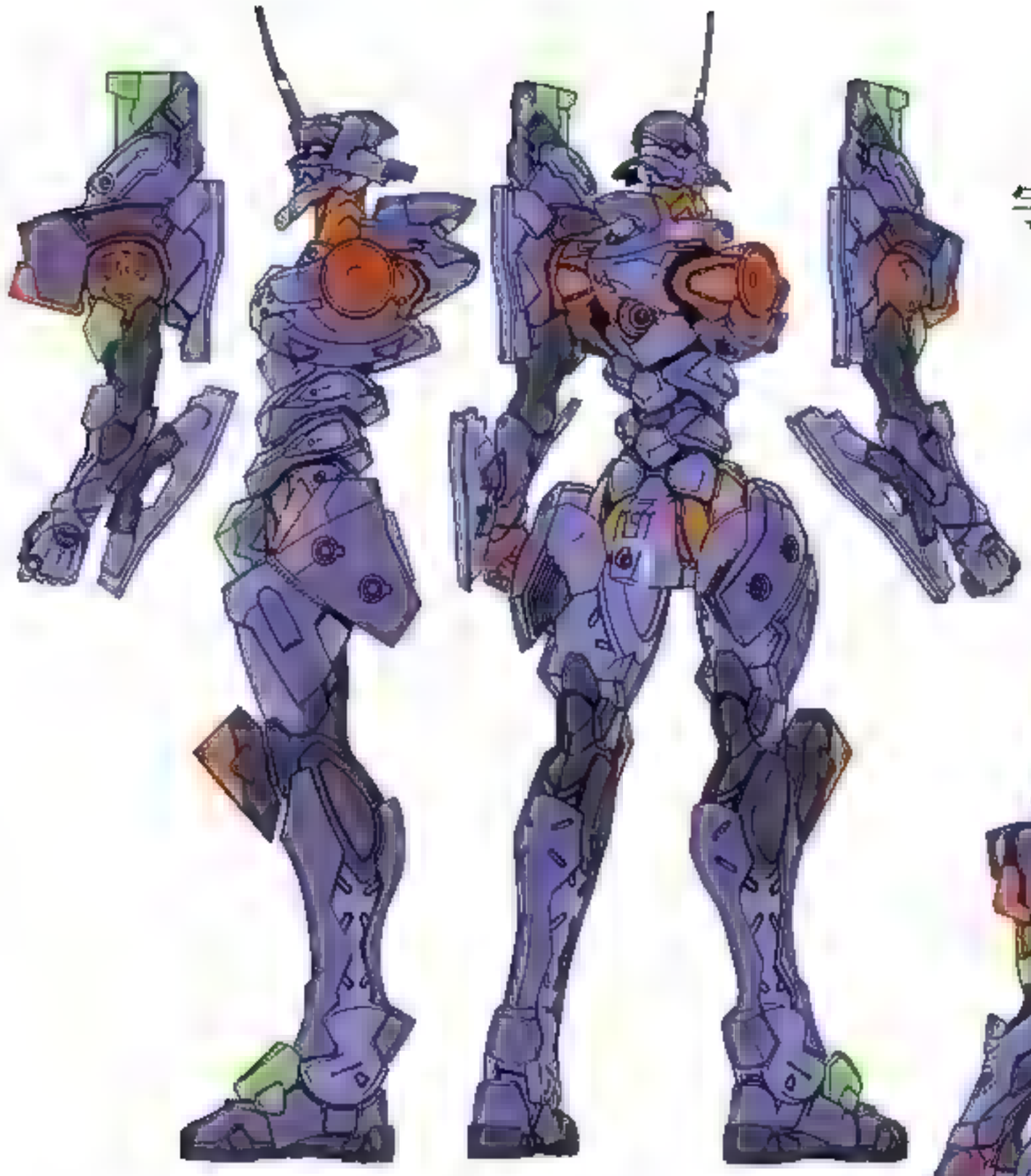
ネルフドイツで弐号機建造時に余剰廃棄されたTESTボディをベースに相田ケンスケより漏洩したネルフJPNのステージ2以降の拘束装甲、N²揚力場スラスターを加え建造した機体。仕様的にはステージ3相当と考えてよい。また、入手経路は不明だが主動力としてエンジェルキャノンと同様QRシグナムを装備、理論上は無限大の出力を有すると思われる。現在の所、QRシグナムを介してのアルマロスからの精神汚染は見られない。主兵装は巨大なランス。先端部に情報窓が設置されておりATフィールドの発生が可能である。
ユーロⅡという呼称はネルフJPNが便宜上付けた仮称であり、正式名称はエヴァンゲリオン・ウルトビーズが正しい。ジャン・コクトーが創造した天使より名付けられた。ウルトビーズは光を反射する硝子の板を背負っている。

宇宙に鼓動を奏でる最強のエヴァンゲリオン

STAGE.∞

[スーパーエヴァンゲリオン]

S²機関を出力機関としてだけでなく、エヴァというシステムの根幹として再構成された究極のエヴァンゲリオン。それを形作った設計図は、碇ユイのシンジたち次の世代を担うチルドレンへの想いなのかもしれない。



1

1.スーパーエヴァンゲリオン4面図

ステージ1エヴァンゲリオンと比べて頭身が伸び、身体比率が良くなっていることがわかるだろうか。S²機関を取り戻し、エヴァ自身が拘束具を作り替えたことで外観も充実し本来の体型に近づいたと思われる。

エヴァンゲリオン初号機はゼルエルよりS²機関を捕食、無限大と思われる巨大な出力を獲得したが、機体の剛性、出力変換、廃熱などに問題があり改修の必要が生じた。最初の改修はステージ2改修と呼ばれ、機体の追従性をあげることと、ATフィールド兵器(マゴロク、F型装備)の運用装備、戦自兵器とのリンケージの共通化などを主体に行われた。今回、行われる予定であったステージ3仕様改修(通称:スーパーエヴァンゲリオン)では、ゼーレから鹵獲した量産機より移植した補機類を中心にS²機関からの出力変換効率を改善、新型拘束具と各種機動装備の導入が目的であった。だが、カトル襲撃戦により初号機F型改は大破、初号機自身による独自修復を始めてしまう。

自らの意志で身体構成を作り替え、S²機関の運用に最適化したエヴァンゲリオン初号機。ネルフ本部技術部は、それまで検討していたステージ3改修案を捨て、変貌を続ける初号機に現場合わせでの対応を迫られた。予想を超える初号機の進化に合わせるため、実証中のステージ4以降に用いられるはずだった数々の実験装備をも投入せざるを得なくなったのだ。中でも大きいのは、前技術室長であった赤城リツコ博士が研究中であった量子遷移対応新型拘束具だ。それまで、従来技術を用い電気変換後に各装備に供給していたS²機関からの出力を量子ジャンプで直接取り込むのである。理論的には損失がもっとも少なく効率も高いはずであるが、運用データ自体皆無であり、その装備に関しては伊吹マヤ現技術室長の独断によるところが大きい。

新型の拘束具はそれまでのものが一体型の複合材質の積層アーマーで構成されていたのに対し、様々な補機類を搭載した電装系の固まりであり、各部にパネルラインが設けられた機械的な外観になった。一見、強度的には脆弱になったように見えるが、F型装備で取り入れられたATフィールドによる装甲強化が行われているため、実際には大幅な強化がなされたと言ってよい。また、S²機関からのエネルギー交換の際に発生する廃熱も大幅に軽減された。F型初号機の装甲は廃熱を蓄えるヒートシンクをも兼ねていたため肥大化していたが、新型拘束具では廃熱処理の必要もなく、スリムな外観となったのだ。

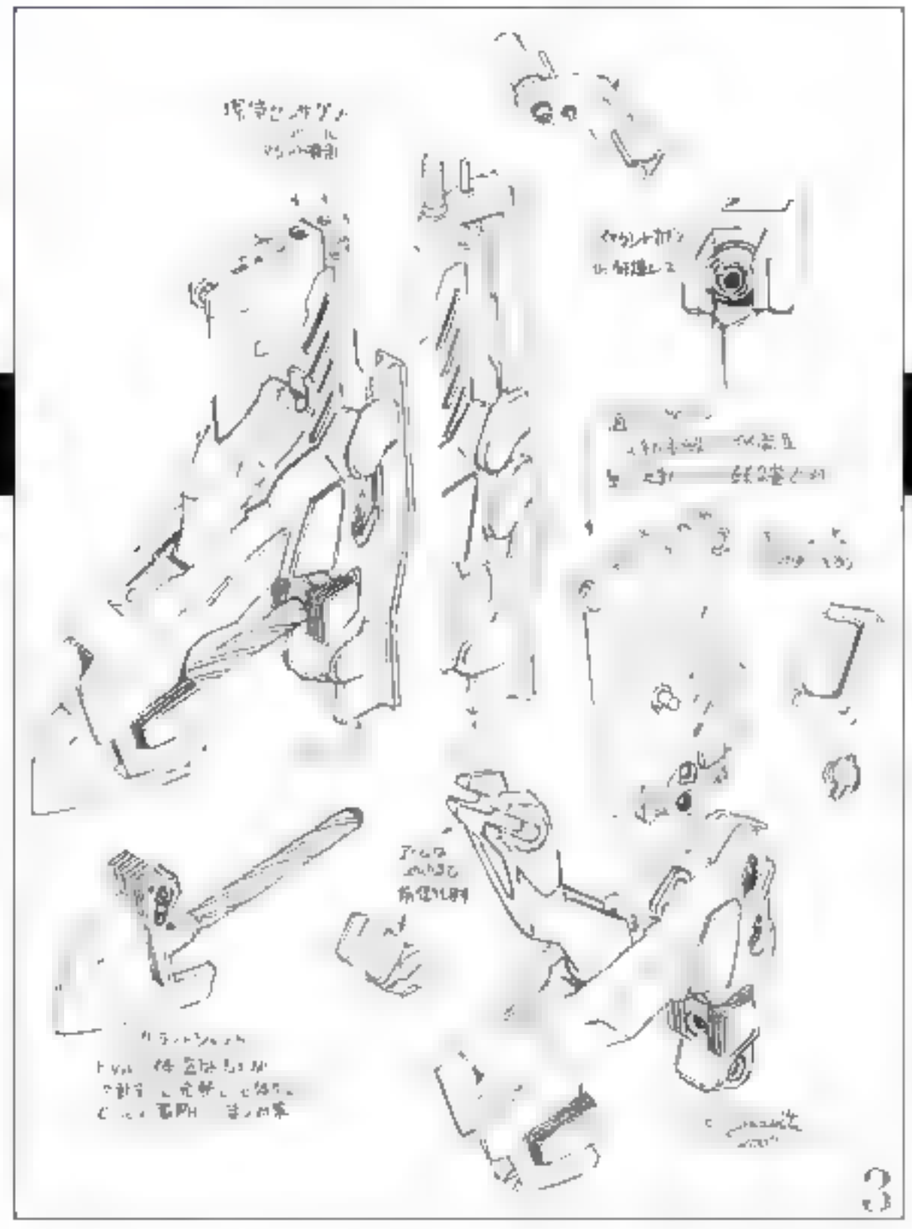
2.スーパーエヴァンゲリオン頭部

ステージ2以前と大きく変わったのは収納式の前頭部である。以前のものにも遮光式のアイカバーは装備されていたが、今回のものは前頭部自体が沈み込む形式であり打撃等の物理的な攻撃へ備えたものと思われる。メインカメラは両頬にあるインテーク状の装備であり、ツインアイ沈降時にも視界は確保される。

3.レールシステムと兵装バイロン

スーパーエヴァンゲリオンはステージ2以降のエヴァシリーズに装備された汎用型レールシステムを装備、エヴァ同士はもちろん戦自の武装も含め広い運用が可能となった。この図は不採用となったステージ3用の兵装バイロンだが、兵器スペースをなくし、完全なセンサーブロックに変更されたことがわかる。

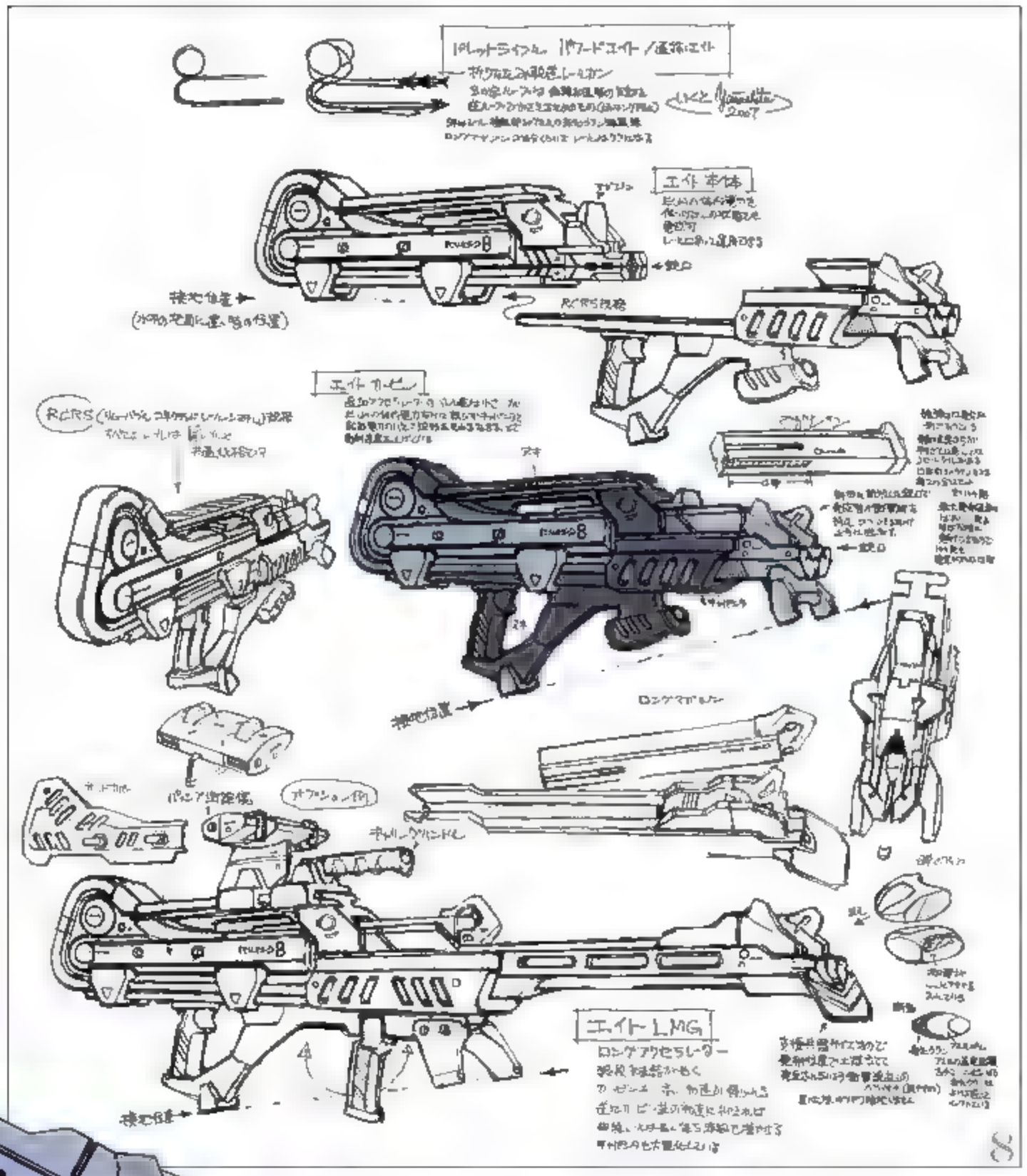
1



3

4.ステージ∞用レールシステム

タンブラーによるバイロンの保持方法はステージ3と変わらない。レールシステム自体は武器サイズに合わせ、サイズ違いのものが用意されている。



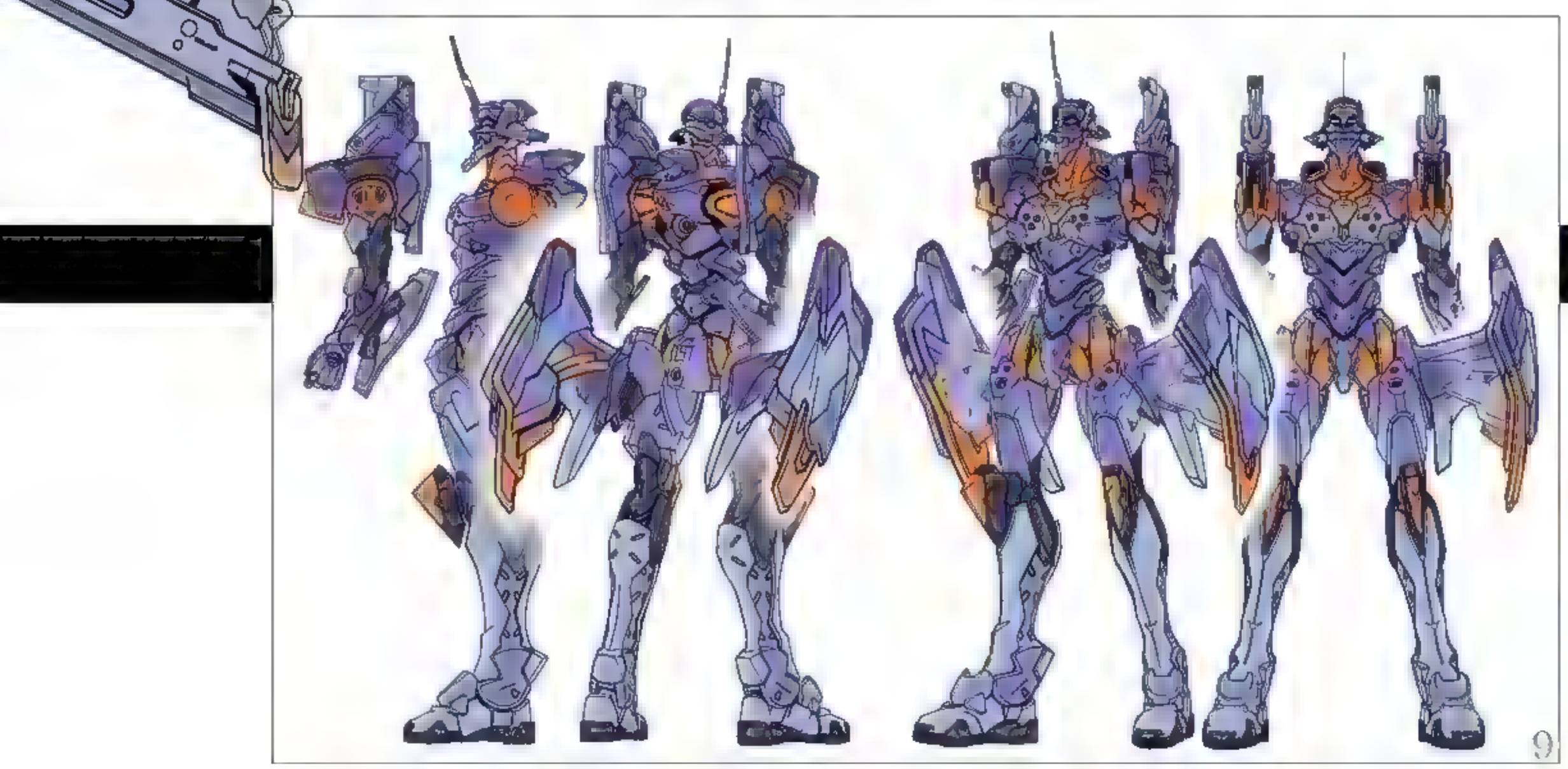
8

8.新型パレットライフル パワードエイト

旧型パレットライフルは戦自の62口径155mmレールガンをベースにサイズアップしたものであるが、砲弾運動エネルギーが60MJを割るなど対使徒用としては脆弱であった。「パワードエイト」はステージ2仕様以降のエヴァンゲリオン用にアップデートされた新型レールガンである。外観的な特徴としては8の字を描くような軌道にデザインされた電磁レールがあげられる。これは電磁レールを折りたたみ、全長を短く抑え、なおかつレール曲線部における弾丸加速時に生じるピッチングを抑えるために考案された。旧型では発射時の抵抗により弾体が蒸発プラズマ化してしまい貫通力に問題が生じたが、エイトではより効率化され、複数の弾種の使用も可能となった。電子励起炸薬弾や敵ATフィールドを相殺突破するための浸食型位相転換ATフィールドを弾頭に展開可能な情報宮装爆弾などの特殊弾が開発されている。メカユニットに各種バレル、測距儀、各種グリップを組み合わせることで接近戦から狙撃まで様々なミッションに対応可能となっている。

9.スーパーエヴァンゲリオン・ヴォルテックス［飛行装備］

ネルフ日本本部防衛戦で出現した飛行能力を有する量産型エヴァンゲリオンを初めとする敵性航空戦力に対抗するために製作されたスーパーエヴァンゲリオン用の飛行装備。先行してロールアウトしたエヴァ弐号機やエヴァEURO2の重力子を使うアレゴリックシステムとは機構が異なり、ATフィールドで空間に粗密を作りその狭間に浮かぶ。空間に乱流を発生させ、それを推進浮揚に使用する、かなり乱暴なシステムである。これはかつて試験機ナンバーだった初号機F型が獲得しようとしたフィールド偏向技術から発展したものである。だが旧初号機には飛行可能に値するだけのATフィールドを瞬間ならともかく恒常的に発生させることができずデータ蓄積のみに終わった。今回、スーパーエヴァの持つケタ外れのフィールドパワーを持って、ついに飛行を可能としたのだ。



9

10. ネルフ技術室企画時スーパーエヴァンゲリオン完成予想図

ステージ3エヴァンゲリオンとして設計されたため、基本的な構成は弐号機アレ 1リカからN²リアクター用の装装を取り除いた程度と考えて良い。むしろN²浮揚系や不整地走行用補助脚など複雑な装備がない分、弐号機より拘束具自体の製造は先行していた。

BANDAI CHOGOKIN retouched

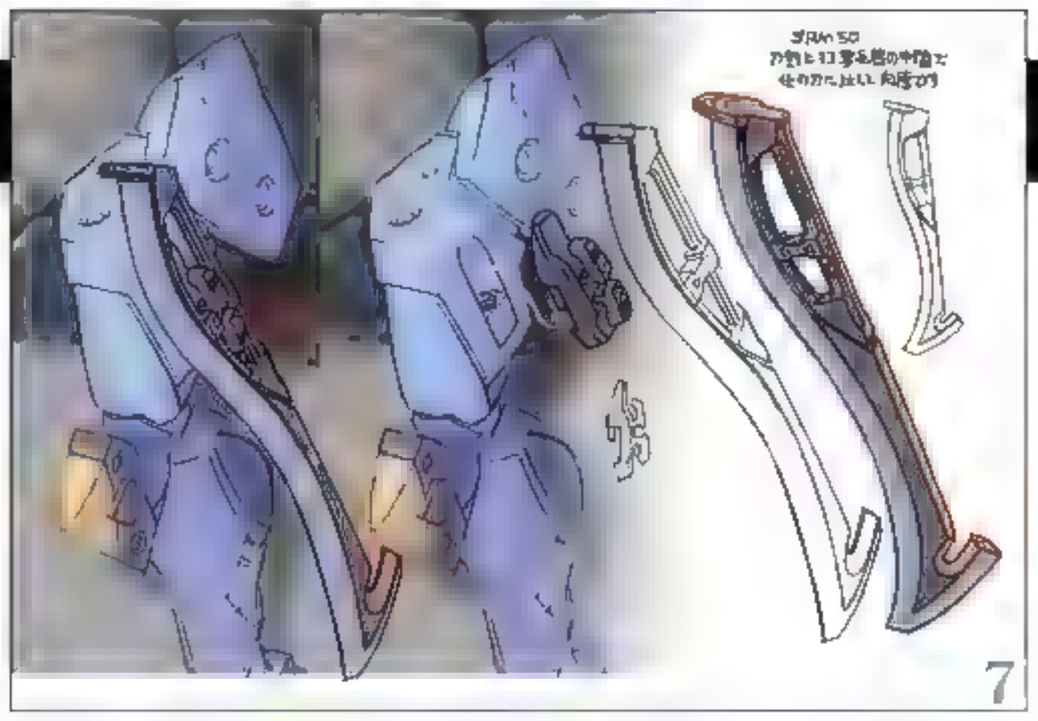
5.ステージ2 プログレッシブナイフ

初号機のS²機関完全対応化に基づき、それまでの兵器体系の見直しが行われた。スーパーエヴァンゲリオン初起動時に行われた戦闘で初号機は超高エネルギーを発生しエンジェルキャノンを破壊したが、それにともない腕部の損傷から周辺施設の被害まで様々な障害が発生した。また、その時の超高エネルギーを再度発生させることも現状では達成できず、兵器として運用するには心許ないものであった。ステージ2以降の兵器群は「制御でき効率的な攻撃」が行えるように企画されたものである。今回、対カトル戦で使用した新型プログナイフはS²機関の超大な出力を利用してブラックホールを発生、ホーキング輻射による恒星表面以上の超高熱を発生する超兵器である。

BANDAI CHOGOKIN

6.新型ハンドキャノン KEG46R

腰部アーマーに懸架される新型兵装。国連軍に貸与後、モスボールされていたやまと型戦艦の主砲を転用した火薬式の単装加農砲。砲身自体は旧世紀の産物だが、推進部をラムジェットに変更するなど近代化改修を受けている。運用実績の少ないビーム兵器、レールガンと比べ信頼性が高いことが考慮され採用された。なお弾頭にはATフィールド兵器特有の装備である情報宮も一応設けてあるが、遠距離でのATF浸食効果は確認されていない。パイロットが熟練すれば弾頭に発生するであろうATフィールドによるホーミング効果も期待されている。



7.SRM50

腰部アーマーのスリットに兵装別の接続ジョイントを接合し、武装を懸架する。新型の打撃武器「SRM50」はステージ1エヴァの使用したスマッシュホークに代わるもので、超分厚い刀身で相手を叩き斬る鉄塊系の武装だ。

スーパーエヴァンゲリオン対応型新型兵装ビル起動!

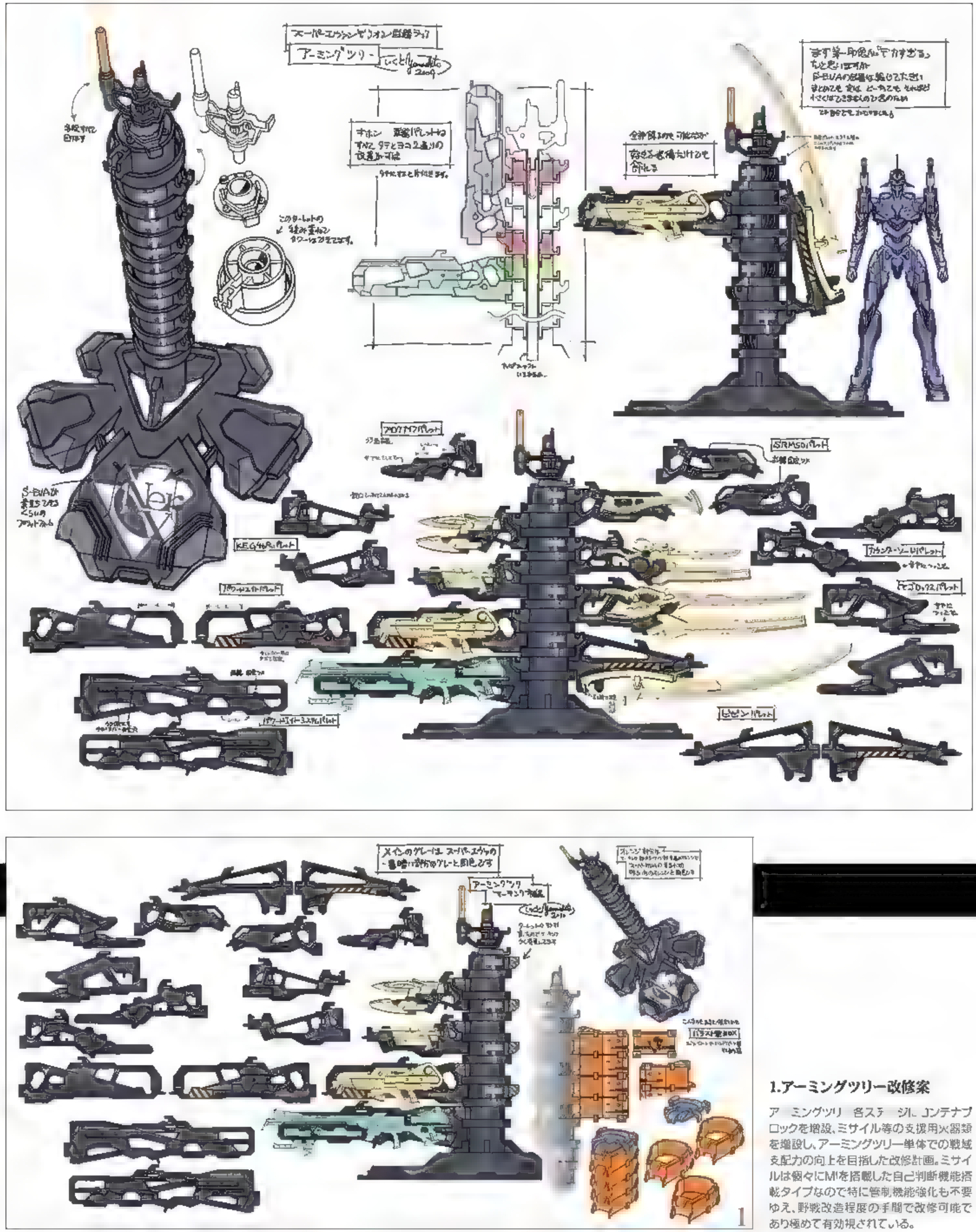
A new weapon storing building "ZZ02"

[新型兵装ビル アーミングツリー]

超合金製の奇妙な木「アーミングツリー」。それはスーパーエヴァンゲリオンにATF兵器を供給するために造られた新型武器庫。高速で機動、どこまでもスーパーエヴァに追従し、自ら火器を繰り出す。兵装ビルは機動要塞へと進化した。

modeled by TATSUYA YONEZU

ネルフJPNの第一次設備整備計画「ZZシリーズ」の一環。旧ネルフ時代に作られたエヴァンゲリオン用武装ゲージ「兵装ビル」に対使徒戦の戦訓を取り入れ新たに配備した新型兵装ビルがこの「アーミングツリー」である。タワー状の武器支持架に複数の武器を懸架する。旧兵装ビルはサイズ、形状によって搭載できる武器が限定されていたが、本機は容量、自由度ともにはるかに拡充されている。また、基部に自立駆動系としてN²リアクターを装備、単体での走行をも可能としており、有事にはネルフ本部基地「走輪機動指揮棟(ZZ01)」用の移動レール上を電磁浮揚走行し、戦域に超高速で展開する。なお、ATフィールドの使用こそできないが搭載兵器のタワー上での運用も理論上は可能であり、緊急時の自衛使用も期待される。ラジオコードはZZ02であり、ZZ01と連携することで機動要塞としての運用も可能だ。ZZ01とZZ02複数機によるコンビネーション形態は重厚であり「ネルフの無敵城」のニックネームで親しまれている。



1.アーミングツリー改修案

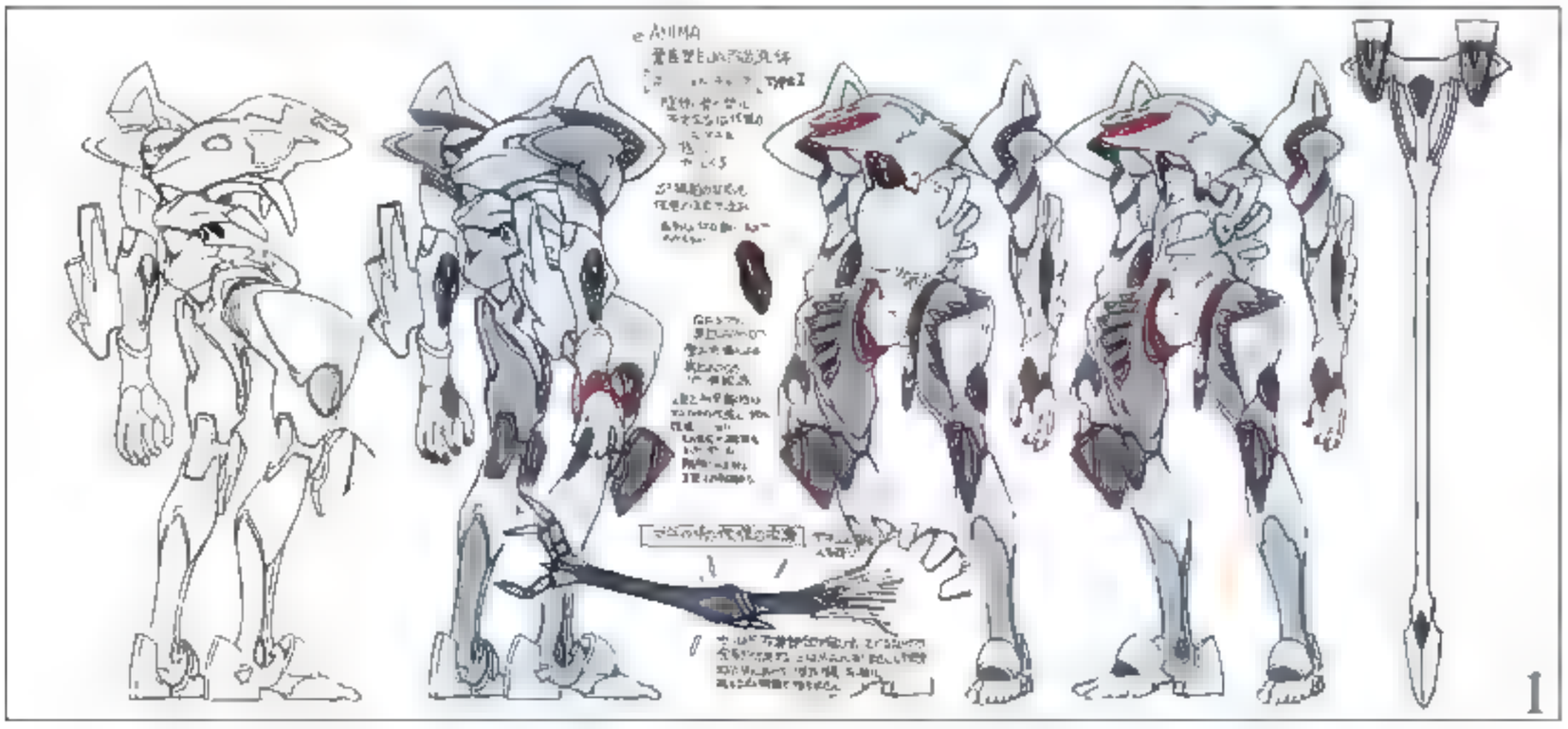
アーミングツリー各ステージにコンテナブロックを増設、ミサイル等の支援用火器類を増設し、アーミングツリー単体での戦域支配力の向上を目指した改修計画。ミサイルは個々にMIを搭載した自己判断機能搭載タイプなので特に管制機能強化も不要ゆえ、野戦改造程度の手間で改修可能であり極めて有効視されている。

堕天使アルマロスが率いる新たな脅威

Crowd of enemies

[アルマロス/エンジェルキャリヤー/ロンギヌスの槍]

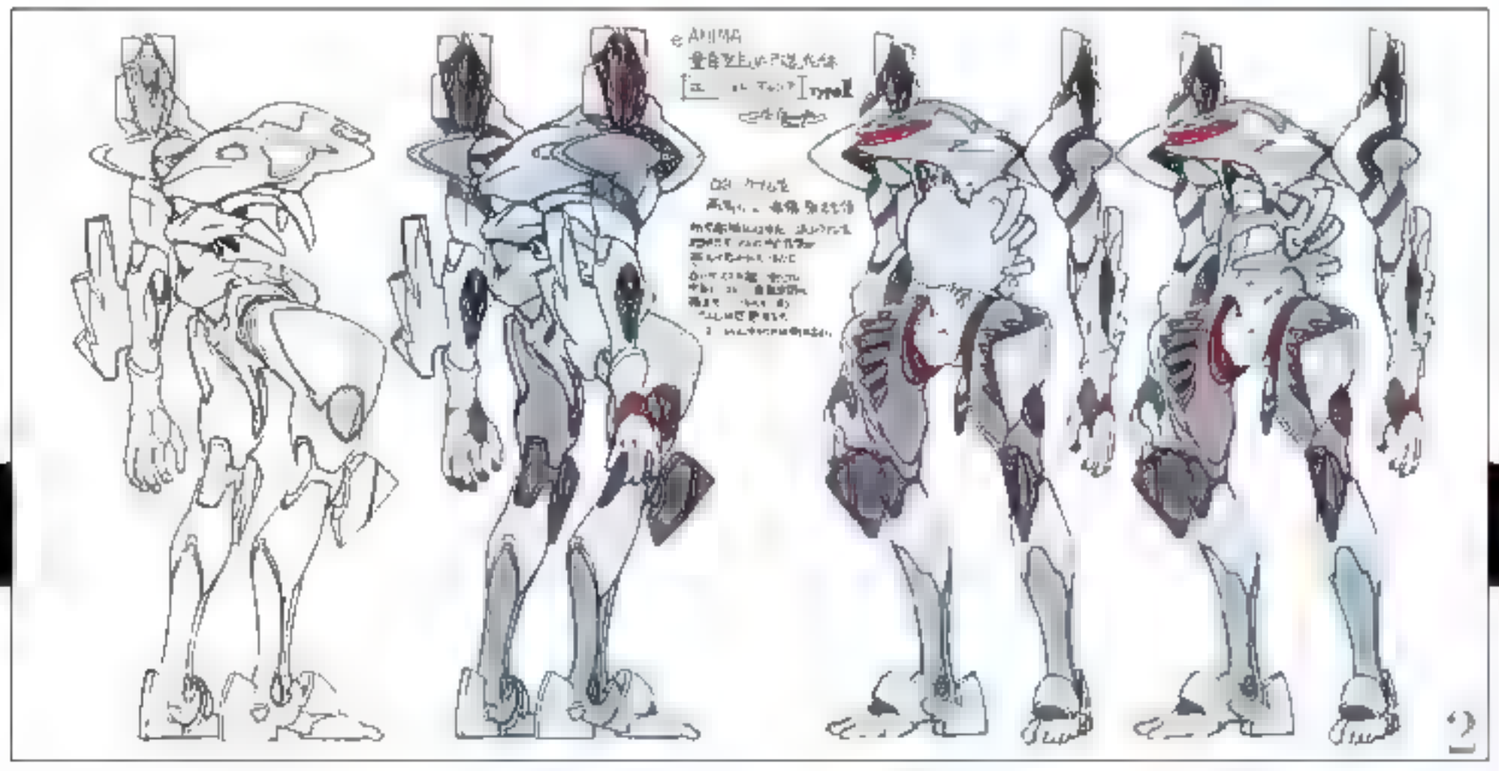
初号機を超える巨大な体躯を有する黒いエヴァンゲリオン＝アルマロス。破壊されても屍鬼と化して復活するエヴァ量産機＝エンジェルキャリヤー。シンジたちを襲うのは、悪夢の如く苛烈な衝撃。



1

1.エンジェルキャリヤー

ネルフ日本本部攻防戦時に9機のエヴァ量産機の残骸を捕獲したが、そのうちの1機の残骸が行方不明になる事件があった。ゼーレの策動を意味するものかも知れず、その事件は隠蔽され忘れられようとしていた。今回出現した「エンジェルキャリヤー」は量産機の残骸をベースに腹部に歳状のコンテナを装備したものである。本来そこにあったダミープラグ等の制御系やS²機関を含む駆動系は欠如、代わりにQRシグナムと呼ばれるウロコ状のパーツが加わっている。これと同じ物はアルマロスの体表にも存在し、なんらかの関連があると推測される。なお、使徒の確認反応である「パターン青」は検出できなかった。エンジェルキャリヤー自体には武装はないようであるが、腹部の繭には未成熟の使徒級兵器の一部が格納されていて、使徒と同等の攻撃力を有す。今回、出現した機体には「サキエル」が収納されていた。



2

2.エンジェルキャリヤー2

カトル襲撃戦に現れた「エンジェルキャリヤー1」を再構成した個体であると思われるが、出力、機動性ともに大幅に改良を受けている。キャリヤー1と同じく、使徒反応である「パターン青」は検出されない。固定武装はなく腹部に収納した繭内の使徒の断片から攻撃を繰り出す。QRシグナムは2枚に増えているが、これが出力等に関わっているかどうかは確認できていない。このあと、腹部の繭違いのバリエーション機体が複数機出現しているが、機体形状はこのエンジェルキャリヤー2がベースと思われる。最後期の機体は腕部に翼が増設され飛行可能となった。

3

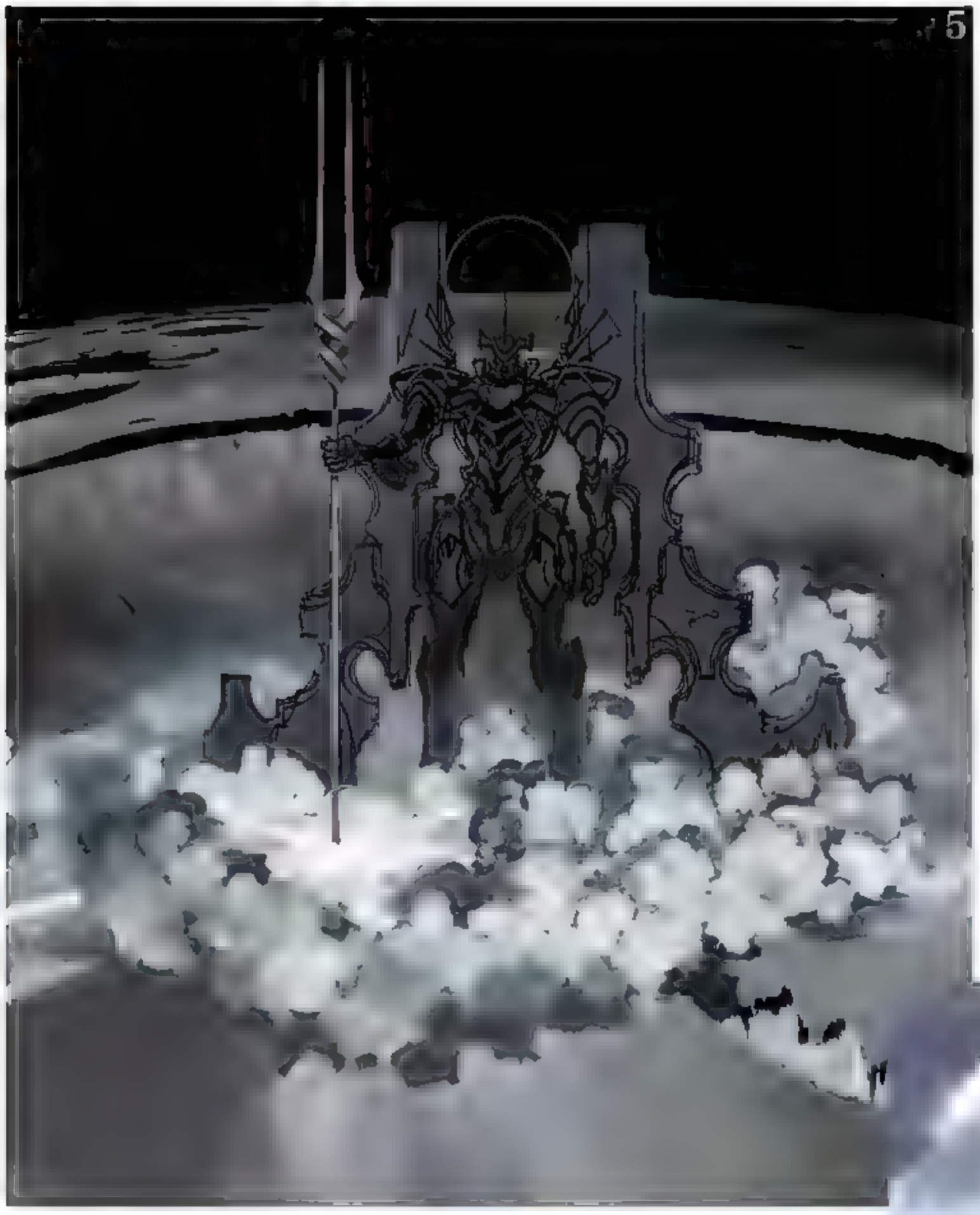
3.QRシグナム

エンジェルキャリヤーに存在するウロコ状パーツ。アルマロスにも同様の器官があり、それを介しエンジェルキャリヤーに影響を及ぼしていると思われる。S²機関などそれに類する駆動系を持たないエンジェルキャリヤーが使徒級の攻撃力を発揮する要因ではないかと推測される。

4.巨人の谷

アフリカ某所にある古の遺跡。そこには化石と化した巨大な人体が林立する。遥かな太古に無数のエヴァンゲリオンが戦い、滅しあった名残とされる。その勝利者はアルマロスなのであろうか?

4

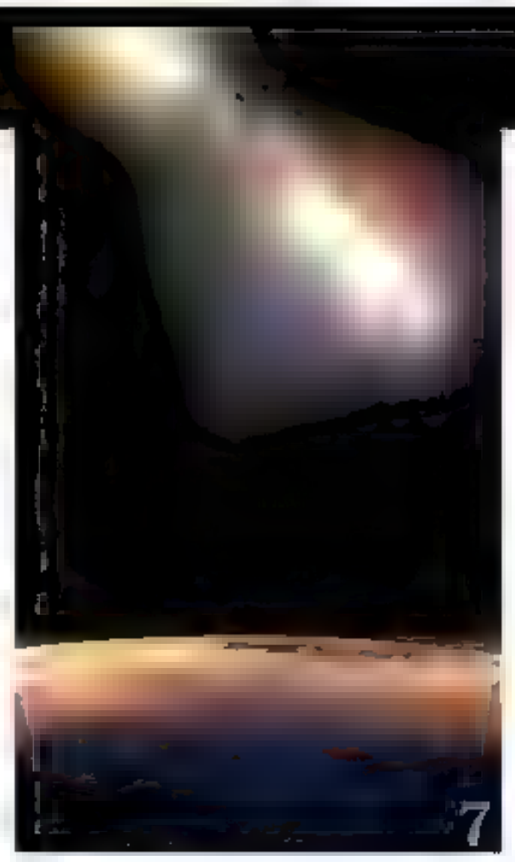


5.アルマロス

月面に現れた巨大な漆黒のエヴァンゲリオンを呼称する際のコードネーム。旧約聖書に記載された堕天使の一人より取られている。アルマロスは人間に魔術や妖術を無効化できる護符の知識をもたらし、秘密とされる神の名を伝えた大罪人であるとされる。
体表にはQRコグナムと呼称されるウロコ状のプレートが多数ある。これはエンジェルキャリヤーにも存在する器官であり、両者との間のつながりを連想させるが現在のところ不明である。背部の2対の羽状のブロックは大地から生え、アルマロスの体を支えている。だがアルマロス自体は大地に固定されている訳ではなく自由に移動可能である。分身であるのか、僚機であるのが不明だが形状がアルマロスと似ている黒い2機のエヴァ（ネルフでのコードネーム＝ヴィクター）を従えている。ヴィクターの形状は1枚羽のアルマロスといった趣であるが サイズは初号機と変わらない。2機のヴィクターで次元の扉を形成し、エンジェルキャリヤーを使い転移攻撃をしかけてきたことがある。

6.アルマロス頭部

頭部は前面がゴーグルに覆われているが、ツインアイタイプであり、初号機の頭部と実は構成は似通っていると思われる。直列に並んだツノと基部にある発光穴は下いくとによる初号機の初期案のひとつにあったディテールでもある。

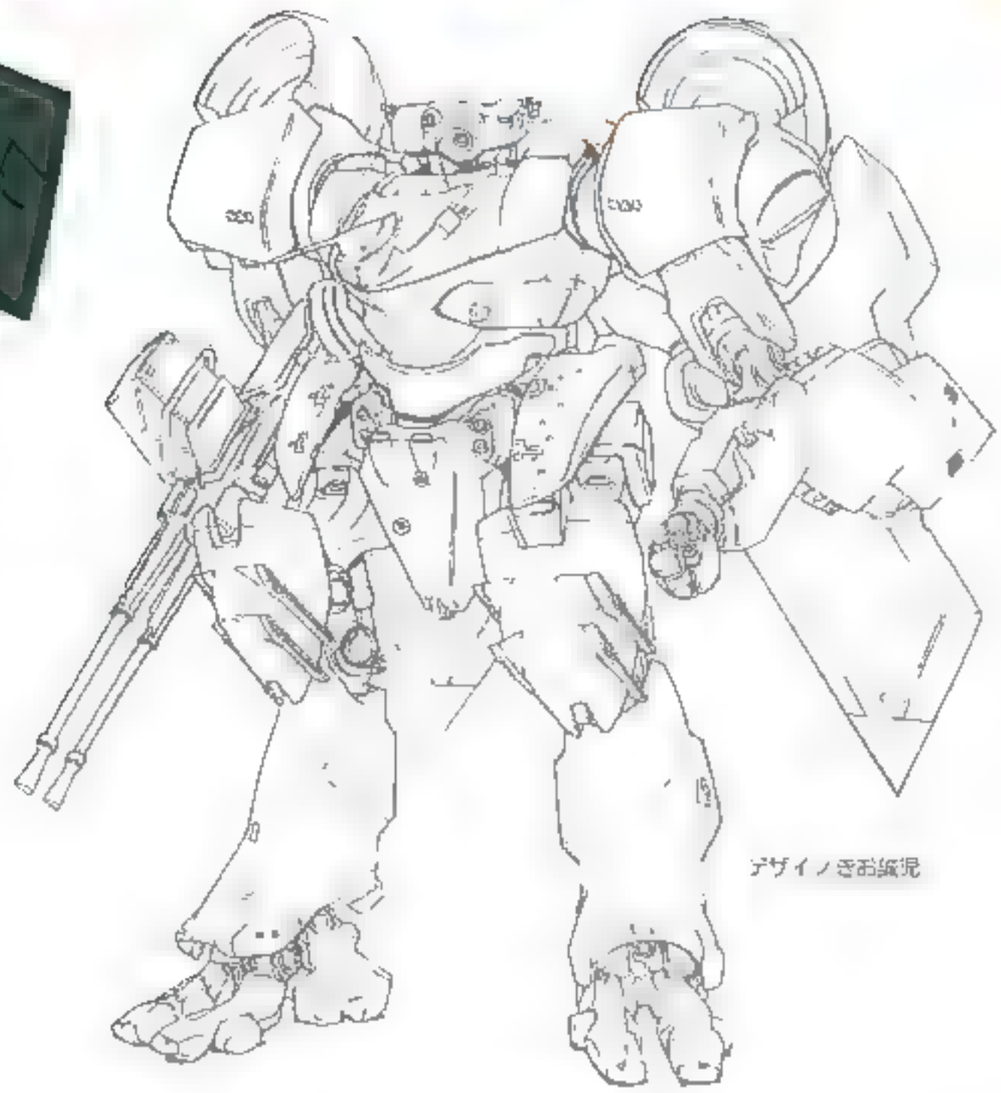


7.ロンギヌスの槍

ネルフはゼーレによるネルフ本部侵攻のおり、複数のロンギヌスの槍を入手した。だが、このロンギヌスの槍は両刃ブレード状の武器への形態変形機能を加えたレプリカであり、形質が安定せず崩壊が始まっていた。これはゼーレが施した ネルフ本部侵攻が失敗し使徒およびエヴァに対する最終兵器と考えるロンギヌスの槍が回収された際の安全処置と思われる。オリジナルのロンギヌスの槍は対アラエル戦時に投擲され 長く月軌道上にあったがアルマロスに捕獲されてしまう。アルマロスによって地球に放たれたロンギヌスの槍は長大なランスへと姿を変え、地球の圧縮を始めた。地球圏突入時にネルフのEVAエヴァや各国宇宙軍の迎撃を受けるが生き物のごとく反応し、すべての攻撃を退けてしまう。
イラストは大気圏上層をかすめ燃え上がるロンギヌスの槍。

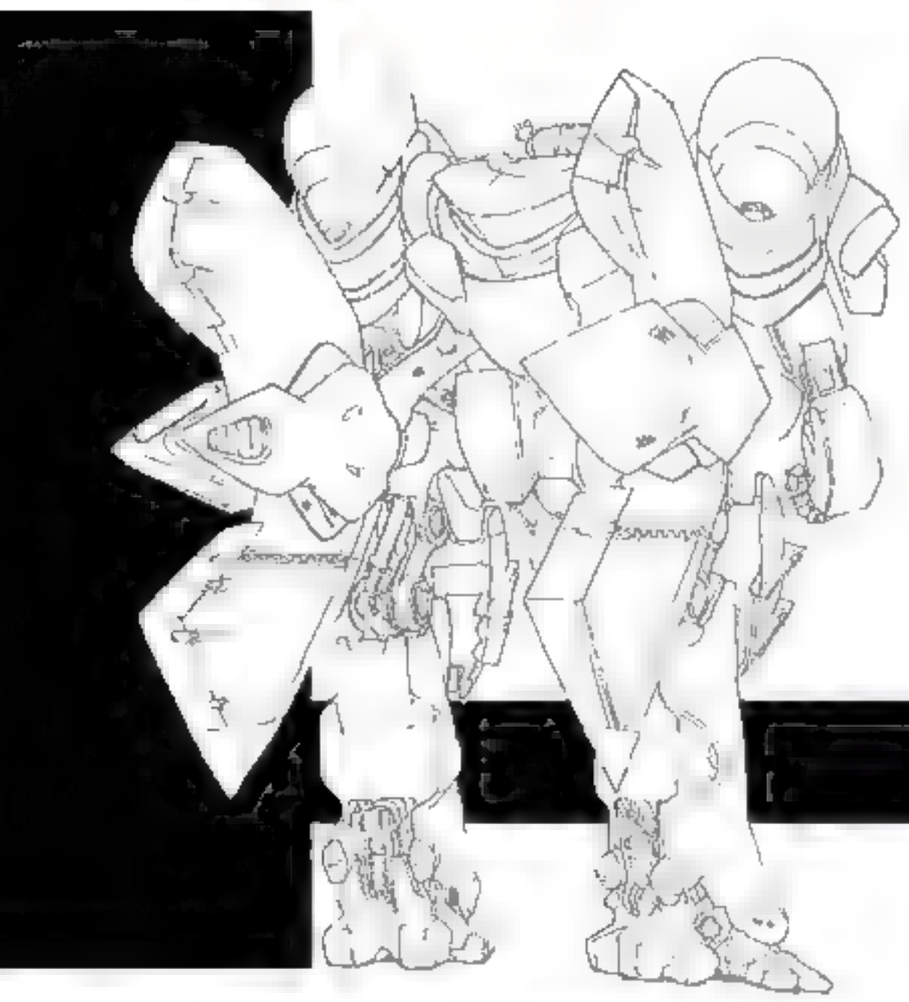
N²リアクターが兵器体系を一新、戦自は使徒級兵器と殴り合える力を得た

EVANGELION



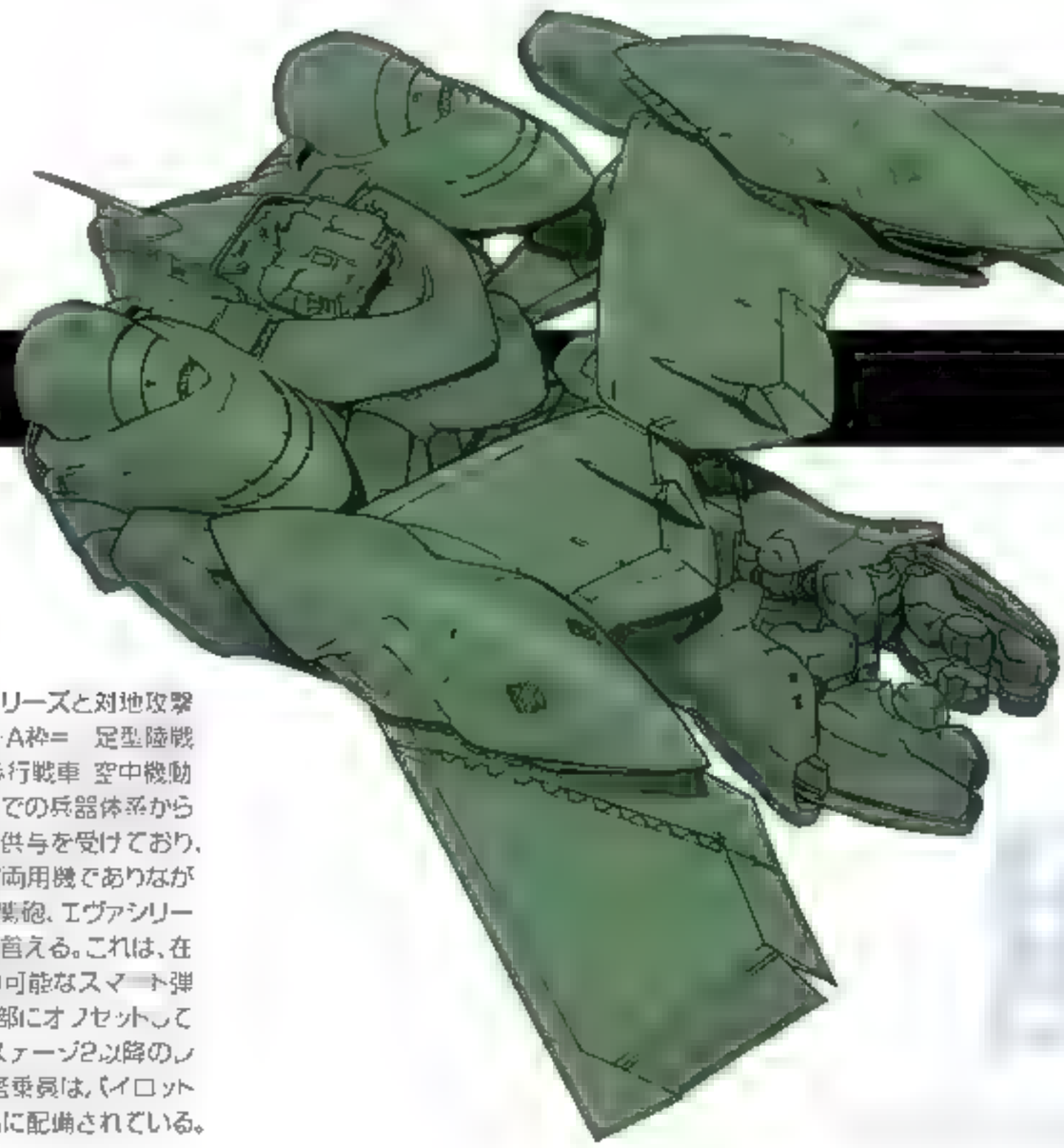
デザインラフ

ネルフJPNとの相互協定は戦自に著しい技術的な進歩をもたらせた。J・Aシリーズの完成型である「あかしま」の配備を皮切りに先端兵器が次々にロールアウトする。だが、それすらもロンギヌススフィアの脅威の前では蟷螂の斧なのかもしれない。



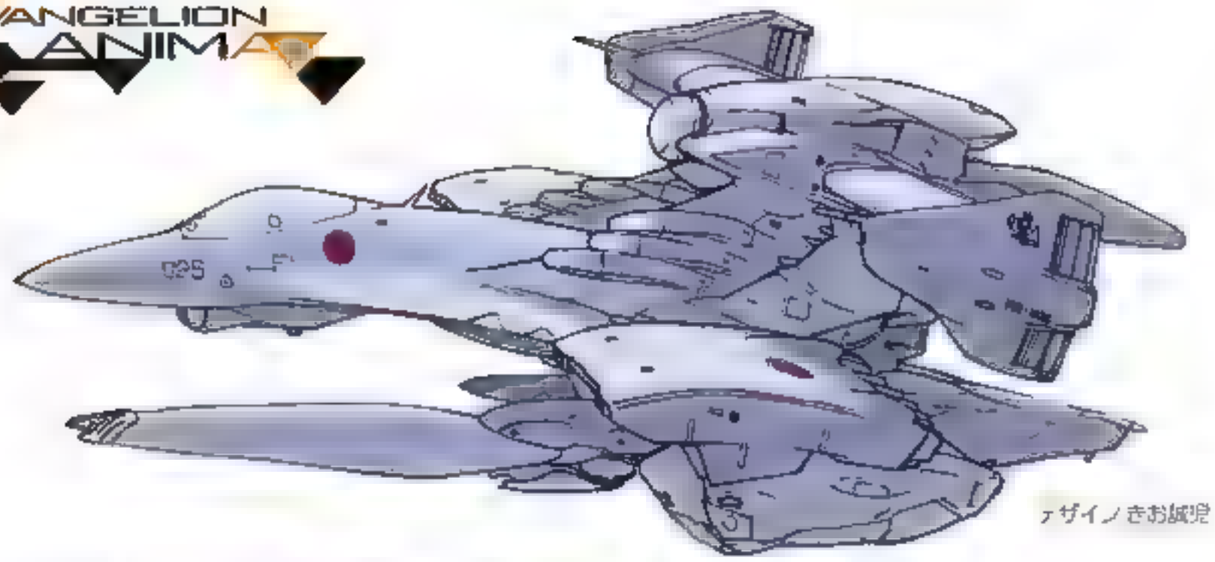
[あかしま/メーザー砲車/プラティパス2]

Japan strategic self-defense force

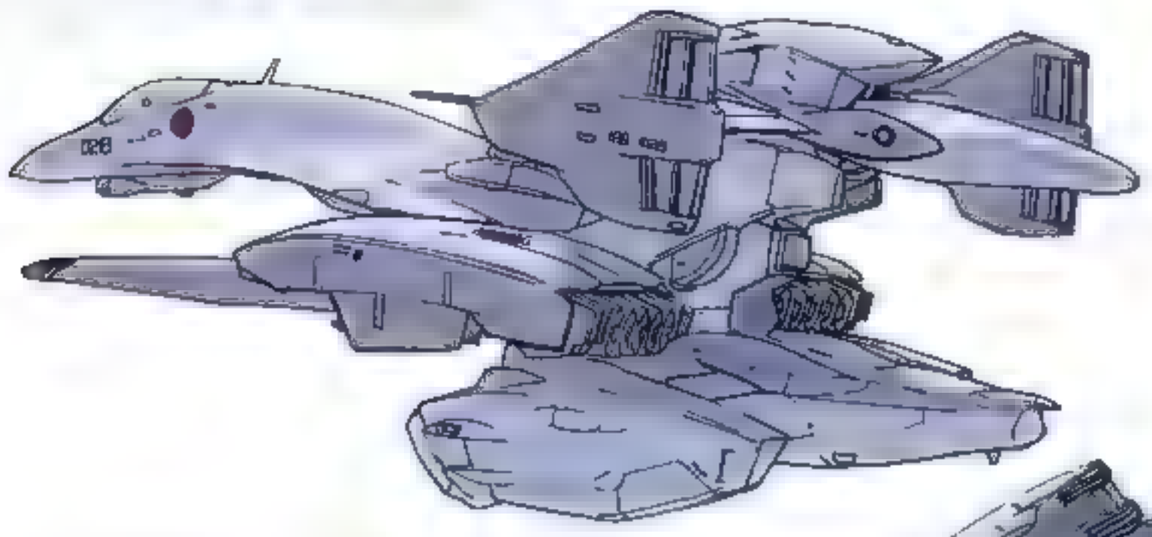


戦略自衛隊・四式統合機兵 あかしま

戦略自衛隊が使用する新型対使徒用兵器。開発中であった陸戦兵器「J・A」シリーズと対地攻撃機「VTOL」シリーズの両方の特徴を備えた後継機である。一応、用兵的にはJ・A枠＝二足型陸戦兵器に区分されるが、実はまったく別系統の兵器といってよい。陸戦時は二脚歩行戦車、空中機動時にはグランドエフェクト機として機能する全領域可変機動兵器であり、それまでの兵器体系から離れた新基軸のカテゴリーに位置するものだ。全面的にネルフJPNから技術供与を受けており、大出力かつ安定性の高いN²リアクターを搭載、余剰出力を利用して陸上航空両用機でありながら陸戦兵器に勝る装甲と火器を装備している。主要兵装は人薬式の二連装機関砲、エヴァシリーズがレールガン等次世代兵器に移行しているのに対し非常に保守的な選択と言える。これは、在来兵器である火薬式機関砲に最新技術である威力の高いプラズマ型人薬と誘導可能なスマート弾頭を導入することで、信頼性と高性能を勝ちえんとしたための選択である。背部にオプションとしてある主翼のハードポイントに各種兵器を装備可能であるが、エヴァンゲリオンフェーズ2以降のシンクロシステムとは若干仕様が異なり、装備の完全共有はできない。戦自型の搭乗員は、パイロットとガンナーの2名構成だが、指揮機能を備えた教導仕様の3座機がネルフJPNに配備されている。

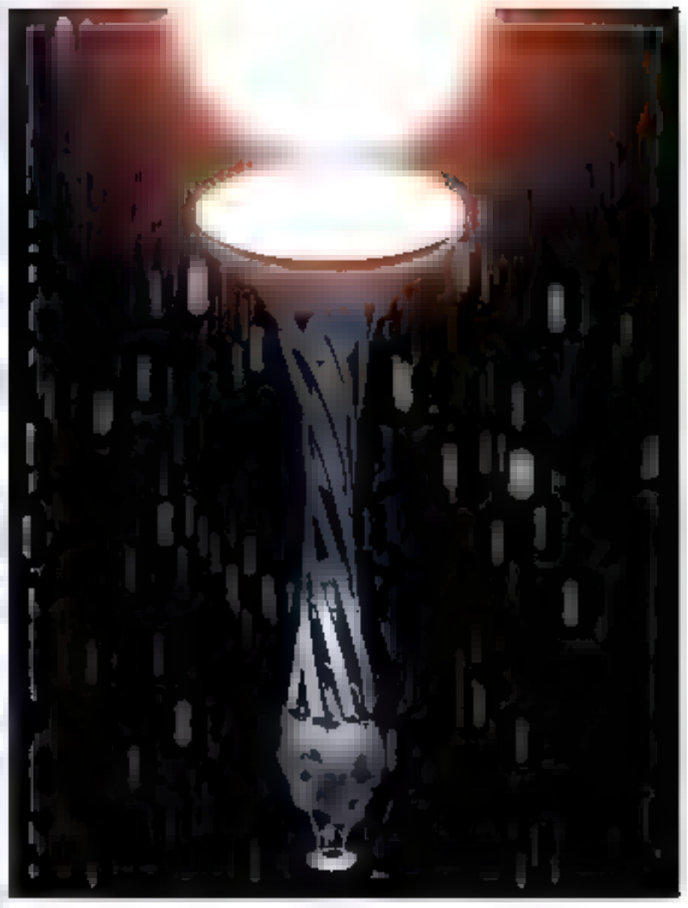


デザインきお城児



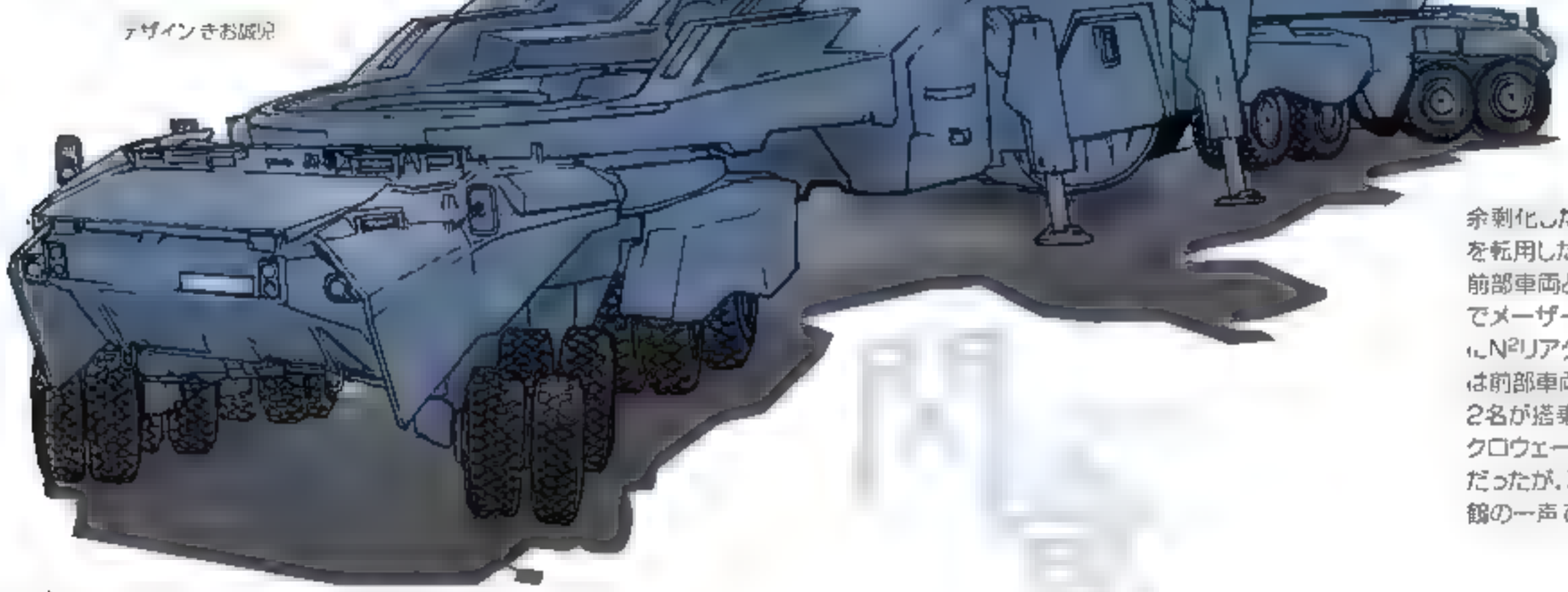
Su-27 SMN2 プラティパス2

余剰となりモスボール保存されていた旧ロシア軍のSu-27フランカーにネルフJPNと戦自技研が共同開発したN²リアクターを組み込み再生した機体である。対使徒戦には高価な最新の電子透明化技術も有効とはいえず、それならば安価で強靭なフランカーの機体フレームに、最新鋭のN²リアクターの超大な出力を組み合わせるのが合理的と判断されたのだ。N²の出力があれば、多少の機体性能の優劣などさして問題ではない。N²リアクター自体の機能・特質については公表されておらず、なんらかの力場を発生させ、それを揚力・推力に利用していると思われる。ただ、力場自体の微細なコントロールは難しいと見えて機体制御には後部T字翼の姿勢制御スラスターを使用しているようだ。
主要兵装はエヴァシリーズでも実績のある陽電子砲を採用。これもN²の高出力があって初めて装備可能となった。また、特筆すべき点として、N²リアクターの運用時に発生する斥力力場を使用した防御シールド装備があげられる。なお、プラティパスは「かものはし」の意であり、先代にあたるスーパーフランカーから引き継いだ愛称である。



アテンの鉄槌

6100トンの小惑星をロケット後方のプッシャープレート上で超小型核爆弾による核爆発を繰り返し発生させ その衝撃で推進する。巨大な小惑星の質量そのものを武器とする大質量兵器だ。実際にダイダロス計画、オリオン計画などで同様のシステムが検討されたが部分的核実験禁止条約締結により開発は中止された。



デザインきお城児

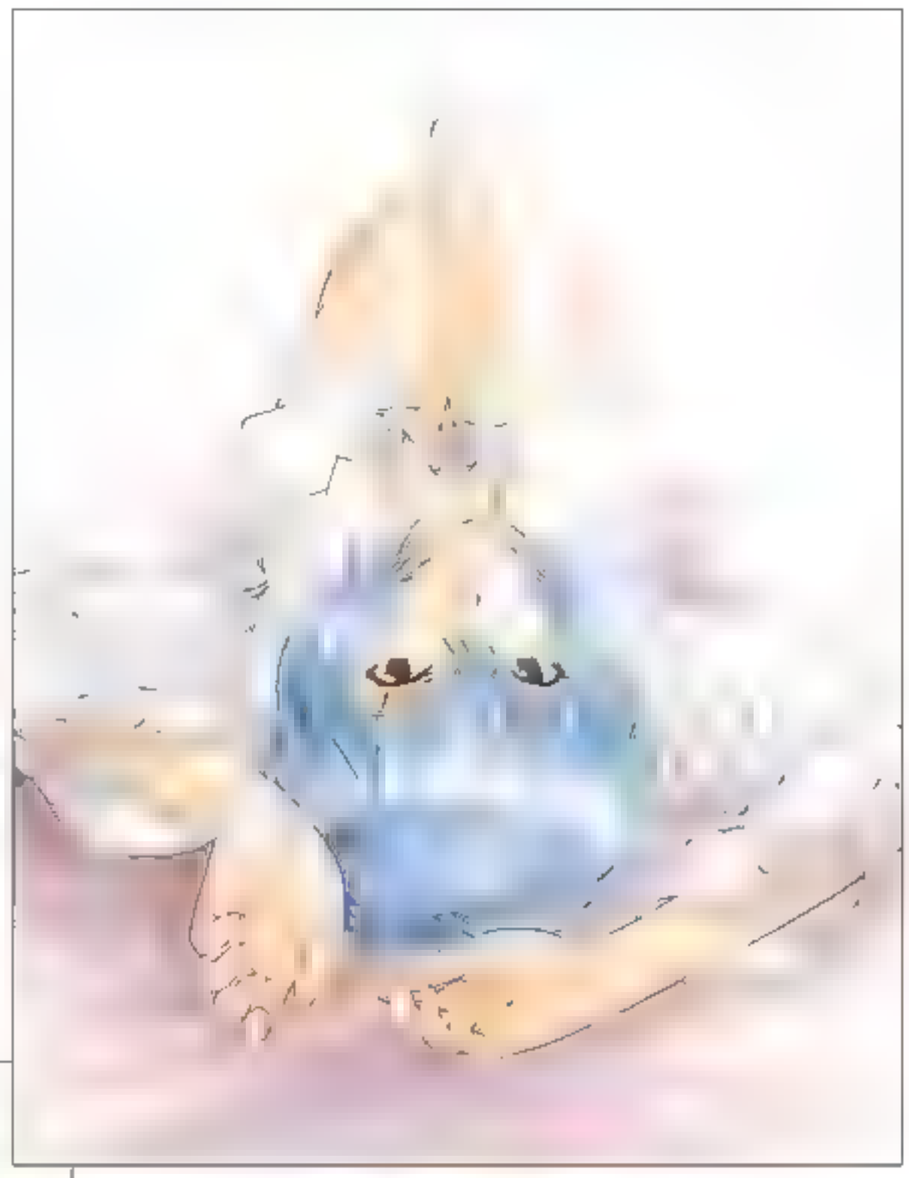
三式試製メーザー砲車

余剰化した戦自の高速走輸機動車の車体を転用した陸用車両。2両の車体を連結し、前部車両と後部車両にサンドイッチする形でメーザー砲ターレットを装備、後部車両にN²リアクターと共振筒を装備した。乗員は前部車両に指揮・砲撃員と運転・機関員の2名が搭乗する。本来はコヒーレント・マイクロウェーブ投射砲機動車と呼ばれる予定だったが、葛城司令の「舌を噛みそう」との鶴の一声でメーザー砲車に改称された。

イラスト：うたたねひろゆき
彩色　關宮 涼
(P 30-37)

Rei Ayanami
[綾波レイ]

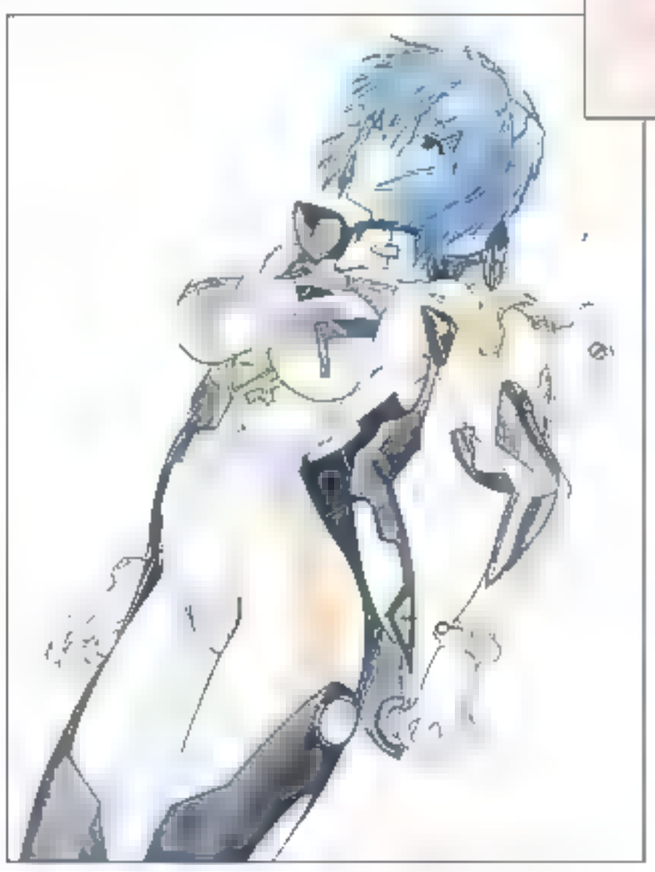
第3新東京市立高等学校に通う17歳の少女。零号機弐式F型のパイロット。No.カトル、サンク、シスと命名された3人のクローン体と精神リンクし、新宇宙戦力である00エヴァの運用にも携わるなどネルフJPNの要とも言える存在。3人のクローンたちと区別するためにNo.トロワと呼ばれることもある。

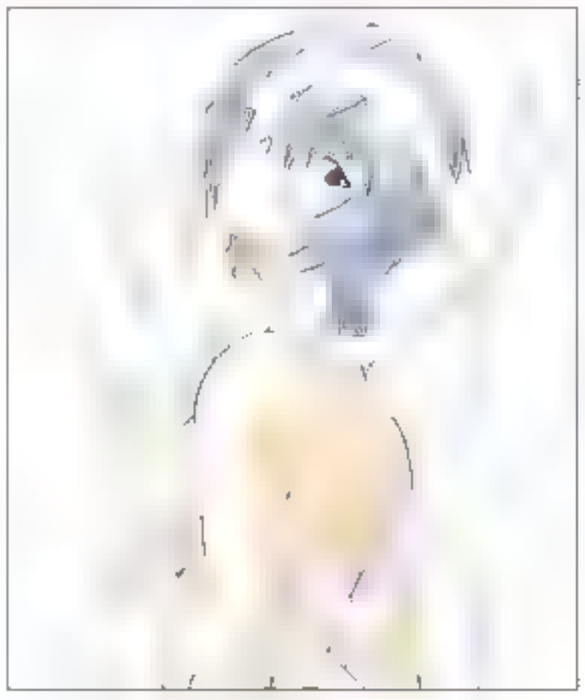


描かれなかった切片より

宇宙に赴く妹たちに
この欠片には大事な想いが詰まっています
一度も会ったこともない、見知らぬわたしの想い
日を追うごとに、託されたものは深く溢れてきます
創られた命でしかないわたしでも
魂は受け継がれていくものだろうか?
もし、そうであるならば、妹たちよ
あなたたちは孤独ではありません
2番目のわたしの想いが
きっと守ってくれる
いつの日かわたしの魂も
受け継がれていくのだろうか
さようなら、虚空に旅立つ妹たちよ

「綾波レイから3人の0-0エヴァンゲリオンパイロットたちへの手紙」





Soryu Asuka Langrey

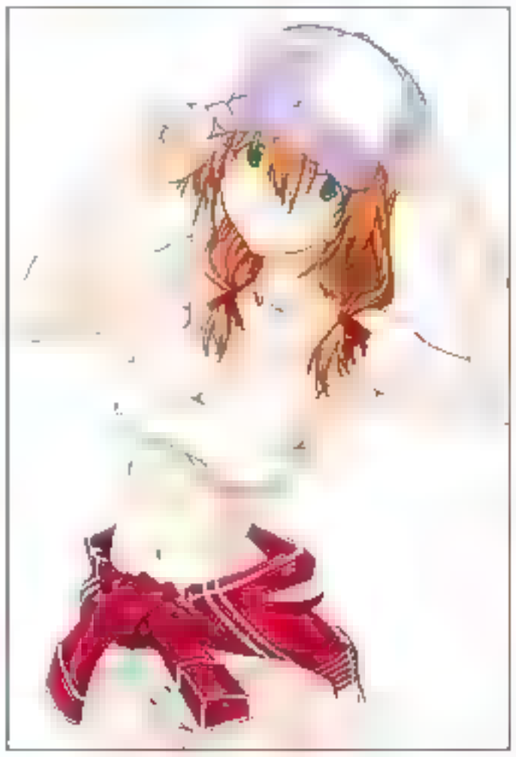
[惣流・アスカ・ラングレー]

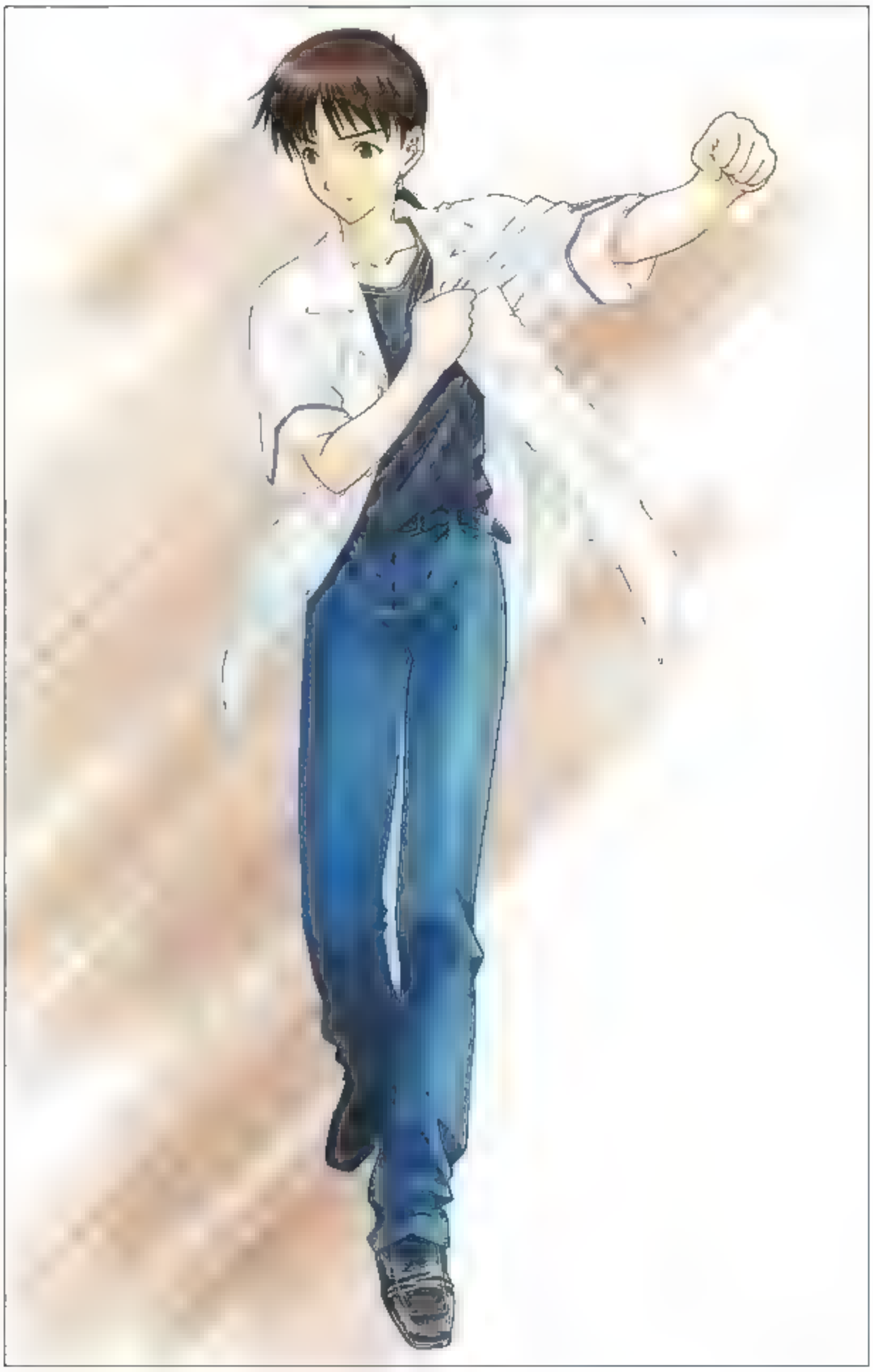
第3新東京市立高等学校に通う17歳の少女。弐号機II式アレゴリカのパイロット。ネルフ本部攻防戦で生還した自信は彼女をより安定した人格に成長させた。シンジとの距離は縮みつつあるが、支えであった碇ゲンドウを失い寂しさを隠せない綾波レイのことを思い、躊躇している。

第三世代プラグスーツ

第二世代以前のプラグスーツは各地のネルフ組織において独自に作られた物であり 機能 デザインともにまちまちで、互換性に問題があり、問題視されていた。今回配備された第三世代(ステージ3仕様)プラグスーツは00エヴァでの綾波クローン体による長期運用実績に基づき新たに製作されたものだ。大きな変更点としてはスーツの脊椎部に神経ピックアップが装備され、ヘッドセットを装備しなくてもエヴァとの連結が可能になった点があげられる。スーツ各所に設けられたインターフェイスも戦自装備との互換が図られ、様々な戦自兵器とのリンクも可能である。

新プラグスーツ開発に盛り込まれたもうひとつの重要なポイントとして、エヴァンゲリオンとパイロット間の過剰同調における同化の防止がある。対ゼルエル戦および対エヴァカトル機戦において、初号機とパイロットである碇シンジは過剰同調の結果、2度にわたり形態を失い同化されている。新スーツはスーツ表面にATフィールドが発生し、完全同化を防ぐ効果があるとされるが、あくまでもデータ上の物であり実際の効力は確認されていない。





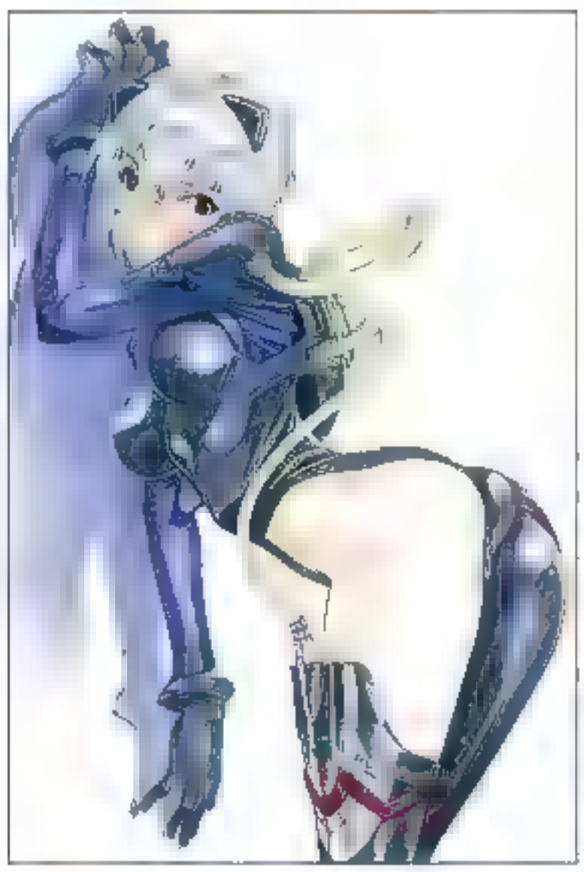
Shinji Ikari
[碇シンジ]

第3新東京市立高等学校に通う17歳の少年。0-0エヴァ・カトル機の襲撃により致命傷を受ける。LCLの中でシンジは再び体を無くし、無限の闇に漂う。闇の中シンジは幼き姿となり、在りし日の母と出会う。亡き母とエヴァを介して対話するシンジ。それが夢であったか現実であったかはわからないが、エヴァの中から母の匂いは消え、シンジは新たな力「スーパーエヴァンゲリオン」とともに生還した。シンジは人間的にも成長、エヴァチームの実質上のリーダーを務める。

描かれなかった切片より

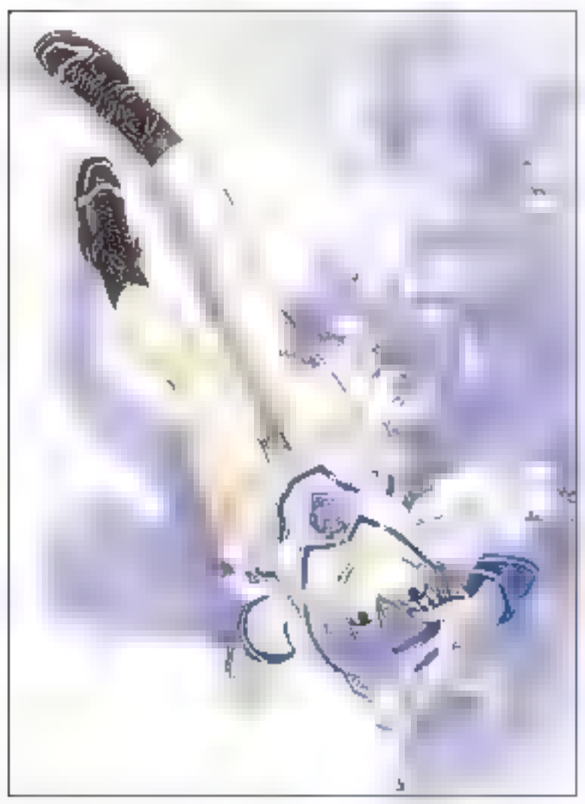
「ほんとうに何も準備しなくていいんですか?」
「ええ、聞かれたことを隠さずに答えてあげて」
ゼーレによるネルフ本部侵攻をくぐり抜けたとはいえ、ネルフ日本本部の立場は微妙だった。碇司令時代の過剰な秘密主義の影響か、いまだに人類破滅を願うカルト集団とのイメージが強かったのだ。協力体制にあらねばならぬ戦略自衛隊に対してもそれは同様であり、両者の間には歴然とした亀裂が存在していた。
巨大な軽金属パブル製の仮設テントの下に、紫色の巨人が一行を待っていた 将校から兵卒まで、およそネルフに係わるであろう立場の戦自関係者すべてが招待されたのだ。
巨人の傍らには、学生服の少年が座っていた。
服を切ったように質問をする戦自の人々に、少年はたどたどしく応えた。
エヴァのこと、使徒との戦いのこと、父の、碇司令のこと。
彼の言葉は本訥であったが、真実に裏付けられた重さを持っていた。
「こどもだったよな」
誰彼ともなくぽつりと漏れた言葉に、賛同のうなずきが加わり、それは大きく広がっていった。
「うまくいくといいんですが。それにしても思い切ったことをしましたね」
「あの人たちはシンジくんやわたしたちの代わりに死ぬのが仕事なの。隠し事はしたくなかった」
その日から戦自は、常にネルフ日本本部防衛の先陣にある。

「戦略自衛隊ネルフJPN分遣隊 備忘録」より



綾波レイ・No.カトル

綾波レイのクローン体のひとり。本来は綾波レイからの精神リンクなしでは自立行動しないはずであったが、0・0エヴァで軌道上に待機中に、何者かの接触を受け堕落。それ以来消息を絶ち、再度現れたときは敵として立ち塞がった。



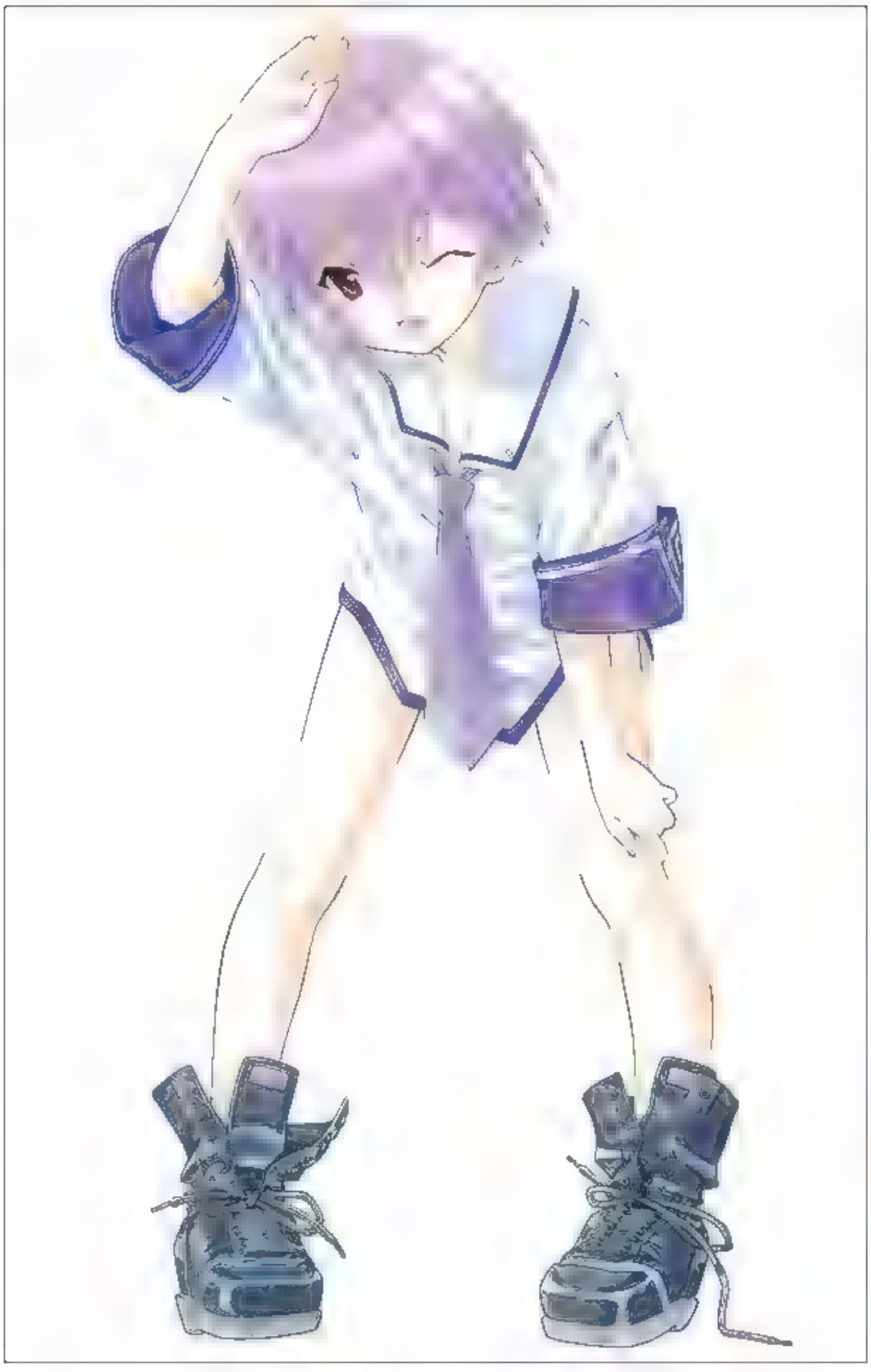
綾波レイ・No.サンク

綾波レイのクローン No.サンクは同時期に配備されたNo.カトル、No.シスの両個体を凌ぐ成長をみせ、特筆すべき成功例とされたNo.ドゥを超えるものと期待された。最後期に生産されたNo.シスは0G下での運用に特化して開発されたためか、メンタリティが不安定であり、サンクこそが綾波シリーズの完成形であるとの評価がなされている。

Rei Quatre & Rei Cinq

[レイ・カトル&レイ・サンク]

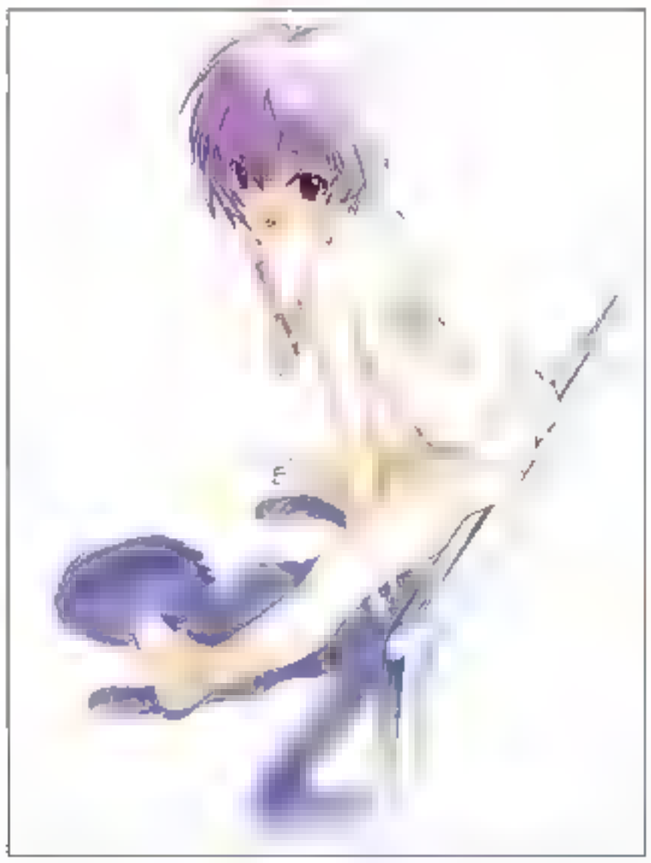
両名ともに0・0エヴァに搭乗する綾波レイのクローン体である。生産時期は同じ、体形その他、外観もほぼ変わりがないため、判別のためヘアスタイルを多少変えてある(カトル=銀髪、サンク=ショートカット)。ネルフで生産された綾波クローンシリーズは自己意識が芽生えず、綾波レイによる精神連結による遠隔運用を受けているのであるが、0・0エヴァ・カトル機の落着にともなうレイ・カトルの失踪後の様相など、どうも自立して行動しているとしか思えないふしがある。だがレイ・カトルの身柄が確保できない現状では確認する術もなく、真相は不明のままである。



Rei Sis

[綾波レイ・No.シス]

綾波レイのクローンであるが、最後期に造られたため外観は幼女である。しかし、綾波レイとリンクすることでハイティーンの女性としての経験も有しているため、外観と人格との間にギャップが生じている。トウジが現在はお守り役を務めている。



描かれなかった切片より

0・0エヴァに搭乗する3人の綾波レイ・クロ ーン体、カトル、サンク、シスのうち、カトル、サンクは同時期に誕生したが、シスのみ10年後に実施された再生産プログラム時に生まれている。この経緯は担当したとされるマルドゥック機関のデータが残されておらず(それどころかマルドゥック機関の存在自体が現在では疑問視されている)不明である。カトルたちとシスとの間に性能的な差異も見あたらず、あえて推測するならば、ネルフ日本本部が上位機関であるゼーレに隠れて、新たなエヴァンゲリオンの搭乗者を入手しようとして再生産したのではないかと思われるのだ。これは対アルミサエル戦で損失した零号機を秘密裏に再建しつつあったことからも比較的可能性が高いとされる。

「マルドゥック機関…ネルフの闇ざされた園」より抜粋

Misato Katsuragi
[葛城ミサト]

碇ゲンドウ亡き後、ネルフ司令に就任。戦自での階級は将補。補完計画の再始動を防ぐために崩壊しかけていたネルフ日本本部を再編、より強固なネルフJPNへと改組した。

描かれなかった切片より

ゼーレが示した道は甘美であり、魅力的でもある。しかし、我々ネルフはそれを肯定しない。人は長い歴史を手探りで歩んできた。数多の誤りを重ね、悲劇を乗り越えて。そうやって多くの人々によって踏み固められた道こそが、辿るべき正しい道であると考えたい。たとえ、その歩みが遅くとも自らの意志と力で、未来とはつかみ取るべき物なのだ。

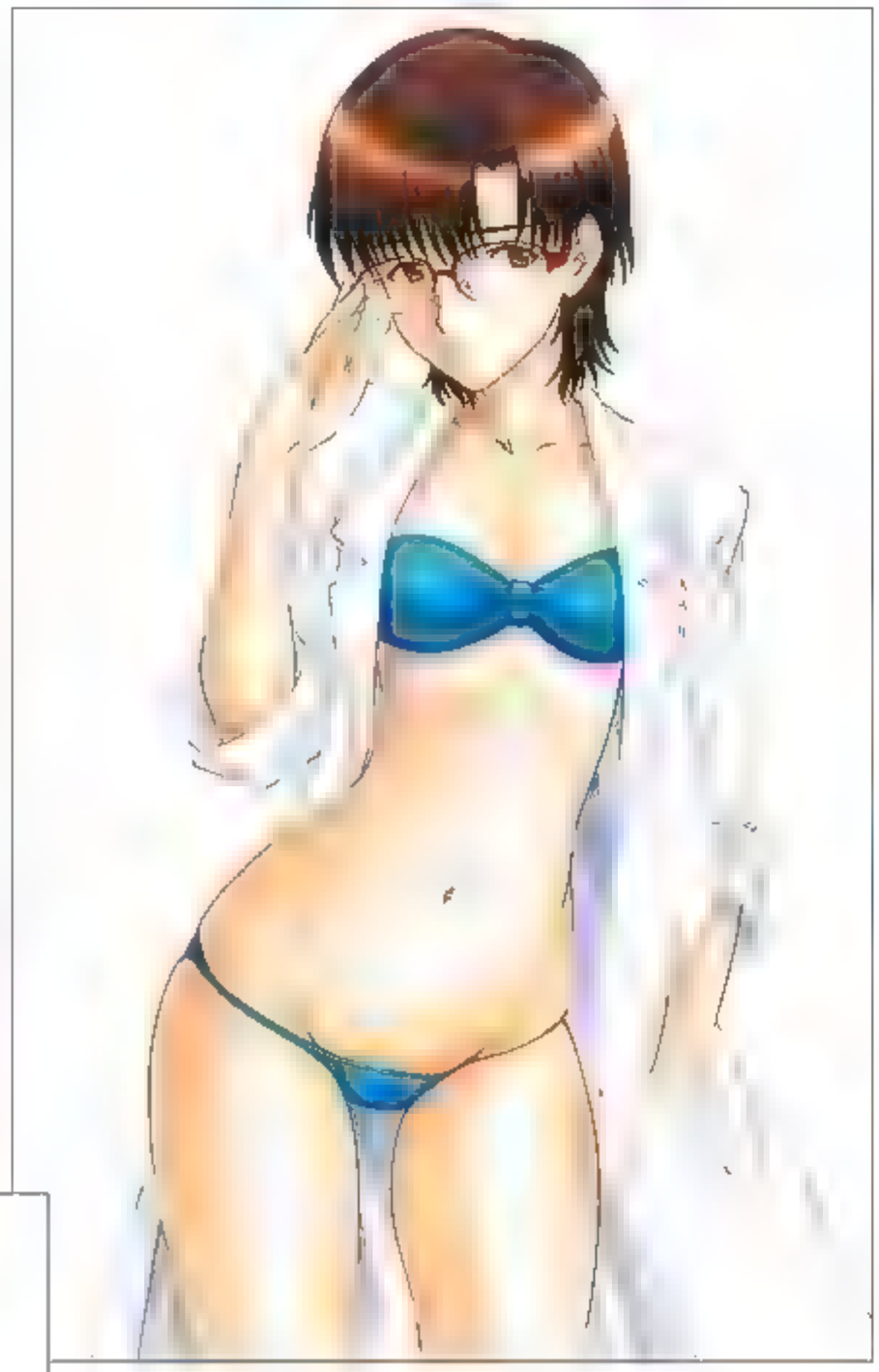
しかし、パンドラの函は開けられ、多くの厄災が世界に残されてしまった。我々の道はさらに険しく厳しいものとなるだろう。だが、我々こそが"残された希望"なのだ。

立ち止まることは許されない。

「葛城ミサト将補によるネルフ日本本部走行軌道指揮棟ZZ01竣工の辞」より抜粋

Maya Ibuki
[伊吹マヤ]

ネルフJPN技術開発局先端技術部マネージャー。戦自での階級は二佐。先任の赤木リツコに代わりゼーレ由来の先端技術を評価 統括運用する。



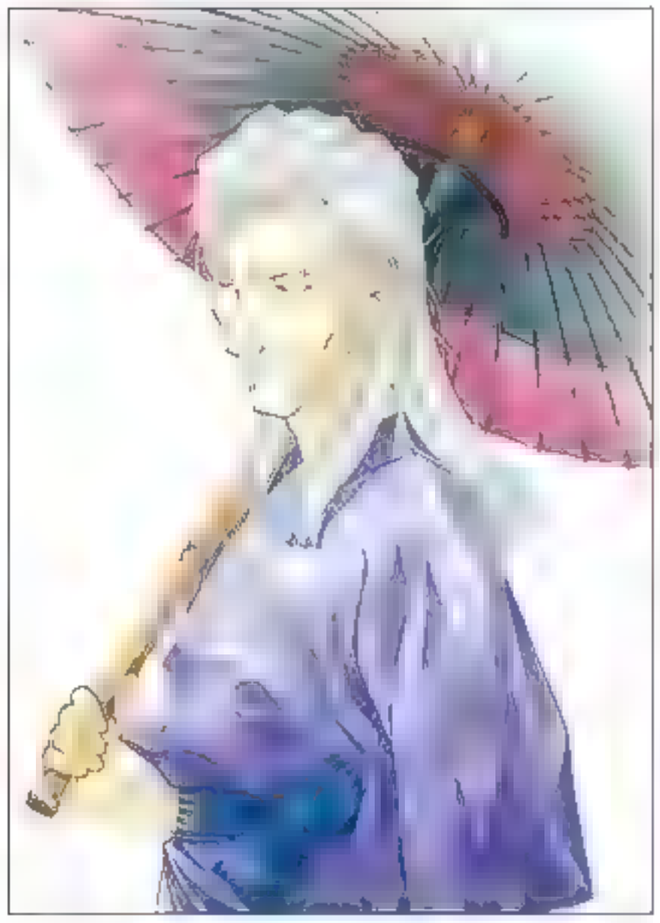
マルドゥックの子供たち

使徒アルミサエル戦およびネルフ日本本部攻防戦において、第3新東京市は甚大な被害を受け都市機能の大半を損失した。そのため、碇シンジのクラスメートである第3新東京市立第壱中学校の学生たちも疎開せざるを得なくなり、散り散りとなった。しかし、その後第3新東京市の復興が始まると、再度呼集され、新設された第3新東京市立第壱高等学校に編入されることとなった。凍結したジオフロントを始め重要な戦略拠点が点在し、今後も争乱の舞台になる可能性の高い危険地帯になぜ子供たちは送り返されるのか？　これは、ゼーレ壊滅により各国に点在するネルフ施設が国家や巨大企業に接収され、様々な秘匿技術が流出したことに起因する。ネルフが独占してきた驚異的な超テクノロジー、そして頂点に位置する人造人間エヴァンゲリオン、それを確実に制御するにはマルドゥック機関に集められた候補者たちが必須であった。時間は要するがエヴァの再建は難しくはない、でも候補者は？　彼らを巡り、各勢力による争奪戦が巻き起こることは想像に難くない。

Others
[その他のキャラクター]

渚カヲル

5人目のエヴァ適合者として配属されたが、その実はアダムの魂を宿すと思われる17番目の使徒であった。使徒としての名称はタブリスである。



冬月コウゾウ

旧ネルフ日本本部副司令。旧ネルフ解体時に最高位にあり「人類補完計画」等情報の隠蔽などで国家反逆罪に問われ投獄される。1年後に病気療養のため出獄し、京都に隠遁。ネルフJPNの発足に伴う恩赦により拘束を解かれる。鈴原トウジの依頼を受け、ネルフJPN司令部付きオブザーバーに就任。

鈴原トウジ

第3新東京市立高等学校に通う17歳の少年。使徒バルディエルによる参号機の暴走事故で重傷を負うが人造義肢のローテーションにより復帰した。決して人付き合いの良いとは言えないシンジたちエヴァパイロットたちとのコミニュケーション能力を買われ、現在、ネルフJPN本部付司令代理の要職を務める。

洞木ヒカリ

シンジたちのクラスメート。ロンギヌスの槍の地球圏侵入迎撃戦に巻き込まれ姉を失う。マルドゥックに選ばれた適格者として数奇な運命を辿ることとなる。

加持リョウジ

ネルフJPN、防諜部所属。3年前のゼーレによるネルフ本部急襲を事前に察知、日本政府に働きかけ、戦略自衛隊の突入を防いだ功労者。地下に潜ったゼーレの行方を探るため、相田ケンスケとともに中東に向かうが、ある出来事が思いもかけない運命に彼を導いてしまう。

EVANGELION ANIM

超合金 スーパー エヴァンゲリオン のすべて

SUPER EVANGELION

DATA

全高:約180ミ
セット内容:本体、手首差替えパーツ
プロフィールデータ
新型パレットライフルパワードエイト
定価:8,400円(税込)
発売元:バンダイコレクターズ事業部

映像、イラストなどの2Dから3Dである造形物を起こす場合、ディテールなど情報量を加える必要がある。だが、こと「エヴァンゲリオン」に関してはそういう企てが感じられない。すさまじい映像表現に圧倒されるのであろうか、むしろ単純化されているといってもよい。今回の「スーパーエヴァンゲリオン立体化計画」はそういった本来あるべきはずのディテールを正規デザイナーである山下いくと本人の指揮の下に造形、21世紀標準のエヴァを作り上げることにあった。目指すコンセプトは「エヴァの動くスケールモデル」である。

山下いくと自らによる度重なる修正を経て、そのフォルムは極限に達した。複雑すぎる直線と局面の融合、あまりにも繊細な面形成ゆえ、その造形は困難を極めた。だが2年にわたるバンダイコンクターズ事業部のトライアルはついに不可能を可能とした。表面に施された精緻なマーキング、複雑な可動を支える強固なダイキャストフレーム、設定ギミックを忠実に再現した武装など、それまでのトイの範疇を遥かに凌駕した製品内容。この高レベルの完成品がなんの技術スキルがなくとも即フィギュアのように入ることとなった。エヴァ造形の最高の到達点を、ぜひその手その目で確かめて欲しい！

⬆後頭部のモールド、エントリープラグドックなど複雑な表現が多数あり、すべて正確に再現されている。こちらのバレットライフルはカービンタイプ（写真は一部マーキングが違っています）に変更。

➡すっきりと決まった全身。超合金だからといっておなじみのネジ穴は見えない。ダイキャストはフレームと脚部前縁に集中使用されているので、安定性も高い。写真はパワードエイトロングバレルを構え、腕にはプログナイフ・ステージ2を装備。スタンドを使用しなくてもこれだけの重量物を支えきる強固な関節構造と重心バランスを達成している。また、ソ径部には筋肉状の帯を配することで、無機質な関節を隠し生物感を演出している。

①絶妙としか言いようがない迫力の面構え。ツインアイは新設定のフェイスガード沈降ギミックで守られる。
②肩後方の武装用ノールは取り外し可能。その下にもマーキングが施されているという凝りよう。
③太もも部のアーマーは将来的な発展性を考慮して分離可能。著作権表記が裏側にプリントされているという親切設計が嬉しい。
④肩のバイロンを前に倒すと、肩タンブラーを取り外すことが可能。これはセンサーという設定。後々ここに別のパーツを装着できる予定だ。
⑤スタイリッシュなパッケージも山下いくとによるデザイン。
⑥セット内容一覧。パーツの多さが高いプレイアビリティを保証する。
⑦新型バレットライフル ハードワードエイト。共通の機関部にバレル、マガジン、グリップ等を装備、交換することで、ロングバレルタイプ、カービンタイプへの変更が可能。そのまま水平地面に自立する構造だ。
⑧こちらはカービンタイプ。機関部後方の冷却ボックスも着脱可能。カービンタイプではこの状態となる。また、マガジンは長短いずれも装着可能。
⑨ プログナイフ ステージ2は2本付属。専用のサヤが付く。

BANDAI HYBRID TOY "CHOGOKIN"

SUPER EVANGELION
超合金スーパーエヴァンゲリオンのすべて

⑩パワードエイトを構える。機関部後方の形状と右の上腕部の角度が絶妙に合致しているのがわかる。上部レールには照準器とキャリングハンドルを装着可能。射撃時には左手で可動式フォアグリップを保持する。待機状態なので右手の人差し指が出ている。

⑪設定画にあるような自然な走行ポーズも可能。

⑫プログナイフ ステージ2を構える。これまでのプログナイフより大型化したため、両肩の羽型兵装ボンツンの使用が不可能となり両腕のレールマウントにサヤとともに装備されることになった。

BANDAI HYBRID TOY "CHOGOKIN"
SUPER EVANGELION

SPECIAL WORKS 01

SUPER EVANGELION WITH VORTEX

超合金スーパーエヴァンゲリオンをベースに、フライトユニット“ヴォルテックス”を装備した飛行形態を再現。ヴォルテックスはプラ板の箱組みを基本としたスクラッチビルド。エヴァ本体も航空迷彩仕様のバリエーションカラーにリペイントしている。

製作:射水 宏

SPECIAL WORKS 01

①ユニークで複雑な形状のフライトユニット"ヴォルテックス"は、山下氏の三面イラストを基にスクラッチビルド。本体もブルーを基調とした航空迷彩にリペイントしている。以下の手順にて分解すると塗り分けが容易だ(作業は自己責任で)。まず肩装甲と上腕グリーン部分は薄刃平刀でこじって接着を外す。足首甲パーツはボールジョイントから外すのみ。足裏のフタを外してビスを抜くと甲とソールを分離できる。分解の難しい頭部 股間 スネ 太ももは筆塗りとマスキングで塗り分けている。
②後方からだとまた違う表情を見せるヴォルテックス。軽量化のため、プラ板と少量のポリエステルパテにて成形している。基部は設定どおり太ももパーツの二つの孔に接続している。
③武器類も装備可能だが、取り回しを考慮すればし、小型のものが適しているようだ。

modeled by HIROSHI IMIZU

EVANGELION RANIM

BANDAI HYBRID TOY "CHOGOKIN"
SUPER EVANGELION EXPANSION ITEM

ARMING TREE & PROGRESSIVE WEAPONS

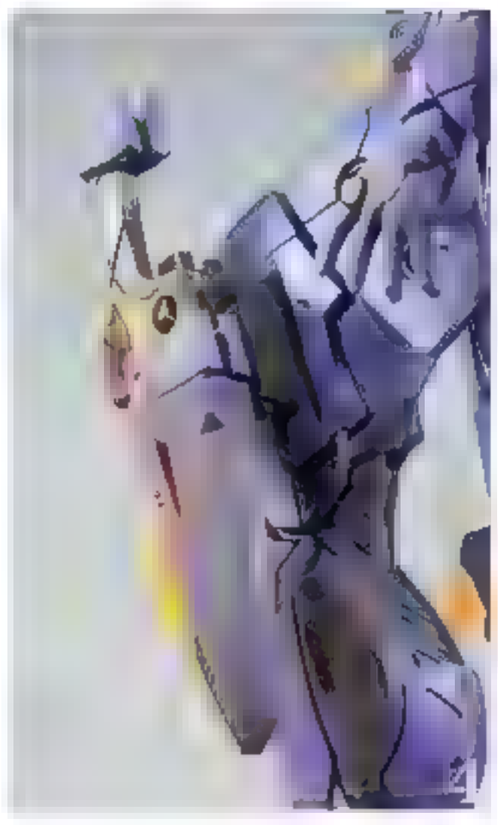
これが新型兵装ビル アーミングツリー&武器セットだ

超合金スーパーエヴァをさらにパワーアップするための武器セット!
それらを収納する新型兵装ビルは、ただの"飾り台"ではない!

modeled by TATSUYA YONEZU

「超合金スーパーエヴァンゲリオン」のプレイアビリティをさらにアップさせる拡張アイテム、それが「スーパーエヴァンゲリオン新型兵装ビル アーミングツリー」だ。「超合金魂」シリーズにおける"付属品飾り台"的アイテムだが、大きな違いは、メーカーサイドのデザインではなく、山下いくとがスーパーエヴァ用に特別にあつらえた物であり、しっかりデザイン統一されている上、ストーリー的にも重要な設定であるという点だ。さらに、様々な剣戟シーンが再現できる巨大斬撃兵器類が付属するのも見逃せないところ。もちろん、スーパーエヴァに封入の武器も格納できるようになっている。斬新なデザインは、そのままシェルフ等の上に置いてもシュールなインテリアとして機能する。こちらは、「電撃屋ホビー館」およびWEBにて、通販商品として販売されたものである。

①アーミングツリーに付属の武器および超合金スーパーエヴァンゲリオン付属の武器をすべて懸架した状態。両翼に大きく広がる針葉樹のような外観である。武器パレットは独立してタワーの外周を旋回可能。
②こちらは商品状態であり、プログナイフ、パワードエイトを懸架していない。
③ネルフJPN公式配布物をイメージしたパッケージ。
④すべてのパレットは基部が可動し、上部に跳ね上げることが可能。



①アーミングソリーに付属の新型レールパーツとスペーサージョイントにより、バフォードエイトの機関部をそっくり腕にマウントできる。この状態で発射可能という設定だ。
②肩後方には、新型レールとマウントパーツにより、ビゼンオサフネをダイナミックに懸架できる。
③新撃武器類装着例。右肩にビゼンオサフネを、マゴロックスとカウンターソードを二連装ジョイントで左肩に懸架。マゴロックスを中段に構える。
④ジョイントパーツにより、両太ももにもプログナイフが、さやごと装着可能。
⑤アーミングソリーの付属品一覧。こちらが正式カラーである。上からビゼンオサフネ、マゴロックス&さや、カウンターソード&さや、KEG46R(ハンドガン)&ホルダー、SRM50(手斧)&ホルダー、各種ジョイントパーツ。ジョイントを使うことにより スーパーエヴァへの武器類のマウントバリエーションが各段に増えるのだ。

modeled by TATSUYA YONEZU

BANDAI HYBRID TOY "CHOGOKIN"
SUPER EVANGELION

SPECIAL WORKS 02

ARMING TREE DIORAMA

通販限定アイテム「超合金スーパーエヴァンゲリオン 新型兵装ビル アーミングツリー&武器セット」の光造形試作品を使用し、ジオラマを製作。山下いくとによる奇抜なデザインのアーミングツリーが潜在的に持つリアリティをいかに引き出すかが作例のテーマである。

製作:米津辰哉

SPECIAL WORKS 02

ネルフ基地の格納庫をイメージし、かつ現実的な構造を念頭に置いて板材やプラ材等で製作。サイズはNゲージ程度。アーミングツリーを載せた六角形のベースは、基地外に移動させるためのエレベーターという設定。アーミングツリー本体は階段を彫り込み、エッチングパーツ等で手すりを表現。また自走するという設定を独自解釈し、ベース部分には戦車のミニモデルから流用したキャタピラを接着。プラットフォームにはSエヴァのジオラマサンプル使用作例を載せ、運用風景を再現している。左ページの写真は、一部画像処理を施してムードを高めたもの。ツリーと共に出撃を待つSエヴァである。

modeled by TATSUYA YONEZU

電撃ホビーマガジン連載時の第一章を
陰山琢磨先生にお願いしていた
ANIMAの小説は
2009年9月号以降
山下いくとの執筆に移行しました。
それに伴い第一章も
順次仕立て直しを敢行中で
ここからはその冒頭の
二話をお届けします。
(山下)

EVANGELION
ANIMA

#1 帰還者たち

山下いくと

■生命圏監視者

昼側なら三百六十度望めるその地平線は、振り返って見るまでもなく、前方視野の中に閉じた曲線として収まっている。

青く丸い地球を頭上に見上げ００エヴァが軌道を回る。このS^2機関外装式宇宙環境型零号機は三機、各一十度の角度を空けて飛び、二機が作る三角配置に地球を入れている。

搭乗するのはレイを培養していた人工子宮から引き上げた彼女の並列クロ ン。レイ・カトル、レイ・サンク、レイ・シス。それぞれ薄目を開けたまま、うっとりと動かず、それぞれのエヴァのエントリープラグに深く腰掛けている。

――時間が止まっているように静謐な世界。

揺れているのはレイたちの髪 プラグ内のＬＣＬは、彼女たちに呼吸酸素を運ぶために緩やかに流れ、このアクアリウムの中で眠る、繊細な人形のような少女の髪を揺らしている。その循環ポンプの小さな音。遠くで静態停止寸前まで出力を絞ったS^2機関がわずかに唸っている。

これは――彼女らは監視迎撃システム。

その彼女たちがまどろんでいる、

なら今は平和、とりあえずそういうことだ。

かつてネルフ本部を襲ったゼ レの量産型エヴァ。その屍骸の大半は移動中もしくは移動先で行方をくらませたが、襲撃現場すなわちネルフ本部で即時解体された二体からは、パワー源と言うべきS^2機関が摘出されていて、その後建造されたゼロＧゼロ気圧型の零号機種ボディに外装された。

この００エヴァニ 機が軌道を巡るのは、消えた方の量産型を発見殲滅するためであり、行方不明の量産型の屍骸を探すために、同じ量産型の屍骸のパワープラントで動く００エヴァはどこか皮肉めいているが、とにかくもこれにより送電ケ ブルから解き放たれ、こんな長期の遠隔単独作戦も可能になった。

指令を受け取れば十秒ほどでレイたちは目を覚ます。約二十秒で００エヴァはアイド シングから戦闘出力まで覚醒し、約九十秒で右手に握るエヴァ最大の長尺火器ガンマ線レーザー砲が、見渡す限りの地表、地下五百メートルまでをフルパワーで狙撃出来る。

００エヴァは一機が軌道にあることで地球上の死角を事実上なくし、あらゆる通信に耳を澄ませ

■スーパーエヴァカリオン

「あんたが、戦場をえらばれる」

アスカのその言葉に、裏校から戻って制服の姿のままのシンジとトウジは「なんだって」と言う顔で振り返る。

「いや、この流れで誰れるのはちゃうと…」

初号機も、弐号機、〇・〇号機に続いて新型装甲に換装するそぉ一段だったはずだが、

「せや、スーパーはないやろスーパーは…決まってまうで――うぉ総流、なに変とんねん！」

見れば、アスカは制服からうっとうしそうに着替えたプラグスーツのうわなを着ねぜ、

「ぶつぶつぐぐ…スーパー…スーパーエヴァカリオン？　タンタターン♪」

意味のよく分る者に有名なとあるフレーズが脳内は発令所に響きミサトはデッキアンダーエヴァの遠隔システムのオペレーター数人が振り向いたほどの――クスクス笑う声も。

「イイわミサト、すぐ司令部のモニターイイ　初号機だけそれで行きましょう」

会話の一同は発令所メインデッキにいた。総司令席に座るミサトは「いる名前なのになんで？」と顔に書いた心底かそうな表情――シンジとトウジにはそれが意外だった。

「そんなにヘン？　マイナーチェンジとかバージョンアップ後の兵器名ぴったりあるわよスーパー」

「変じゃないサイコオ♪」

「誰うけイ！　絶対にも笑顔回せや」

「バーあんたそんくらい手足のガに頭あを入ったらいいじゃないのさ！」

アスカは貰い広告を膝に当てるとトウジが投げ出した頭に戻れんばかりに力かすまる武器を納めたタンクシャフを突き出し――

――トウジは膝と指を引いた。アスカは膝で笑う。

「するぞ、オマエ！」

「あーんもお汗くさいシャワー浴びてつぎに頭も洗せよ」

最後の少女は膝起く笑う。

少年たちは本部のシステム体を動かした。シンジは考える。書くだけれどもすこし疲けている。書のような何かを続けるのは嬉しくはない。だが前と違うのは、自目的に没頭することは出来なかった。彼の立場でそれはもう許されなかった。

なにしろ、ほぼ彼が「その後」を決定してしまったこの世界なのだ。加持の畑を地上に後したのもシンジだ。

トウジは鍛えると同時にサイバネティクスの腕と足の同期とサイズ補正を確認。二人はオをシャワーで押し流しいまはケージとエヴァを見下ろしながら涼んでいた。

トウジのからっぽの身体機能部のうち臓器は培養臓器と入れ替えられたが、手足の再生医療は見送られた。促成培養を終えた彼の腕と足が繋がれようとした時、除去したはずの感染者使徒パーツがどこからともなく現れ、発症の兆候を明かせたのだ。

その場の使徒発現は、手足を接合しないことで回避された。

エヴァのカタチ、人のカタチに感応する性質らしいその使徒が、また体のどこかで活動を始める危険性をついには排除できず、彼は機械の手足を持つ身となった。

チルドレンナンバーとしては抹消されたが、その後ろい監視が付くくらいならと戦略的にネルフ本部に籍を出し、そこで高度機密機能のパスも得て、パイロット間の連絡員のような仕事をしていた。同じその手足の維持には金も掛かる。

「シンジは戦目の巨大ロボ見たか？」

「通設場に来たやったよな。ジェットアローンのもっとかくらいの背丈で戦車みたいにガチってる」

「つよそうパワーを出る言うよるわ。オマケに飛ぶんやさかい」

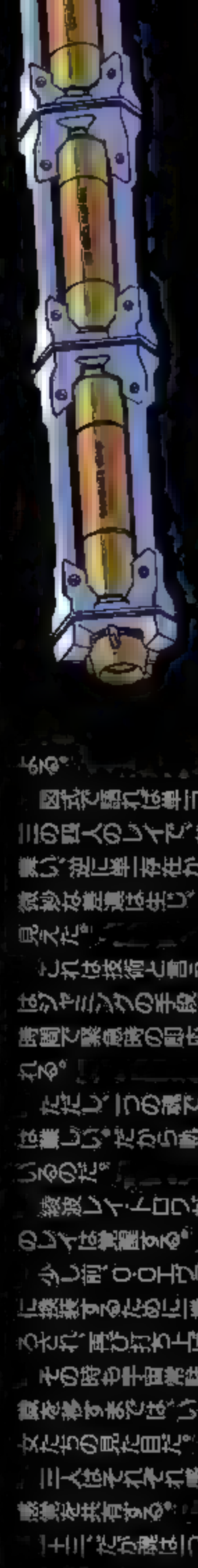
それは戦略自衛隊の大型移動砲個体対処戦車後継動兵器で、名を「あかしま。と言う。

古い言い方で台風を意味する単語らしい。

Nアクターを動力に持つ機械仕掛けの巨人が使うはいるがそもそもなんのための人型なのか誰らない上ヴァと違う。

こいつは明快で、地形を選ばない脚部と強力なこの脚は、武器の把持機構、場合によっては装甲を支えるだけでなく格闘時のキ蹴な応力に耐え、全身を装甲で固い、さらに姿勢とバランス配置の入れ替えで飛行出来、作戦時の展開機動力を高くしている。

すごいのは、それらすべてを支援なしの単体で出来るようだ。



全地球規模防衛ネットワーク・ネルフJPNがその構築に全勢力を傾けた衛星システムだ。

この軌道上の迎撃機の装備は、エヴァを軌道上に運びあげる輸送段以上にまず各国にそれを認めさせるのが大変だ。各国からすれば上ヴァは超上兵器だから容認出来たが、圧倒的な能力があっても小さな島国に配用する分にはその行動範囲は限られる。それが核だいしかも制空権の空は激しく争いのネットワークは主権の侵害と言われても仕方がなくネルフJPN総指令部はミサトは事実上上エヴァの武力を背景にした脅しかたた方法で軍力を拡大及び防衛計画を練り直した。

警戒すべき第二は終を消した残りの量産型エヴァの復活。幼個機の着面冒頭には必ずそれが明記されただからうと漠然とした不安を、関係者は共通してねく。

――補完計画は厘かにくらいた――

しかし計画の中の近くにいた者たちはとんどんく様をくらませてのがすなわち計画を失敗させたあと世界がどうなるかは、誰も示していないのだ。

使徒の出てこない世界が日々平和に流れていくその中で、警戒を維持するには試験的手段に出ることもやむを得ず、総司令官碇ゲンドウ以下、ネルフJPNのエヴァに関わる人々は、自分たちが世界の運命を左右する者の色を日々濃くしていく重圧はあったが、自分たちの心が記憶に残さなければそれが「良い」と思うことだった。

0・0号エヴァは大陸間に着を向け、頂間で地表を叩く。着陸された頭部やカメラと同期の装着アレイで得られるものながら、その衝撃情報をネルフJPN本部に送るのつで、半分重るレイをは内にだい動道を飛ぶ。

最後レイのボディは着脱式でも、最後レイという存在は誰一人というのがこの世界の理のようで0・0号エヴァに乗り組むことを宿命づけられた三人の着脱には誰が乗らなかった。

それは貴者の保護で言うことだ。それでもこの三人が、誰がはいまの三人の新しいレイたちカヘルカシンジが人工子宮から取り出されたのは、本部戦闘から在籍する者を持つレイがトロフとなるで、その三人を最終的にコントロールする方法、最後にシーリングが開み出されたことに

■スーパーエヴァカリオン

「あんたが、戦場をえらばれる」

アスカのその言葉に、裏校から戻って制服の姿のままのシンジとトウジは「なんだって」と言う顔で振り返る。

「いや、この流れで誰れるのはちゃうと…」

初号機も、弐号機、〇・〇号機に続いて新型装甲に換装するそぉ一段だったはずだが、

「せや、スーパーはないやろスーパーは…決まってまうで――うぉ総流、なに変とんねん！」

見れば、アスカは制服からうっとうしそうに着替えたプラグスーツのうわなを着ねぜ、

「ぶつぶつぐぐ…スーパー…スーパーエヴァカリオン？　タンタターン♪」

意味のよく分る者に有名なとあるフレーズが脳内は発令所に響きミサトはデッキアンダーエヴァの遠隔システムのオペレーター数人が振り向いたほどの――クスクス笑う声も。

「イイわミサト、すぐ司令部のモニターイイ　初号機だけそれで行きましょう」

会話の一同は発令所メインデッキにいた。総司令席に座るミサトは「いる名前なのになんで？」と顔に書いた心底かそうな表情――シンジとトウジにはそれが意外だった。

「そんなにヘン？　マイナーチェンジとかバージョンアップ後の兵器名ぴったりあるわよスーパー」

「変じゃないサイコオ♪」

「誰うけイ！　絶対にも笑顔回せや」

「バーあんたそんくらい手足のガに頭あを入ったらいいじゃないのさ！」

アスカは貰い広告を膝に当てるとトウジが投げ出した頭に戻れんばかりに力かすまる武器を納めたタンクシャフを突き出し――

――トウジは膝と指を引いた。アスカは膝で笑う。

「するぞ、オマエ！」

「あーんもお汗くさいシャワー浴びてつぎに頭も洗せよ」

最後の少女は膝起く笑う。

少年たちは本部のシステム体を動かした。シンジは考える。書くだけれどもすこし疲けている。書のような何かを続けるのは嬉しくはない。だが前と違うのは、自目的に没頭することは出来なかった。彼の立場でそれはもう許されなかった。

なにしろ、ほぼ彼が「その後」を決定してしまったこの世界なのだ。加持の畑を地上に後したのもシンジだ。

トウジは鍛えると同時にサイバネティクスの腕と足の同期とサイズ補正を確認。二人はオをシャワーで押し流しいまはケージとエヴァを見下ろしながら涼んでいた。

トウジのからっぽの身体機能部のうち臓器は培養臓器と入れ替えられたが、手足の再生医療は見送られた。促成培養を終えた彼の腕と足が繋がれようとした時、除去したはずの感染者使徒パーツがどこからともなく現れ、発症の兆候を明かせたのだ。

その場の使徒発現は、手足を接合しないことで回避された。

エヴァのカタチ、人のカタチに感応する性質らしいその使徒が、また体のどこかで活動を始める危険性をついには排除できず、彼は機械の手足を持つ身となった。

チルドレンナンバーとしては抹消されたが、その後ろい監視が付くくらいならと戦略的にネルフ本部に籍を出し、そこで高度機密機能のパスも得て、パイロット間の連絡員のような仕事をしていた。同じその手足の維持には金も掛かる。

「シンジは戦目の巨大ロボ見たか？」

「通設場に来たやったよな。ジェットアローンのもっとかくらいの背丈で戦車みたいにガチってる」

「つよそうパワーを出る言うよるわ。オマケに飛ぶんやさかい」

それは戦略自衛隊の大型移動砲個体対処戦車後継動兵器で、名を「あかしま。と言う。

古い言い方で台風を意味する単語らしい。

Nアクターを動力に持つ機械仕掛けの巨人が使うはいるがそもそもなんのための人型なのか誰らない上ヴァと違う。

こいつは明快で、地形を選ばない脚部と強力なこの脚は、武器の把持機構、場合によっては装甲を支えるだけでなく格闘時のキ蹴な応力に耐え、全身を装甲で固い、さらに姿勢とバランス配置の入れ替えで飛行出来、作戦時の展開機動力を高くしている。

すごいのは、それらすべてを支援なしの単体で出来るようだ。

「いいね、飛べるの」
「高くは飛べんグランドエフェクトや」
「でも高速巡航出来るってことだろ？」
「嬉しそうに言うな、エヴァ支援用の対使徒戦術機動兵器やそうやけど」
誰が聞くわけもないが、トウジは声をひそめ——
「本当は工作兵器やないんかとハナシ」
シンジはここにない顔。
「エヴァの運用はお金掛かるから、好かれてはいないと思うけど、あ、だからこの近くに配備されたの？」
「そう本部戦の時の戦自の介入、あれに懲りてミサトさん頑張って第三新東京と芦ノ湖を囲む箱根山カルデラ内を、事実上国連の租借地と日本国政府に認めさせたいわゆる治外法権の特区や、それもの連中には気に食わんやろ、出来りゃ取り戻したいってな」
「まあ——そりゃそうか。で、外縁山のふもとからうかがうってる　と？」

現在ネルフ、JNは、4基の初号機、5基の弐号機、それ以外に軌道上に常駐する二機の宇宙戦力、計六機のエヴァ、計六機のエヴァを保有する人類最強の戦力集団といえる。
うち5基の弐号機と弐号機の一機を除いた四機はS²機関を持つ。初号機はゼルエル戦で使徒のものを暴走時みずから捕食し、〇〇エヴァはネルフ本部戦直後、建造中エヴァの死体から引き剥がしたものを外装と、これらはほぼ無制限の作戦時間を有する。

「んで、初号機はスーパーエヴァにバージョンアップと」
「大まだよトウジ。〝スーパー〟はまだない。この新規拘束装甲への転換計画は、たぶん流れる。あれは初号機には向いとないよ」
「せやな、アレは駿流と綾波が弐号機と零号機で育てたボディや、腰がキュッとクビレとって、その…」
バストジェスチャーでエヴァのボディの変化を表したトウジの手がそこで止まる。
「…」
「…」
それがとりもなおさず、アスカと綾波の女性的成長を反映してると気付いたからだ。
トウジは右風で、シンジは対人に難があるがこれは言い訳で、二人とも年齢相応に、異性として同年代の女子を強く意識している。が、身近すぎる人物のこの場合、表現するのはなんだか気まずい。

「えーと」
エヴァは自分の体を作り変える。
基本無機物で構成されているエヴァは、見かけは生物のように時々の都合で振る舞う。
高シンクロ状態での被弾時の急激な自己再生が顕著でやすい。破損した外部装甲も一緒に再生されることさえある。切開してみるとバラバラだった繊維が傾斜材料のようにガチャベルと結合していたり、効率のよい形態に変化が見られるなど、明らかに破損前とは別物になっている場合が多い。
整備する側としてはたまったもんじゃない上、巨人だが、現在技術部兼任の主任である伊吹マヤは、これがエヴァの成長だろうという。
そして、いまケージで誰もいない真夜中に音を立てるモノがあるとすればエヴァだ。
巨大な植物のように時折メリメリと音を立てて少しずつ少しずつ形を変えていく。
これは三年前の本部戦以降のことだ。
それぞれのエヴァの中の〝存在〟があまり表に出てこなくなると、パイロットの自我が、薄い込もエヴァの身体特徴に現れ始め、中でも一番それが強く発現したのはアスカの弐号機だった。
アスカはこの三年、何かというと引き合いに出される母の成長だけでなく、肩、腕、腰、足、すべての作りがすらりとしなやかに速さからうつくしい。
「どこのモデルだろう」
フロントをなびかせ、腰を軸に優雅と風を切って歩く彼女を誰もが振り返る。
アスカを成長させたのはただ三年の月日だけでなく彼女の自信〝かつてのナンバーワン自負は、裏を返せば自信のなさの表れだ。相変わらず口は悪いが、他人に厳しい彼女は自分に一番厳しい。
〝任務でも普段の生活でも手を抜かない。〟
自信に繋がるのだから、スゴイと思うていたものから元気を得ていた。
その彼女の成長と自信がエヴァの基本素体はボディに変化をもたらした。
その素体に合わなくなっている日常の拘束装甲は外され、形状に合わせて新たな拘束装甲が作られた。それがステージ2装甲。
新拘束装甲でスペックの向上が判明すると、綾波の零号機も、本部のE型零号機を除き、軌道上に進

ヤシを背後からまくり上げ——ナマイキ！　思うたより広くなってる背中に今ふとした。なにげに筋肉まで付いてる。
「いつの話だよ　こど　ょ　怒ってんのさ？」
「うるさい！」
アスカはフイと横を向く。
「綾波、綾波はどしたんや」
「今日は放課後、生徒会だって言ってたじゃない」

■昼天

不意に軌道上の静かな調和が崩れた。
カトルの瞼がぴくりと動いて長いまつげの下に見えていた青い瞳が開かれ、その目を通して地上のレイ・トロワは眼下に広がる青い星を見た。
「なに…？」
地上を見下ろす〇〇エヴァは地表を十×十センチ以上の精度で観測しデータを地上に送るとともに五×五キメートル以上のすべての動態反応は空の雲だろうがなにか、交通機関から建築施設、建機に建造物移動、大型海洋は乳類などをフィルタで除去、それらを除いた何かの動きに目を凝らしている。
それらは現在、時に注意すべき要素はない。
——だがカトルは数字にならない何かを感じた。
——ような気がした。

レイの思考は複数の「自分」を巡る。

「…物理的情報はない、エラーと判断すべきか」
「サンクはエラー判断を保留」
「シスはエラー判断を追認」
「トロワはエラー判断を保留」

「カトル、状況を再走査、環境データを含め　」

ここ箱根で第三新東京市立高校の白い夏制服に、ひとまわり成長した体を包んだそのレイはトロワ。すらりと伸びた白い足で廊下のリノムを静かに刻んでいたが、この淡い妖精のような少女は突然びくりと立ち止まる。
——パタン——靴を落とした。

暮れつつある西日がまだ暑い日下部邸で、彼女、綾波レイ・トロワは自分の両肩をキュッと握りしめると、目の前に滑り込んできたネルフ本部方面行きの「ドアが再び閉まるドアを見送って立ち尽

くしていた。
――通段伏せがちなまぶたを見開き、
「……なに？」
気付けば手のひらが白い肌を伝う。制服の胸が大きく上下し、彼女にしては珍しく息を荒げて出た言葉は――
「助けて――」
綾波らしからぬ大声で叫んでいた。
――何か真っ黒なものが自分の中に流れ込んできた。四肢をもがれるような感覚のあと出し抜けにそれは消えて

「他の人の声がしない……」
突然彼女はひとりぼっちになった。気付けば彼女はうずくまっていて、停留所にやってくる同じ制服の学生たちが、彼女の叫びを聞いて何事かと駆け寄ってきた。

発令所内に警報が響く。ネルフ・JPN本部は大騒ぎになっていた。
この二年間、問題なく軌道を周回していた〇〇エヴァ三機のうち一機、カトル機が規定の軌道を割って高度を落とし始めたのだ。
「ファイターが上手く送信されてきません――カトル機のステータス不明――」
カフェテラスに出ていた責任者が戻る。
「総司令入室されます」
「作業そのまま――」
振り向きかけるオペレーターを制してネルフJPN総司令冬城ミサトは発令所トップデッキに歩み進むと、階下メインデッキの中央マコトに通る声で聞う。
「シイカトルは？」
「呼びかけに応えません――パイロット不明」
「トロワはまだ学校か――彼女の側から呼び出してみて――」
それに同じくメインデッキの青葉が応えた。
「青葉部からです。その後シイトロワを下校中緊急保護したと。心神喪失状態らしく……」
「なんてこと――」
状態を知るすべのチャンネルが途絶えた。

「シイカンとシイシズが混乱しています。パイロットも不安定、鎮静剤投与を進言」
「任せます。彼女たちの〇〇エヴァの観測機材から何か見える？」

〇〇エヴァ、サンク機とシス機の位置からは地平線の輪郭、真黒に塗り潰した大気越しにカトル機がぼんやりと確認できる。」
明るい地球にデジタルマスクがかかるとキラキラとかすかに光る何かが現れた。
「彼女が散らばって　スペクトルからカトル機のものと…」
「こちらケージ　シンジです　〇〇エヴァが、複数の誰かが襲撃されたって――」
確かに散らばる彼女がそう見える。
「待って、事故かも知れない。まだ喋らないの」

「屋外カメラを――タワー全天観測A――」
観測班から連絡が入り、オペレーターがメインディスプレイに画像を回す。
「〇〇エヴァのBフレアが……！」
夕焼けの空にそれは見ることが出来た。
東の空から現れた十字架状の光はN2核パルスのプラズマをATフィールドでベクター転回したきらめきだ。エヴァの巨体を軌道に持ち上げるパワーを有す乱暴な推進器の光。
再び増速して軌道を上げようというのか？
「東に向かって噴射してる――減速してる――」
――軌道周回方向と正反対だった。
十字の光は、東の空から後ずさるように、ごく緩やかに速度を緩めて止まると、空のど真ん中に停止するように達したところでいきなり消えた。
「〇〇エヴァBの停止――軌道速度を失いました――当本部直上、鉛直方向で相対速度ゼロ」
「つまり？」
「地球自転に合わせただけの高度の放物線、つまりは見かけ上、真っ直ぐ頭の上からここに落ちてきてる、ってことです――」

「燃え尽きる可能性は」
「ATフィールドを失っていたとしても大気上層では燃えません。軌道速度で大気に触れるわけではないので――大気の薄い成層圏以下まで突っ込んでから、広範に地下深度まで及ぶ衝撃波被害が出る恐れが……！」
これは損傷による機能不全か、それともレイカトルは意図して？――いや、いまは…。
ミサトは決断する。
「軌道周辺事故と認定――第三新東京全市及び近隣都市の行政機関に緊急通達――地下シェルターへの避難を――落下衝撃に備えさせて――シイカトルの応答は？」
「呼びかけ続けますが、応答なし――」

なんにせよ、じっと落ちてくるなら、
「――シンジ君・アスカ――エントリースタート――エヴァ初号機、エヴァ弐号機、発動――」
巨人を支えるすべての部署が開く。最後のワンコマンドで待ち構えていたシンジとアスカは自分のエヴァを即座に立ち上げる。
「初号機は落下地点で〇〇エヴァをATフィールドで受け止めて――いつかの使徒みたいにね」
確かにかつて受け止めたサハクィエルに比べたら〇〇エヴァの巨体も質量は遥かに小さい。何よりも初号機はS2機関を得たため、発生させるATフィールドも格段に強くなっているしそのための集中トレーニングもこの三年欠かさなかった、だから…。
「初号機シンジ、了解――」
――不安なのはくしぶりの緊急実働だからか。
「アスカの弐号機は、少し角度を変えましょう。駒ケ岳射撃がベストかって」
駒ケ岳は箱根山カルデラの中心、箱根山系の複数ある頂きの一つだ。過去の戦闘で周囲の上系、というわけカルデラの中で一番標高が高かった神山の山頂が崩落し、標高の順位が繰り上がった。この駒ケ岳射撃ベストは、第三新東京を望するカルデラ全域をおよそ見渡せる唯一の対空陣地で狙撃ポイントである。
芦ノ湖の東側、ネルフ本部からは南南東に約四半に位置し、地上を行けば複雑な箱根の山を越えていくことになるが、地下にエヴァの高速輸送路があり、山頂までは傾斜リフトで一気に登れ、外部電源を必要とする弐号機でも緊急展開が可能な位置だ。
「弐号機アスカ――解」

三年ぶりの警報が市街地に鳴り響く中、本部発令所では青葉が外線を切って振り返る。
「松代の戦自が協力を打診してきました。十勝の防空ーRサイト観測のカトル機の全画像も添付です」
「使えた話ひとつもあるかなんでも」
にべもなくミサト。
「だったらまだマシです。今回の騒動、マッチポンプと思われるかも」
実際そう非難されるだろう。使徒も量産型エヴァもネルフ、というよりネルフJPNはおろかシンデンを発出したと――
「武官の作戦視察までは受け入れると伝えて。来る度胸があるならね。戦自の部隊がカルデラを越えないように注意して」

電離層D層の高度で〇〇エヴァはボッと白い煙に包まれた。流れ星が燃えて光る高度だ。空気の抵抗に負けてばらばらのように飛び散ったのは、ガンマ線レーザー砲の基部、内側からシャーペンの日峯のパネルか…？

第三新東京新市街の地上施設が衝撃波被爆に備えて地下へ潜っていく。
「受けきれずとも備えで耐えられる。受けられなかったら地下まで抉る被害がでる」
「初号機、落下予測点修正、日本海岩方面――」
「初号機了解――」
ネルフJPN本部の中心、地表に出た初号機は地響きを立てて東へダッシュした。
重重級のEVAは脚のローストライカーの陸にジャンプ補助ジェットがある。それも使って飛び越えていくのは地上施設がいくつも回る多重環状レール、その中心には巨大な穴。
大きなその穴はかつて富士エヴァの群れが襲来時、ぶち抜いたジオフロント区画の天井、その穴を綺麗に整形し直した正円。だがかつての地下のネルフ本部は見えない。
そこから見下ろせるのは穴の縁からマイナス二百メートルに位置する巨大な白いドーム屋根。
その通称、石棺がかつての地下世界を埋没している。このHードバードテクタイトコンクリート（連結結合力フ状コンクリ）の下、何重もの複層装甲を挟んださらに下に、それらが日本部施設を被重に封印している。

「コントロールポストから初号機、シンジ君。エヴァの目で落ちてくる〇〇エヴァを視認出来るか」
F型初号機は制動をかけ空を振り仰ぐ。
夕空高く光のシミ〇〇エヴァの点側だけに太陽が当たって――速すぎて　ムイメ　シかしてまうすぐ立て――
「――かすかに　――意識集中してみます」
エヴァのパワーシーバ、ATフィールドは個人の壁であるがゆえに基本的には自分のまわりにしか張れない。体から離れた位置にも生成可能だが、

「――それは嘘」

綾波の声とともに、シンジがATフィールドを再び展開発生させるよりも早く相手が強固なATフィールドを生成した、壁のように。

「えっ？」

シンジは思わず聞き返す。

聞こえたのはガリガリと欠ける音声、だがその綾波の意思はクリアに響いた――その声に周囲の音が消えたように感じた。

アスカは不快な直感を得た。それを弐号機は吸い上げて――アスカの入力を待たずに急なマニューバで飛び退く。

直後、鼻先を焼かれるような感覚の瞬間、いま立っていた場所がまばゆく

「Ｏ２エヴァ発砲！」

言った自分にアスカは驚んだ。

「――なんでっ！」

大音響とともに弾けた。

箱根山駒ケ岳射撃ポストは本来、兵装足を持殊火砲ATフィールドシンカーに改造し機動力が半減したF型零号機のための施設だ。爆撃や使徒の高侵徹攻撃にも数回は耐えられる頑強な設計だ。

だがその数々の多重装甲板が溶けたバターのように液状に飛び散る――

「きゃあっ！」

第二新東京市から見て南方の山の頂上に金色の光線が降った。

突然の大きな爆発。発令所のある本部施設はその重装甲の上に制震構造を持つが、それでも下から突き上げる振動が響いて

「射撃ポスト被弾！」

騒然となった。

「Ｏ２エヴァのガンマ線ソーサー砲――！」

「今の振動――地下何層まで徹った？」

「弐号機？　アスカ？　ダメージは？」

ミサトはモニターを見たが、

「着弾被機による電磁障害発生――ＥＭＰシャットダウン、外部に繋がる通信モニター、すべてが再起動」

このほんの一時的外部断絶はこの場合無限と同義語だった。ノセカンドで進行する作戦、あと数百億分の一秒もというわけではないし、距離が離れるほど難しい。

「ＡＴフィールド――」

だが、ヒトの壁という特性をまえれば、ある程度の応用はきく。初号機は両手を天に突き上げる。

遥かなその場所に自分がいるイメージ、意識が集中出来る依りどころがあればベストだ。その場にいてＯ２エヴァを受け止める感覚。

距離はかなりあるが、直接視認できる方向なのはラッキーだ。ヒトはまず見て確認する動物であり、見えれば壁 敵向こうですら意識集中は難しい。

「…フォーカス――ミ゛゛゛マーク――」

ネルフ本部施設の動静監視テレスコープは、落下してくるＯ２エヴァが――宙に発生した繭部のまやけた小さくかすかなATフィールドに衝突音もなく突き破るのを捕らえ、発令所のディスプレイに映し出した。

「初号機、繭部フィールド第二次生成」

「二次も速度を衰えなかった、まだ遅い――」

「カール機、E層突破――」

「シンジ君、一度にあなたが集中できるのはいくつ？　二回、対流圏に入るまでに少しでも速度を殺しておきたい」

そうしないと広範囲に衝撃波の被害が出るということだ。言われなくても――

「弐号機、駒ケ岳射撃ポスト現着――当機もATF遠隔生成にて入る」

「じゃあアスカの合図に合わせるよ」

譲ったつもりが立て板に水だった。

「はあ？　他人のタイミングに自分の呼吸合わせるなんてシンクロ率ゼロのアンタに出来るわけないでしょ！　そっちがカウントなさいっ！」

弐号機はまだにケーブルをうっ張る旧来のエヴァで、パワーや行動範囲、作戦時間ともにS機関搭載型には及ばない。だがアスカの弐号機は精度が高く繊細な作業を正確にこなせる。本部戦時の頭部損傷で目の数が少なくなって、現在は初号機に似た双眸のマスクに変わっているが、その目はうられることなくＯ２エヴァをズームし捕らえていた。

「でもやっぱり目は四つ欲しいな」

弐号機も両腕を突き上げる。

「それもう一度よ、スーパーシンク」

「それは勘弁――」

ボッとＯ２エヴァのまわりに波紋が出来た。

――まずい。

発令所のマコトの声が状況を告げる。

「成層圏に入るぞー」

――ふーっ

シンジは息を深く吐くと、再度Ｆ型初号機の目で白く煙るＯ２エヴァをにらみ据えた。

「フォーカス――フォーカス――」

シンジに合わせアスカも宙空に力を込む。

「あそこに届くんじゃない、あそこに居て立ちはだかる…」

――余計な力は抜く、ゆっくり呼吸しその合図を待つ。

「マーク！」

生成したフィールドはまだまやけていたが、エヴァ二機ぶん二層のフィールドが張られる。

望遠画像は、瞬間的に大きなＧが掛かってバランスを崩したＯ２エヴァを捕らえた。

「コントロールからエヴァ両機へ、いいぞ、かなりの落下エネルギーを殺した――もう一度減速してやれば――」

日向は一定の成果に満足したが、Ｏ２エヴァの大きく姿勢が回り――

「――立て直したぞ！」

彼の声に今は部市管制に回っている青葉もアイコンタクトを見上げる。

「ただ自由落下してるんじゃない、制御降下してるのか？」

「予定落下地点がずれた――南方向、距離一〇〇〇、芦ノ湖中央――」

すかさずミサト。

「アスカの方が近い――」

「まーかせてっ！」

「初号機もっと――」

関東入れず型初号機は、猛然とダッシュし新宿下予想地点と、この場所の間を隔てる仙石岳裾野の樹海に踏み込んだ。

おかしなものだ、どれだけエヴァやパイロットが弱っている時でもまず確実にATフィールドを張れる場所がある。それは着地する地面だ。でなければたとえ着地された場所であっても自メートルを超える巨体が埋まることなく歩めるはずもない。

これは何とも部合の良い話に聞こえるが、かつてのネルフ首脳陣はこれを承知に受け取っていた事が、残された資料から現在スタッフは知る。

――ヒトの形の限界

ヒトは地面から離れる事は出来ない、地を這い回ってまわれこのみ存在が許される――これは禁であり、その証明だというのだ。

？　それ当たり前のことじゃないの？

当時言ってのけたのはアスカだったか――一気圧の大気を切ってＦ型初号機が駆ける。

――間に合え！

芦ノ湖東岸。直接山が湖に落ち込む形のかつての地形は、数々の使徒戦で何度も樹木は焼かれなぎ倒され、何度も元どおりの、地形も大規模に崩れしたかつての急峻複雑な山系ではなく、樹木も若い低木ばかり。それらを飛び越え――

最後の着地の後に大ジャンプ――初号機はＦ型特有の衝角から後方へ伸びる鋭角のラインに乗せて雪を何本も引きながら、低音と高音が不協和する風切り音を響かせ芦ノ湖に浮かぶフロートデッキに飛ぶ。

Ｆ型は元はＡＣエクスペリメント・フィールド制御実験機で、ATフィールドを人為的に偏向し、防御以外に飛ぶことすら目論まれた。結局そこまでは及ばなかったが、強い拘束具は単なる重装甲ではなくフィールド誘起プレートの塊なのだ。フィールドアシストされたシンクロは過大で、重装な機体が、軽くスマートな通常装備より速かに距離が出るのは、まるで錯覚のようだった。

中空ウエハース構造のフロートデッキを着地の瞬間大きな太鼓のような音を立てて一周に跳ね返る。

続く耳障りな金属音を船面に響かせてＦ型初号機は構造的に制動をかける。デッキを定点に保留していた碇綱――大型船舶用の重いアンカーチェーン数本からなされて水柱とともに湖面を跳ねた。

仰いだＯ２エヴァは夕空に見る飛行機のように残照を反射し明るく光って、

「――今！」

ハイドロプレスからアスカの声、ちょうど弐号機が生成したフィールドが空に開いてＯ２エヴァがそれを突き破る――

「綾波、来い――受け止めるー」

応答のなかった相手がぽつりと答えた。

十秒で終わるこのときに発令所は耳と目を塞がれたのだ。

初号機からは、吹き飛んだ頭は東。驚いてシンジが叫ぶ。

「カトル?! アスカ!」

オレンジの警告サブディスプレイがいくつか開いて、作戦通信の相互データリンクとセンサーのいくつかが耐EMPモードで時的にシャットダウンされたと告げる。

ガンマ線レーザーと着弾のプラズマ雲は全帯域で酷い電波障害を引き起こし、発令所CPとの連絡もテレメトリーも弐号機との交信も途絶えた。レーザー回線も瞬間目を閉じたようで互いの位置を口ストした、真上から来るその声以外は

「その気もないくせに言葉だけ優しくしないで」

0・0エヴァはすでに直上だった。

対流圏に飛び込むと、ドッと破壊的な波を際立たせ広げ――

「なにを」

綾波が?――カトルが攻撃してきた?!

「なにやってるんだよ!」

つぶやくようなシンジにLCL越し電波障害で歪み、欠けた声が響く。

「彼女を選んで補完計画を壊した」

シンジは混乱する。

彼はまだ受け止めようとしていた。

正確な判断ではなかった。混乱は事態に対する回避行動より、事態が起こるまで重要だったタスクの継続を選択し――シンジは判断することから反射的に逃げた――

「だって綾波だろ?!」

ガンマ線レーザー砲の再チャージ前に ――ズバン!

F型初号機は境界面が鮮やかなATフィールドを生成すると、落ちてくる0・0エヴァカトル機に向かってフィールドを押し出した。

「嘘なんか言わない! ちゃんと受け止めるから! 綾波ッ!」

――ドドンッ

天から降ってきた波動がF型初号機を叩き、「ぐッ」よろめいた。

それは大音響となって数十キロ四方を叩いた。

――だがこれはいわば余波。

最初に0・0エヴァカトル機のフィールドとF型初号機のフィールドが宙で上下から衝突。

どちらも譲らず、それは二次元面で起こる大爆発のように天で弾けた――だが次の瞬間、初号機はシンジの意思とは関係なく、シンジの意思を具現化する。

自分を中心にした全周囲のフィールドを発生させ、それを瞬で数十倍の大きさにまで押し広げた。

綾波カトルの0・0エヴァを含めた一帯が飲み込まれ、実験でシリンダーのピストンを引くようにフィールド内の空気は突然に急減圧され、一瞬真っ白になったかと思うと、フィールドの外側で押しのけられた湖水――縁の高さが千二百メートルを超す擂り鉢状に立ち上がった数百万立方メートルの湖水津波の熱を奪って瞬で凍り付き――

驚くべきことに0・0エヴァの激突と、殺しきれず広がっていく衝撃波コーンの先端は、この氷のパフボフが受け止めた。

それらが飛び込み、膜状の雲が一瞬、天に跳ね返って消える。

――ゴッ っと、広がった入道雲のような氷の造形物は、瞬膨れると、大崩落しはじめた。

第三新東京市から見た背後の山々を遥かに超える水の器は爆散――と言っても規模が大きいので奇妙にゆっくりだ。砕けることで都市を叩きのめすはずだった最後の衝撃波のエネルギーを奪った。

先端を失って収まりきらずに広がっていくウェーブはカルデラの外へと散ってゆく。

芦ノ湖周辺全域の気温が急激に下がりダイヤモンドダストがキラキラと降り注いだ。

「作戦部、発令所にデータを転送して」

そのマヤの声に若いスタッフが答える。

「数字とグラフばかりになっちゃいますが」

「出来るだけ立体的に模式化して」

湖の上のフローティングデッキはエヴァの試験用設備で無人だが、厳重なシールドで様々なセンサが設置されている。大半が粉々になったが、技術部科学部兼任主任の伊吹マヤは、本部施設内の彼女のラボで服の色の違うスタッフ達と生き残った観測機器が送るデータをモニターしていた。

「中心温度は千℃近辺から二気にマイナス二百℃以下まで下がっています、あれ断熱冷却ですか?」

――全部止まれッ――

すべてが直前にあった。

0・0エヴァカトル機のフィールドとF型初号機のフィールドが宙で上下から衝突。

どちらも譲らず、それは二次元面で起こる大爆発のように天で弾けた――だが次の瞬間、初号機はシンジの意思とは関係なく、シンジの意思を具現化する。

自分を中心にした全周囲のフィールドを発生させ、それを瞬で数十倍の大きさにまで押し広げた。

綾波カトルの0・0エヴァを含めた一帯が飲み込まれ、実験でシリンダーのピストンを引くようにフィールド内の空気は突然に急減圧され、一瞬真っ白になったかと思うと、フィールドの外側で押しのけられた湖水――縁の高さが千二百メートルを超す擂り鉢状に立ち上がった数百万立方メートルの湖水津波の熱を奪って瞬で凍り付き――

驚くべきことに0・0エヴァの激突と、殺しきれず広がっていく衝撃波コーンの先端は、この氷のパフボフが受け止めた。

それらが飛び込み、膜状の雲が一瞬、天に跳ね返って消える。

――ゴッ っと、広がった入道雲のような氷の造形物は、瞬膨れると、大崩落しはじめた。

第三新東京市から見た背後の山々を遥かに超える水の器は爆散――と言っても規模が大きいので奇妙にゆっくりだ。砕けることで都市を叩きのめすはずだった最後の衝撃波のエネルギーを奪った。

先端を失って収まりきらずに広がっていくウェーブはカルデラの外へと散ってゆく。

芦ノ湖周辺全域の気温が急激に下がりダイヤモンドダストがキラキラと降り注いだ。

「作戦部、発令所にデータを転送して」

そのマヤの声に若いスタッフが答える。

「数字とグラフばかりになっちゃいますが」

「出来るだけ立体的に模式化して」

湖の上のフローティングデッキはエヴァの試験用設備で無人だが、厳重なシールドで様々なセンサが設置されている。大半が粉々になったが、技術部科学部兼任主任の伊吹マヤは、本部施設内の彼女のラボで服の色の違うスタッフ達と生き残った観測機器が送るデータをモニターしていた。

「中心温度は千℃近辺から二気にマイナス二百℃以下まで下がっています、あれ断熱冷却ですか?」

「それだけじゃないわ、このサンプル、原子の重心運動に干渉されてる」

「まさか、レーザーピンセット(光学冷却)でやるような原子運動制御ですか?」

「電磁波騒乱が完全に消えてます。それどころが異常にクリア…。静かです」

技術部と科学部のスタッフが興奮気味に会話を交わす。

「すべての動きを殺したのね」

細い眼鏡を掛けた淡泊な表情のマヤ、潔癖症ではあったが明るい女性だった時の面影は薄い。

その雰囲気は、むしろ彼女の信頼と軽蔑を一身に集めた女性、赤木リツコ博士その人に似ている。

「この氷、水分子の結合が妙ね」

「この結合だとかなり頑丈ですよ、比重もこれたぶんなかなか溶けませんね」

マヤの疑問に科学部のスタッフが答えた。

エヴァや使徒関連の事柄は一つ謎が解けると新たな疑問が浮上する~その連続で、エンジニアと学者は重なる業務が意外に多く、日常的に連携する。

現在ネルフJPNが保有するエヴァ関連の技術はマヤが彼らのリーダーとなって受け継ぎ支え、開発している。その重圧からか今のマヤは滅多に笑わないが、今日は眉間にしわを寄せてため息をついた。

「初号機は唯一みずからS²機関を取り込んだ機体だけど、取り込んで以降この3年実戦データは少ない。元々謎が多いのだから、未解部分なのか新たに増えた謎なのか――」

■再侵攻

暗くなりつつある空の下、光る空気、もうもうと巻き上がる冷気の雲に巻かれて視界が効かない。

衝撃でF型初号機は跳ね飛ばされていたが、湖に沈むことはなかった。

張り付いた氷をバリバリと落とし、完全に凍り付いた芦ノ湖の湖上に立ち上がる。

「よーっ、はーっ、はーっ」

シンジは激しくなった動悸が収まらず、脳内物質が過度に出て吐き気を覚える。

スーツのセンサーがそれを感知し、

――プシュン――

小さな苦痛に、少し眉が動く。

腕に柔らかい樹脂の針が圧力で撃ち込まれ、鎮

静剤が血管に直接流し込まれる。
「はーっ？　どうなったんだ、いったい」
辺り一面真っ白で低温の世界だった。
――やったの初号機だよな　。
カトルは　００エヴァはどうなった？
「　だから――黙れって　」
ヒトの言葉を力で封じた気まずさを――ああなにやってんだ僕は――
――ドーン！
「！」
轟音で静けさはかき消えた。
崩れ落ちた氷の山々の一角が吹き上がって、突き出た腕が凍った湖面を叩くと、００エヴァの巨体が躍り出る！
――Ｆ型初号機に素手で掴みかかってきた。
「綾波！――カトル！」
シンジはナンバー呼称で仏数字である名前を呼ぶ。この言い方はミサトが酷く嫌う～人間をナンバー扱いするのは――シンジもそう思っていた、その筈だったが――無意識に彼は数字として分けたのだ、壊れていない別の綾波達と――この綾波は壊れている。
彼女の００エヴァは大きく破損、肩のセンサーアンテナや大きな主推進器は失い、だが衝撃で変形した、にしては変だった。
――エヴァの形を決定するのは――
奇怪に形の崩れた　よじれ変形した００エヴァは右手でユニットが損壊したレーザー砲をうきずったまま、左手で初号機を襲う。
その執拗さに思わず訊いた。
「僕を殺したいのか？　カトル」
返事は返った、スピーカーからカトルの声。
「カトルが殺したいんじゃない、〝綾波〟が殺したいの」
シンジの中を、高校の制服姿の綾波――物憂げなトロワの姿がよぎる。
「そんなわけ――ないッ！」
「破君が望んだ世界が今なら、あるいはあなたを殺せば――」
――どうなるって言うんだ――
初号機はＡＴフィールドごと倒れることで氷の上を器用に転がり背後へ回った。
「だって、この世界はもう終わる　！」
鳴き声のような力ないカトルの　言。
意味が理解出来ないだがその言が不思議な説得力で突き刺さる。
最後のは本当に綾波の言葉が？
「言ってること解らないよ！」
外装式のＳ²機関を剥ぎ取ってしまえば内蔵電源をすぐ使い果たして００エヴァは止まる。
それがシンジの考えだったが、
――なに？！
背中に背負ってアンビリカルコネクターに接続されていた外装型Ｓ²機関が、いまではエヴァ本体と溶け合って、背中の一部そのものと化していた。
――形状融合してるのか？
全壊した射撃ポストの瓦礫の中から弐号機がよろめくように這い出　た。
ステータスボードの電源表示が、給電と内蔵電源の表示に切り替わりまた戻る。
「つうッ――どこかで給電不良が　」
まあ切れなかったコト自体奇跡だけど　。
――何で外真っ白なの？！
スゴイ音と振動が何度もあったけど、相互データリンクが飛んだまま状況が解らない。
「…ウソ――シンジ……！」
突然のことに視界も聴覚も歪んで、どこかスローモーションの中をもがくようにシンジの名を呼んだ。
電磁から放射線までの騒乱がウソのように消えて、通信や相互リンクが再起動する。
発令所の音声が飛び込んで――
「使徒迎撃シークエンス適用、都市武装ステージ開いて　タ　ゲット設定　カトル機　」
ミサトの声が弐号機のＬＣＬに響く。
誰もが００エヴァにばかり集中していて　。
アスカは叫ぶ。
その巨人はいつか見た二タリ顔で――
「シンジ！　量産型がいる！　あんたの後ろ！　ゼーレの量産型エヴァが――」
視界の限り氷が舞って、キラキラ光る空気の錯覚かと思ったが確かに白い巨人はいた。
「――発令所へ緊急！　そっちから見て初号機の方向！　なんで気付かないの？！」
「なんですって？」
第二新東京から見えるはずの湖中央の方向は、崩落を続ける山のような氷とその爆煙で視界もセンサ　も通らなかったのだ。
駒ケ岳のカメラを焼かれ、対岸の山伏峠側のカメラでどうにか初号機と００エヴァを捕らえていた発令所は、言われて左に振った画面に白い巨人を捕らえるとざわめいた。
ワイパ　が何度も横切り着氷性の霧をカメラから拭うと、這い上がってくる雲の切れ間、胸まで霧に埋もれて歩く白い頭が――
「現時刻をもって量産型エヴァ殲滅ミッションに移行します！　国連及び政府にフェ　ズインを通達　カトル機が邪魔になるようなら手段を選ばず制圧　捕座させてよろしい！」
ミサトは間髪入れず音調で反応、発令　た。
第二新東京全市で発令されていた災害警報が戦闘警報に切り替わる。
――とうとう　だけど――
「軌道上の００エヴァ二機は？」
ミサトはラボのマヤとの通話を発令所内のメインディスプレイ端に移した。
「シミュレ　ション立上げでシンクログラフが両機とも99%、トロワはどこです？　彼女の側からコントロールしないと」
それには青葉が答える。
「保護した警備部が十二区の民間シェルターに運び込んで、以降の連絡が取れません」
――虎の子の探査殲滅システムが使えない！　出動している二機は救難ミッションで――
「…武装がない…いますぐ――」
そのとき日向が疑問を口に出した。
「どうなってる　カラーバターンが出ない！」
「すぐ搬送手順を――どういうコトそれ？」
「量産機全機のＤＮＡと固有パターンはフイブラリにありますが、その一年前のパタ　ンと符合しようにも検出出来ないんです」
ネルフＪＰＮ全職員は、その量産型、行方不明になったゼーレのエヴァを今日まで探し待ち構えていたはずだったが、これほど唐突で至近での出現を誰も想定していない。
それはまるでどこからともなく冷気の霧の中から湧いて出たように、まわりの状況を意に介さず水の上を歩いている。
「そんなわけないだろ？！」
アスカの叫びにシンジは返した。
復旧したシンクはマップに座標と氷の飛沫で霞む白い巨人の画像を開いた。
ウソだろ？
その位置じゃ僕のわきを抜けて歩いて、いったようじゃないか――気付かないわけない！
量産型の画像と００エヴァを交互に見た。
「クッー」
――ドンッー
殴りかかる００エヴァの腕をＦ型初号機も腕で弾く。弾いた拍子に腕が上がって初号機の前面がガラ空きになった。
立ち回りの間、００エヴァは左手で初号機を襲い、右手は巨大なレーザー砲を引きずるように握っていたが、その腕は損傷したのか肩からだらりと下がったままだった。
それが隙を突いて動いた――しかし。
――ゴゴンー　とその腕がガラスの様に砕ける。
「凍っていたのか　」
砕けた腕を抱えるように下にして００エヴァは氷上に倒れた。ドンと氷の粒が舞う。

対空陣地の直接射撃に加え、都市武装区画からの誘導兵器も氷の山越しに届き始めた。だがそれらのインパクトパワーが粛々と歩み続ける量産型エヴァに届いていない。

「A-フィールドが部隊してる」

それを見ていたシンジ。

E型初号機の両肩前方の衝角装甲を開口、湖面を這う雪を隠れ蓑にして一気に距離を詰めると内装兵器インパクトボルトを放つ。

慌てたのは発令所だ。

「迎撃システム射撃中止！　中止！　シンジ君、なにやってるの！　ターゲットエリアに飛び込まないで！」

「でも時間を稼がないと都市部に上陸されます！」

「何を召喚してるの！」

[illegible]初号機からの至近距離だ[illegible]——カタチが何だかは[illegible]。

[illegible]を呼び出す。

[illegible]

[illegible]戦術戦力と判断す[illegible]

[illegible]

[illegible]

「碇君が選択した世界よ」

雲が切れると初号機の背後、と雲のようにＯＯエヴァが立っていた。

「カトル？」

メキメキと音を立てて形を変えている。全身がしわばるように――翼まで。

崩れ落ちたはずのその右腕で持ち上げたガンマ線レーザー砲が――

――違う！　巨砲はあろうことか崩れた右上腕直接、形状融合していた。加速器ガイドが奇怪にねじれたその砲身がこちらを向く。

――何でもない日のはずだ。メールをチェック、録画の映画を見て眠る。それで終わるはずの――

初号機は反射機動で体を引いた――が、動きに追いついた砲口がコンマ２装甲外装に突き当てられた重い音。

「私を救って、あの時間に戻して」

――核融起エンジンが破損している。撃てるわけが。

それが生物としてのヒト存在、碇シンジの最期の思考となった。

収束陽電子砲四百メガ電子ボルトのガンマ線、何ものも貫き通すまばゆい金色の光。

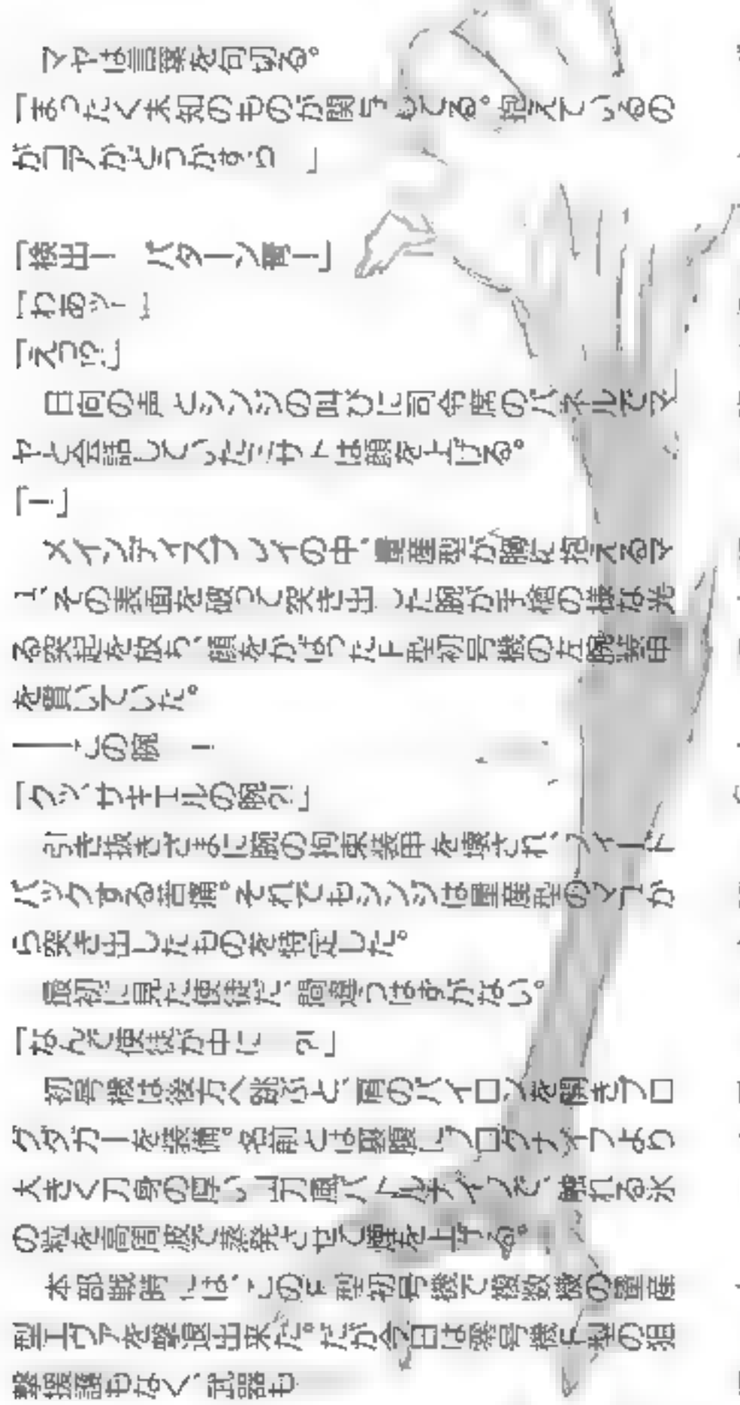
装甲を紙のように貫いて腹腔から入った反重力場は、コアとは化学的に結合しているお機関を傷つけエントリープラグを周辺ごと蒸発させると、首の後ろから天へと抜けた。

■系統へ

弐号機は初号機とシンジが壊滅的な状況に陥ったことも知らず地下を駆けていた。

ＬＣＬセクターを物理障害でやられてポジトロンライフルのＦＣＳ同期に少し手間取ったが、次世代パレットライフルのパワードエイムも受け取った、そのうえ太刀を一振りという出で立ちだ。聞もなく機動合出口、だが彼女の弐号機は突然立ち上まる。

ケーブルで引き張られて追いついてきたのは搬送リフレールから給電するためのターミナル台車、弐号機の停止を自動感知したものの止まりきれず制動から火花を上げ突っ込んできた台車をアスカ



マヤは言葉を切る。

「まったく未知のものが関与している。抱えているのがコアかどうかすら」

「検出――パターン青！」

「わおッ！」

「えっ？」

日向の声とシンジの叫びに司令席のパネルでマヤと会話していたミサトは顔を上げる。

「！」

メインディスプレイの中、量産型が腕に抱えるマトその表面を破って突き出した腕が手槍の様な光る突起を放ち、顔をかばった上半初号機の左腕装甲を貫いていた。

――この腕！

「クソヤキエルの腕？」

引き抜きざまに腕の拘束装甲を壊され、フィードバックする苦痛。それでもシンジは量産型のコアから突き出たものを特定した。

最初に見た使徒だ、間違うはずがない。

「なんで使徒が中に！？」

初号機は後方へ跳ぶと肩のバイロンを開きプログダガーを装備。名前とは裏腹にプログナイフより大きく刀身の厚い刀風バルディだ。触れる氷の粒を高周波で蒸発させ煙を上げる。

本部映像には、この量型初号機と模擬機の量産型エヴァを撃退出来ただが今日は零号機と弐号機の狙撃援護もなく、武器も

動道上から落ちてくる使徒を受け止める、そういうミッションだったのだ。大型武器の携行があろうはずもなかったが。

繰り出すプログダガーの先端がＡＴフィールドに似たパワーシールドに衝突、宙で止められ量産型エヴァに届かない。

量産型エヴァは粘々と歩み続けている。

シールドの合間に届いた攻撃に、反撃してきたのもマトから飛び出したヤキエルの腕で、白い巨人そのものからの物理攻撃はない。

「シンジ君、無意味な機発を避けろ」

「データを解析してください、弱点見つけないと！」

日向の声にシンジは返す。

――何かまはないか。

インパクトボルトは効かなかった。ナイフもどちらもシールドで――まとよ。

Ｆ型初号機は再び肩の衝角を開いてインパクトボルトの発砲体勢をとった。

開いた左右衝角の間に空間立像の黒い球を生成――だが暴発を発生させずそのまま量産型のシールドに突っ込んだ。

宙に浮かぶ黒い球は、激しい電位差を発生させる目的で、全身を遮蔽できるＡＴフィールドをひとまとめに通常空間とのバランスな位相差をより際立たせた姿だ。

「食い破れ！」

実際にそうなった。巨体のタックルは進行中で、相手シールドに穿った穴に左肩をぶつけこじ入れる――マトから再びサキエルの腕が飛び出て襲うことまでは読めている。

――マトより節が長い腕がどうやって入ってるんだ？仮眠じゃないかそれ――

開いたサキエルの手から手槍が伸びて初号機の腕を貫いた。シンジは痛みに耐えそのままサキエルの腕をつかむと

「でえいィー」

力任せに引きずり出す――プチプチとちぎれる手応えに続き、腕とは銀腹にどろどろとした柔らかく小さなキ分幼虫のようなボディが。

「こいつ――〝出来かけ〟なのか？」

――視線、量産機の白い顔がこちらを見た！

シールドを破られてついに量産型エヴァが反応、打撃武器を持った腕が大きく回って、Ｆ型初号機を横殴りにはじき飛ばす。

「がッ――あー」

何と撃たれ装備の腕をかちられた。初号機の巨体が氷をなぎ倒しバウンド――だが。

湖面に叩き付けられた初号機の手にはプログダガーがなかった。

それはサキエルのコアがあるべき場所に、深々と突き立っている。

「どうだ！」

シンジの手応えは確かだ、使徒の体が崩からぼろぼろと崩れ始めた。

「やった！」

喚声が上がる発令所だが、それもつかの間、量産型エヴァ本体は止まる気配がない。

初号機を吹き飛ばした量産型エヴァ。

その白い巨人はマトの裂け口から崩壊するサキエルをはらまきながら向きを変え、元の通路に歩き始めた。

「碇君が選択した世界よ」

「違うのか？」

あるいはあのマトの出来損ない使徒が、死体である量産型エヴァに力を与え制御しているのかとも思ったのだ。

巨人の行く手をさえぎる氷の壁、初号機瞬間の暴走が生んだ氷の器は大きく衝撃波を受け崩れた氷とその基部が巨大なダムのように谷を埋めて第三新東京市方面を厚く覆っている。

――そこで止まった所にいまの攻撃をもう一度！

それは叶わなかった。量産型エヴァは止まらなかったのだ。真っ直ぐ氷に入っていく。

「？」

溶かして渡っている――のではないようだ。何も飛び散らず、何のエフェクトもなく巨体が氷にとけるように消えていく。

ハッとなってシンジ。

「こじ走がったら…！」

初号機を立ち上がらせると――腕を折られた衝撃が響いていたのだろう、右肩の拘束装甲が、コッと弾けて開れ落ちる。

シンジは、構わず損壊した巨体を立たせると量産型エヴァを追う。

残った左側のインパクトボルトを開くと、超低温下の異常な電導で攻撃の集点が絞れないまま、電撃で周雲に氷の表面を叩き砕き、その間に量産型エヴァの背中は氷壁に沈むように吸い込まれていつしか消えた。

一歩遅れてその氷にタックルするようにぶつかった初号機は、その体積数倍の氷を爆砕したが届かなかった。もう二本のプログダガーを最大発振で突き刺すが、刀身が叩き込まれるだけ高周波振動が及んだ周囲の氷ごと吹き飛ばしたが、求める手応えはない。

「ＣＰ　量産型エヴァをロスト　何がどうなって　－」

「シンジ君、何とかその氷の壁を越えてちょうだい、手間取った分リスクとの合流が遅れる。右腕の状況は？」

「グッ　折られました――まだやれます」

――くそッ！

初号機の左腕が氷壁を叩いて砕く。

何でもない日だったのに――いつのまにアスカやミサトさんと食事してそれから――

「何が起こるって言うんだ　」

は踏みつけて止めた。
「…ミサト――ミサト！　どうなってるの？　地下に量産型エヴァがいるー」
　現在の基地の地盤装甲は、過去のものと違って装甲の各段それぞれ薄い隙間を空けているが、さらに広い間隔を空けた地下空間階層が数十層ことにある。いわゆるスペースドアーマーで侵徹攻撃の力を緩和分散でき、さらにその攻撃が飽和状態で続いた際は各層に溜り込んだ衝撃エネルギーをこの大型空間が受け流す、そのための空きスペースだ。
　その斜めに入り組む構造材の間を頭がつかえそうな白い巨人が歩いていた。
　座標と映像を転送する、ざわめく発令所の音声。ミサトも虚を突かれたようで、
「――待って…アスカ？　確かなの？　どこから入ったというの」
　それはシンジが仕留め損なった量産型の変異体に違いなかった。破れたマユから崩れつつあるサキエルをぶら下げてゆっくり歩いて行くその方向は、
「日本部施設ト」
――何をしようって言うの？
「アスカ、よく聞いて、いまからロンギヌスの槍の保管封印を解くわ　取りに向かって」
――ミサトはイヤな予感を感じてる。私もそう、戦って倒すのではなく、一撃で確実にケリを付けろってコトね――
　私と弐号機で十分、どこかでそう言った自分を彼女は裏で笑った。
「フン」
「なに？」
「なんでも――弐号機ダスカ了解、ミサト、シンジは？」
「湖面の状況が不明なの、地上でまた広範に電磁障害が発生した。カトルがまだ動けて発砲したのね、初号機を現在ロストしてる。いま無人機を飛ばしたからすぐ解るわ」
――何やってるの、スーパーシンジー――
「最初から本丸狙いなわけね」
　両手を腰に当て、ミサトは発令所を見渡した。
　各市民シェルタ　から低温障害への窮状を訴える通信が集中していた。加えて低温超伝導障害による区間送電停止、あちこちで水道インフラの破裂が続出し、場所によっては水害になって、流れ込んだ水が隙間で凍って押し広げ連鎖的な破壊になっている。
　だが扉の外はさらに低温だ、呼吸するだけで相当数の死人が出る。今からこの地下でカタストロフに差し掛かる外周部。
　損壊しているのはネルフ本部戦の名残り、量産型エヴァが群れになって押し寄せ、地上都市ごと天井をこの地下に落とした。その一年前の残骸がここには片付けられることなくまだに横たわる。
　すべては中心部を、かつてのネルフ本部を封印するため捨て置かれた一年前の姿だ。
　瓦礫が続く行く手には綺麗な壁がある。その向こう側は旧本部施設地区だ。
　この壁は～天井や構造材で全容は見えないが～旧本部施設地区をぐるりと囲んでおり、上に行くほど曲面収束して、地上に開いた穴からは〝石棺〟として見下ろせる。お椀を逆さに伏せたような巨大な装甲ドーム、目の前の壁はその一部だ――その中には　。
――ドドドンッ！
　突然、量産型エヴァの歩み入った地面が連続的に爆破され　床が抜けて白い巨体が地面に吸い込まれる。
　量産型はもるむことなく立ったままの姿勢で二階層下の床面に着地――した瞬間だ、
　もうもうと舞い上がるダストの中、彼は下あごから後頭部横へ向かってを口ンギヌスの槍で刺し貫かれていた。
――それは量産型の正面からで、爆煙の中、弐号機の目が光る。
「久しぶりの再会なのに、待ち伏せなんかでごめんなさい」
　アスカは努めて落ち着いて話しかけると、弐号機の赤い剛腕は突き入れた槍に力を込めてグッとねじり上げた。
　ロンギヌスの槍、二叉の穂先と竿を繋ぐ部分、その上霊螺旋がたわむ、螺旋の中の何もない空間が突然パッと輝くと――その前方、量産型の下あごが粉々に飛び散った。
　それは後頭部まで吹き抜けて、難骨を剥き出しにした。残った上あごに白い歯が不気味に並ぶ。よろめいたが、杖をかざすと、
――バンッ！
　ATフィールドに似たパワーシールド。その反発力で弐号機をはねのけた。
「まだ動く?!　おなかがマユなんだから、コアはその辺じゃないの?」
――コアがあれば、だけど――
　引き抜けた槍を弐号機は構え直す。
「ゾンビ映画ならコレがお約束だけどさ！」
　ふらつく量産型エヴァは一歩下がって上体を安定させると、杖を横にして肩の後ろに掲げた。
　投げる気？　簡単に避けられるわよ。
　だが彼の目標は弐号機ではなかった、その壁はこの階層からも見えている。
　ゴッと風が唸って弐号機をかすめる。
　量産機は装甲壁〝石棺〟に向かって、杖を槍のように投げた。
――それでは儚しか付かないー　モニター越しに発令所スタッフはそう思ったが、それは杖の先端にシールドパワーを乗せた強力な　撃で、石棺に突き刺さると二層目までのHTコンクリートが放射状に砕けた。
　それでも持ちこたえた。
　アスカが、そして発令所の面々がそう思ったとき、突進してきた量産機は弐号機のわきを駆け抜け、壁へ――
「アッー」
　強烈な光、そして衝撃！
「アスカ！　マユの中のサキエルがまだ　」
　ミサトは叫んだ――が、光線を撃ったその仮面～サキエルの顔も、映ったアイスノンの中で力を使い果たしたように崩れて座になり、ついには何もなくなるところだった。
　捨て身の光線、照射打撃が装甲板を何層も剥ぎ取って、壁をさらに薄くしたその場所に量産機は突っ込んで、とうとうその質量分の運動エネルギーで壁を砕いた。
　全身が裂けて赤黒い血にまみれた巨体は、向こう側へ転がり込む。
――バンー
　ミサトが司令席のコンソールを叩く。
「やられたー」
　MAG　が基地自爆案を上程、審議を始めた旨をメインディスプレイで告げた。
　警報が鳴り、石棺壁面に百メートルおき設置されている赤い回転灯が瞬き始めると、運動して内部でいくつものフイトが点灯された。
　照らし出されたは爆撃の跡――その中心。

そこには世界に穴でも開けたような黒

旧本部ビルの場所には真っ黒な孤が不気味に建物も空間もえぐった姿でいた。

周囲のライトの光をまったく反射しない黒様な黒体空間。それは旧本部施設を包むドームはなのだが、反射がないのだ立体に見えない、まるで穴のようだ。

だがその黒い曲面は、ジオフロント地表から頭を出した一部に過ぎない。全体は地下にも及ぶ閉じた球で、中心にはリツがいる。

一年前のネルフ本部戦の最終局面、シンジが「型初号機で補完計画の空中祭壇を破壊した直後、本部どころかさらに地下深くセントラルドグマの人型を生む人知リリスは自分を中心に異常な空間を押し広げ、その内部の時間を凍りつかせた。

それがこの黒い闇だ。

その空間は、本部建屋とその地下にいた当時の基地司令碇ゲンドウや赤木リツコ博士らを始め職員百五十数名と、職員を皆殺しにするため踏み込んだ戦自特殊部隊の十数名を巻き込んでみるみる黒く固まったと言われる。

機械はおろか、探査ビームも音波も通らず、目の前にあるのに温度すら解らないのだ。

〝時間停滞フィア〟

その名付けられたこの黒体は、のちの測定でスフィアではなくオーバル、〝卵形〟であると判明したのがせいぜいだ。

時間が止まっている事実もそれが直接観測できたわけではなく、物質や電磁波からミクロまであらゆる波が一切伝播しない。

〝それはある瞬がないから〟という二次的な結果の推測に過ぎず、時間のたわむ特性は量かなれど七時間との物理共存はあり得ないという議論からそれは限りなくゼロに近い。

――停滞している、そう結論されただけで、知り得たことはあまりに少ない。

この異常空間に議論百出する中で、だが理由に関して皆の推測は共通した。

――補完計画の消滅で、リツは眠りについた――

恐らくこれは当たっているだろう。

時間を止めての絶体の眠り、何者が妨げられようはずもない。だがいつまでの、何のための眠りなのかは誰にも解らない。

何が起こるのか(起こらないのか)解らない。だから日地下部市ごと厳重に封印されたのだ。それに伴い受動的なセンサは残されたが、こちらから仕掛ける能動的観測中止に伴い空間解除の検討はすべて打ち切られた。巻まれた人々は公式には死亡扱いそれでもの先何も起こらないなら　納得できず、しかし了承した家族はかりだ。黒い球面はそれらの思いも飲み込んでそこにある。

「アスカ！　止めて！」

だがこの雪ぬかるみをを訪れた。

「わかってる！」

――パシン！

ソケビカルケーブルを切り離し、弐号機は弾かれたようにダッシュ、内蔵電源のタイマーもゼロへ向かってまり出す。

来訪には理由があるだろう。抑えようのない嫌な予感。

――どこが弱点なの？　何がパワーを与えている――

集るミサトが、それでも画像の電産機にハッと見留めたその場所を、マヤに助言を仰がず弐号機に伝えた――赤い光――

「アスカ！　サキエルが消滅したのにマコの裏が光ってる！」

ミサトは怪しいところを突いたけど仰せだ。作戦とは呼べない気もするが、何かあっても止めろ、そういうことだ。

「ヤー！　ボス」

アスカは機等で電産型エヴァの足を追い抜きざまに払い、倒した際を突いて乱方くまる。

わざわざ相手の領界に入ってからの攻撃だが、万一破壊で爆散されると、背後の時間停滞スフィアにどう影響するか解らない。

彼女は緻密そのエネルギーを弐号機のATフィールドでさえるつもりだ。

立ち上がろうとしている電産型エヴァの前で、弐号機はくるりと身を翻す。

〝ノとダスケが翼い上がるその回転運動に乗せて――ロンギヌスの槍を突き出した。

――すかさず電産型エヴァはバリアルドを生成したが、火花を散らし突き抜ける――

光っているマコの裂け目の奥へ

「そこ！」

同かた突き当たり　双の腕先は〝それ〟を捉んで背中に突き抜けた。

――ドクン！――

まるで俺が教えるように、アスカは直感できた。

これが――！

〝この扉にかりそめの命を与えたもの。

向かい合う電産型エヴァの右腕がや弓機を押しのけようと突き出された瞬間――弐号機は電産型に突き立てている槍を握ったままその下を流れるようにくぐる――

鉄棒の選手が体の前後を入れ替えるように槍の反対側に立ち上がった時、弐号機は体を回し電産型を背後に取る形。

「いっちゃえ！」

背中から電産型に倒れ行くように槍を引き込む――気に。

後方から電産型の左手が伸びて、弐号機のプラグスクをつかむ、だが遅かった。

「おとなしくもう一度死になさい！」

――ズンと槍が震え、緑液が飛れて光る。

マコの裏の〝それ〟がブッと抜けたとたん、アスカの目の前、ホロデイスプレイいっぱいに前方視界を奪う五本の白い指は腐肉に戻り、糸をついたようにほろほろと崩れ始めた。

続いて全身の崩壊も始まる。

――終わった――

だがそこで振り返り気付いた。崩れつつある電産機の顔は弐号機を見ていない。

――すっと時間停滞スフィアの黒い闇を見ていた、死体に変るその瞬間まで。

「こいつ…」

アスカにはそれが満足している顔に見えた。

白い巨体が崩れた轟音を最後に、巨大な黒い卵が鎮座する地下の封印空間は再び深い静寂に戻る。

「ご苦労様アスカ、処理は任せて」

聞こえたミサトの声はなぜか沈んでいる。

「引き続きで申し訳ないけど、近くのフェンスすぐ地上に上がってちょうだい、搭座した初号機の緊急回収を手伝って」

「シンジ…あの馬鹿なにやったの？」

初号機が取り返しのつかない状況に陥っていることを人々が知った頃、すでに緑液カヲルはOOエヴァとともに戦場から姿を消していた。直後に復旧していた探査網には、切断からすでにまるでかき消すように――

■白い使徒

カルデラ内はまだ氷点下だったが、ヒークよりずいぶん気温が上がった。

第三新東京の戦災復旧は始まったばかりだが、いきなり問題に直面していた。

電動車両は低温による電圧降下で性能を発揮出来ず、どうにか動かした内燃機関は止めると再始動が困難と回しっぱなしとなった。

騒々しいはずだったが、雪が音を吸い取って少し離れると作業風景が幻のようだ。

そう雪。

氷の粒は空気中の水分を集め、カルデラとその周囲にだけ雪を降らせ、復旧を急ぐ人々をさらに当惑させていた。この四十世紀、雪など経験がない。日が暮れてずいぶん経つが雪と立ち昇る蒸気で第三新東京の空は、ぼうっと光っていた。

積雪であるべき瓦礫無人機から全景を望む箱根山カルデラはスノードームのように見えた。

警備部の防弾車輛、黒いSUV二台が滑れない雪道をおそるおそる抜けてネルフ本部に到着すると、中央の車輛はスライドしたドアから、車いすに乗せた綾波レイを降ろした。

下校時に倒れた彼女は、自分自身とも言える同じ綾波カヲルがシンジ達を攻撃して姿をくらませたことはまだ知らない。だからなぜ手足を拘束されているのか解らなかった。

――その細の手に白いものが落ちる。

「冷たい…」

〝他の自分〟の声が聞こえまた朦朧としている彼女は、その時ようやくその白いものが辺り一面に舞い踊っている様子に気付いた。

――花びらじゃない、溶けてしまう――

この世界の日本にそういう言葉はない。

――このまま白い中で眠ってしまいたい。

綾波レイトロは初めて見たその雪――初号機が作ったモノトーンの世界をぼんやり見ていた。

〈続く〉

#2 聖誕祭

■滅亡手順

シンジを撃ったのは綾波 レイ カトルだが、彼女は一切のエミッションも足跡を残さずO-Oエヴァもろとも霧の中に行方をくらませている。

彼女を精神ミラー ノンで制御しているのは綾波達の魂のまであるレイトロワ。

よってトロワには今回のカトルの反乱を過失にせよ故意にせよ主導した嫌疑が掛かり、監査室と情報部の厳しい尋問を受けていた。

だが、レイトロワにとって彼らの声は壁二枚向こうのように遠く響くばかりだ。

カトルどころかサンク、シスの声も聞こえない。姉妹を失ったというよりは、自分の体の体積が減ってちっぽけになってしまった、手足を失って動けなくなってしまった、そんな風に思えて彼女は自分を閉じていた。

そのレイ・トロワの 死を拘束後最初に訪れたのはアスカで、ドアは騒乱怒声で開かれた。

監査室スタッフの制止を乱暴に振り切って現れた彼女は吐き出すような嗚咽で問う。

「どうして ー」

それによりレイトロワは自分の分身レイ カトルが、シンジを撃ち殺してしまったという監査官の話が事実と知る。

綾波の希薄な表情を読み取れる人物は未だに少ないが、アスカはレイトロワの表情に、カトルの暴走がトロワの意思でないことを見抜く。それは、なけなしの冷静さの成果で、シンジの死――いや。彼が陥った状況〟をいま取り乱して汚したくなかった。

なにその美化、それってどうなの私、死を認めるの?.. 違う! そうじゃない!

――でもやりきれない! ――トロワの制服の襟をつかんで引きずり立たせた。

「死んだとか簡単に思わない。だって私はあいつに三年前の借りを返してない」

初号機の体は弐号機に引きずられて帰還、メインの第一ではなく、長らく閉鎖されていた第二ケージに据えられた。今でこそ予備区画の第二だが現在の本部施設の中では一番古い区画で、日ジオフロント外周に位置し、地下深くのこの場所も三年前本部戦時は露天で、量産型エヴァはここで解体されていた。

エンジニアたちはコントロールブースのディスプレイに薄く映ったホコリを拭うが、見えている異常事態は変わらない。

初号機の拘束装甲には、貫通したあげく、大岩で も放り込まれた水面のように弾けた跡がある。O-Oエヴァの極めて強力なガンマ線ビームに焼き抜かれ、瞬間的な蒸発すなわち内部での大爆発で体内がめちゃくちゃになった、それなら説明が付くが、それだけではなかったのだ。

骨格も消えていく 二千六百トンの体躯が自重崩壊する前にケージに急遽LCLが満たされた。

初号機の中、F型拘束装甲が包む巨大な人型容積がどこもかしこも一様に同じになっていく、エヴァの体が エヴァだった事を忘れ空白になってゆく、そんな風に見えた。ただ 箇所を除いて――

それはシンジの生死を確認するためにスキャンしたF型初号機の内部を見て、技術部だけでなく科学部スタッフも途方に暮れる。

だが、どういうことなのか解らなかった。

SFまがいの理論物理学者の言葉を、当初同じ科学部スタッフも耳を貸す者は少なかったが、唯一の証明方法〟数学が〝反対側〟の存在を導き始めると、そう考えた方が都合がいいことに大半の人々は気付いた。

半分が向こう側、そう言われてもピンと来る形はしていない。透過スキャナーで見えているS^2機関の姿は、二つの螺旋が絡みついて出来た縦横高さがほぼ同じの塊だ。

三次元宇宙でくちゃくちゃなその塊は、膜宇宙理論の数学的二次元に置き換えると、丸めた布が広がるように鮮やかに形を変える。それは膜宇宙の上に放射状八本のアンテナのように広がる。

膜宇宙理論は、宇宙を二次元と仮定した時、重力だけは二次元面に囚われず高さの方向、すなわち宇宙の外にも逃げていると教える。しかも逃げているエネルギーは何しろ全方位なので面の上のエネルギーより莫大な量だ。

――S^2機関はその逃げているエネルギーをポンプアップしてこの宇宙に戻して使う。

そのハ本のアンテナは実際はもっと遥か長いと思われ、アンテナ間には傘のように膜があり広大な八角形を成している――これが見えていない反対側だと言うのだ。

そしていまS^2機関の〝こちら側〟の姿が減少している。向こう側〟に落ちていってるのだ。

「こんな事例、いままでなかったわ」

この第二ケージで、科学屋としては言いたくないひと言をマヤはクチに出した。

向こう側、それは高次元宇宙で、S^2機関はそちらに深く沈むほど膨大なエネルギーが取り出せるとされる。

――だがいま人々はその火を消したいのだ。

そのうえ計算上、沈むほどこちら側の座標が不安定になるはずで、案の定行き場のないエネルギーが激しく揺らぎ始めていた。

ーを上手く逃がし、初号機に静かな死を迎えさせねばならない。

だが決意とは裏腹に、より事態は悪化する。

〝S^2機関の半径が変化しています 向こう側〟に落ちていってる――」

深夜に決定された全市民の避難は、明くる日、日中の気温上昇を待って実施となった。

第二新東京市を含む箱根ユカルデラ内から外への市民の避難がはじまる。

初号機がどの時点で暴走爆発するか読めないため、国連からエヴァ搬送機貸し出し を拒否された。O-Oエヴァ打ち上げ用の推進ユニットがあったとしても、任意にA-フィールド展開が無理ないまの初号機には使えず、遠隔地投棄の道は断たれていた。

――ここ片を付けるしかない。いま人の流れが交通機関を埋めている。

市民には、都市構造に重大で緊急対応を要す損傷が広範囲に発見され、優日活動を早急円滑に進めるための一時退去と説明された。

実際復旧作業も進められていたが、市民の避難最後尾に続いて作業員もネルフ職員とともに作業を放棄し逃げ出す手はずだ。

日本国政府はネルフJPNの要請に応える形で、国連の租借地である箱根山カルデラから外の〝日本〟に至る幹線道や鉄道駅に戦略自衛隊を配置。避難市民の保護名目で大部隊を構え、検問を設け、第二新東京市民を調べ、連び出していた。

そのバスを待つ並びの中に人工皮膚とラフェイクデータコンタクトで変装し、情報部が偽造の粋をこらした Dカードを持った青葉シゲルが混じっていた。いまの彼に不審を見とがめられる所があるとすれば服飾センスが前世紀な所だ。戦自のゲート係官は妙な顔をしたが、ポリシーと言われれば致し方なく、ゲートはグリーンに光って彼に道を開いた。

背中にギターを背負った彼の目的は、大学の恩師に助力を請うことにある。

国連のヘリで出ればこんな手間は要らないが、その場合、高度な学識者技術者の知識及び人材の流出、特にネルフへの流出、を警戒している日本国政府によって綺麗にすれ違うように舞台設定されるのが関の山だ。

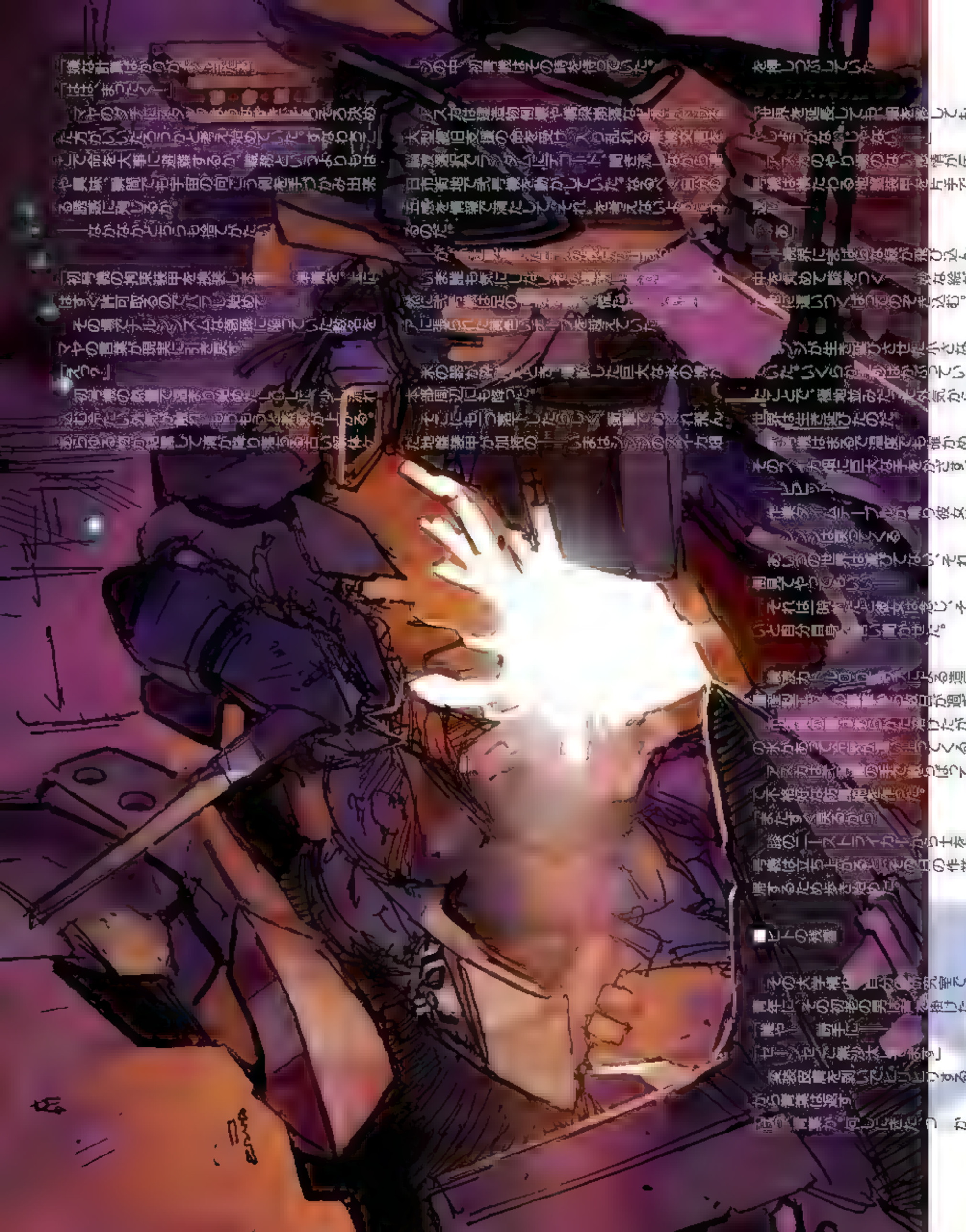
〝いままで欲しいもの何でも徴発してきたから、むしろ個人的には同情するナどね~〟

そう思いつつ彼も手ぶらで帰る気はない。

キを離せ」
「教えてが四年振りに帰ってきたというのに酷いなあ　まあ僕も、ちょっとげんなりしてるんですよ」
たったとキーを叩いて振り返る。
「パスワード盲のままだったなら、出てこなくても電話で何とかなったかも」

「で、本題なんですけど、量子波動ラ　の図面と実験データの写しはどこです？」
「何の話や」
「赤木リツコ博士に量子波動炉の意見求められたことあったんですね。僕がネルフ入りたての頃だから気が付きませんでしたよ」
「・・」
「で、そのときデータを見せられてる」
背後に先生と呼ばれた男、この研究室の助教授は黙り込んだ。
「彼女、どうこと外部の人物に聞いたんですかね――先生、ウチの情報部はおっかないですよ」

男はしばらく動かなかったが、唸っている小さな冷蔵庫を開いてミネラルウォーターのボトルに隠れていた缶ビールを引っ張り出すプシュッ――グビッと気に喰った。
その缶をバンと机に叩き置き
「あれがエヴァを殺す魔法の鍵やからや」
「ほぉ」
とんでもない言葉が出たものだ。
「S機関みたいにエネルギーそのものを引き出せるほどではないが、エヴァもシンクロ率がある程度以上になると、コアの中に擬似的な魂のようなものが発生するのは知っとるな。あのミラーは次元超えてこの手の波を全部跳ね返す」
「つまり霊魂させる、と」
男はつなずいた。
「いや、そうだとしても、なら予算が出て建造できるはずがない、お蔵入りになったとはいえ――」
「紙一重やろ、設定角度変えればコアの励起も出来る。書類はそうだけ書けばいい、つーか、それをウソが計算して書いた」
「なっ　」
今度は青葉の方が驚く番だった。
「設計計算は母親のデータや言いよった、ある日それ見た娘が――女は怖いな青葉」
スチール机のうき出しの扉をガタガタやっていた男は、古いメモ、媒体と書類の入った封筒を投



げてよこした。
　青葉はそのまま腰を上げた。
「ありがと先生。モノはただのドンガラだから、旧ジオフロントでホコリがぶったままあるんだけど、データはみんな一年前になくなってるんだ。急ぐのでまた」
「二度と来るなッー」

　どこだろう
僕がいるのは陽だまりの縁側か
――モウーアキネ――
秋――シンジは秋を知らない
視界の中に暖色が広がっていく
それに郷愁を覚えるのは誰かの心象なのか
光があふれ辺りがはっきり見えない風景
だがまぶしくは感じない
夢の中のような世界でシンジは
――手伝いなさい――
母さん…？
驚きはしなかった
それが当たり前と思えた

――面白いことを思いついたの――
二人なら出来るかもねと彼女は言う
とても大きなシーツを干す要領だと
シンジはぼんやりして状況が飲み込めないが
――さあ、と急かされ結局は立ち上がる
親子は庭に降りた
――こちらを持っているから
そちらを持って広げて
そう母に言われてイメージしてみる

母に合わせてそれをつかんだ手を
ふわっと広げた

――ドドドオンッー
　突然、砕ける波のような大音響が轟いて、体感できる震動が第二ケージを満たした。
　何ごとか？　誰もがたじろいだ。
　まるで巨大な滝の横にでも立っているようだ。
――ドドドーと言う流動音、そして地響き、何が圧力の様なモノを感じて動き辛いが、マヤはコントロールブースに駆け上がる。
「どうなったの？」
「――――！」
「聞こえない！」
　いつもなら他者に一歩以上絶対距離を取るマヤだが非常事態だ。
「S²機関が消えた――向こうへ落ちた？」
　スキャナーを見ていたスタッフは唖然だ。
「ええっ？！　だったらエネルギーは、すべて向こう側に落ちてなにも検知できなくなるはずで――ちょっと…なにコレ」
　ディスプレイをのぞき込んだマヤの表情が変わる。S²機関があった場所が探査不能領域で黒く表示されていた。

　皆、状況を把握しようと怒鳴り合う。
　音だけではない、重力、磁力、放射線に電界、あらゆるノイズが溢れ出していた。
　立体スキャナーはそれらのノイズに叩かれてシステムダウン寸前だったが、マヤが驚いたのはその途切れ途切れの画像の中、黒い探査不能領域を中心に空白一様だった体内に猛烈な速度で体内器官の境界面が生まれ始めたのを見たからだ。
――しかし、
「以前と違う――発達してる――」
　ズンッー　ズンッー　と爆発のような勢いで体組織が生まれていく。
――ゴーンー
　剥がし遅れていたF型の腕の拘束装甲が、成長に耐えかねてLCLの中を弾け飛んだ。
　現れた塊して強靭な腕、それを合図に至る所で同じことが起こった。
――ガゴーンー――ゴーンー
「胸部の前方に入るな――」
　ケージ長が怒鳴る。
「どうしたの？」
「あれを――」
　エンジニアが指さした方向、初号機が向かい合うケージの壁が広く変色し煙が漏いていた。――初号機が何か出してる？
「四番五番八番九番の照明を落としてー」
　機体前方を暗くするとケージ内の空気がかすかにピンクに光っていた。LCL内はもっと顕著で、水中でファイトを灯したような光の筋が初号機の胸の前から放射状に発せられているのが見えた。
「全員防護服着用ー」
　マヤが叫ぶ。
　正確には胸の前に宙に浮いた見えないレンズでもあって、舞流のようなエネルギー――がそこからあふれているようなのだ。
「――いまのは陽子崩壊――」
　コントロールブースの科学部スタッフ二人が突然狂ったように笑い出した。
「は、ははははは、見たこともない粒子をいきなりダース近く観測です、すごい！」
「いいから防護服を着ろー　高次元宇宙の粒子が飛び込んできてるんだ！」
　轟音の中で様々な感情が飛び交う。そんな中ケージに入ってきたクレーンは垂下する十本のワイヤ　の先、混沌とした粒子の奔流にかき回されるLCLの中に廃棄ナンバーの胸部装甲を吊り下げていた。それがいまF型の拘束装甲を剥ぎ取られつつある初号機に近付き停止した。

　滝のような轟音に負けないようマヤは出せる限りの大声を出した。
　防護服の両腕をバタバタと振る。
「みんな集まってエー」
　オレンジ色の防護服の面々が～科学部は肩を叩いて、騒がしい環境は慣れている技術部はハンドサインで互いを呼び集めながら、一回り小さなオレンジのマヤの元に集まった。
「みんな大丈夫？」
　誰もが目を大きくしていた。とんでもないことに立ち会っていることだけは皆わかる。
　ここにいるメンバー全員と同じく、結露する滴ですっかり濡れ鼠顔のマヤは眼鏡の滴を振り、額を袖で拭う。本部戦以降に入ったスタッフは彼女が笑った顔を初めて見た。
「状況が変わったので、ざっと説明します、おかしいと思ったヒトは意見をお願い。今から例のミラー内壁の胸部拘束装甲を取り付けます！」

　その形状はエヴァの通常シェイプされたサーフェスと比べて複雑で、流麗とは無縁の形だった。およそ機械デザインも芸術と変わりなく、制作者の整理しきれなかった試行錯誤、でなければ狂騒の産物だと見て取れた。
　見た目よりたぶん重いよ――
――エヴァを殺せる魔法の鏡――
　これが電子波動ミラーの胸部拘束装甲。
「今まで初号機は高次元に落ちていくこちら側のエネルギーを回収して動いてたー」
「リサイクルってわけだ　」
　マヤの横に立った大柄のケージ長が合いの手を入れる。
「どころが今は高次元側のエネルギーを無制限に流し込んでる！」
「二変して盗電だな！」
「いま初号機はすごい勢いで自分の体を作り替えてる。もう少なくとも体を捨てて全てを解放する滅亡シークェンスではないわー」
　おお！と沸いた　同をマヤは制する。
「でも流入エネルギーの仮想総量と初号機の成長速度は比例してる。グラフのこのあたりのどこかで体の作り替えは終わる。でも右肩上がりのままのエネルギー曲線を見て」
　駆け上がるラインはほとんど直線だった。
「どこかで制御してやらないと成長そのもので暴走劣化して結局自壊するわ。そのとき…いまどういうわけかむき出しになってる特異点がどうなるか予想が付かない」
　見回す。皆がいまマヤに注目している。
「フィッティング作業を開始しますー　流入する波を、囲ったミラー　の内側で無制限に反射させてこだまを作って押し戻します。この高次元の窓からこっちの宇宙が食い破られるその前に――」

　そのときケージ内の轟音に重ねて、数日ぶりの襲撃警報が響き渡った。

　ケージ長がすぐさま人員を振り分けた。
「装備管理及び搬送班は私と第二ケージへ戻るぞ！後の者は伊吹主任に従って換装作業を始めろ。かかれっ！」
　彼が怒鳴るとオレンジ服が双方へ駆け出す。
「あのッー　力仕事はこっちや言うンで、手伝いに来ましたー！」
　入れ替わりで入ってきたのはトウジだ。
「これを着ろ！」
　びしょ濡れの防護服を押しつけられた。
「避難しなかったの？　あなた確か妹さんとかいたでしょう！」
「そのつもりで家出たンですがー　どうにも　妹まここのロビ　でワシのバッグの荷物番です　で、このやかましいンは何の音です？！」
　蒸気の上がるLCLをマヤは指さした。
「シンジ、この騒が　さは棺桶ちゃうやろ　マヤさん、シンジは――」
「中に溶けたそのままよ」

第三新東京全市に警報が鳴る。
――再び使徒はやってきた。言からそうだ。こちらから出向くことはまれで、敵性存在はたいていこを目指して向こうからやってくる。
先日のレイカトルの反転を反切ったそのサイクルは始まっていたようだ。

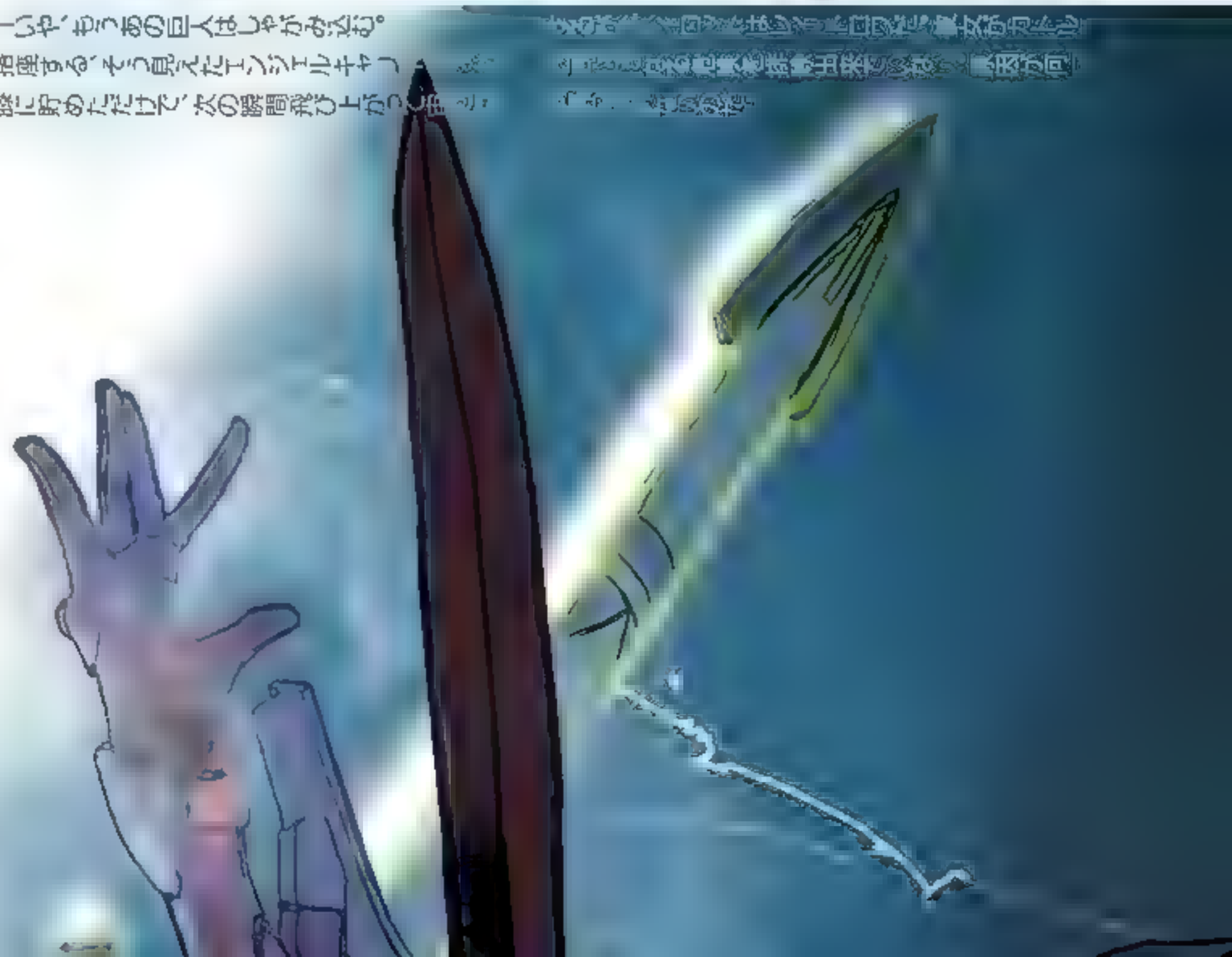
総司令官執務室の脇に置いたレイトロウの眉がピクッと動いた。
「あ…！」
警報と同時に意識を他の端末に回すように繋ぐ。これは訓練による反射行動だ。カトンと見えなかったが他の二人オペレーターとシスは瞬時がった――気がしたがそれまだったたー――あとはまた"一人"になった。
同室している女性監視員が立ち上がり心配の声を掛けたが、イロウは答えるゆとりはなかった。

総司令官執務室ミサトは礼装で発令所に入った。初号機の消滅の予想説明のために第三東京の官庁を回っていま戻ったところで、帰途、彼女を乗せたベンツがイレトロウはキャタピラ青年をピックアップするオペレーターが付き彼は前着早々第三ケージにまった。
ミサトが踏み込んだ発令所は、スピーカーからの聞こえる軌道上のレイヤンクとシスの声で入り乱れていた。
「なにこれ…状況は？！」
「明星ケ岳方向に大型巨威個体出現、数、形態から先に観察したエンジェルキャリヤー と同種の個体と識別！」
エンジェルキャリヤー"サキエル"のマユを捨てた先日の量産型エヴァ原体兵の呼称を、事後ミサトがそう定めた。
「何でレーダーにも監視衛星にも掛からない」
それがどういう手品か、またしても長距離探査網には引掛かることなく、そこまでの光学情報も震動情報も入らず、発見された時には本部東方数というの至近だった。
「で、この二人の声は？」
ミサトの問いに日向が答える。
「突全、覚醒しました。精神シンクを使わず地上からのモニタリング周波を使って音声で相互会話してます」
「イロウは何と。精神シンクは？」
「瞬時がってすぐ不通になったと一この一人も思考脳波にタイムラグがあるので事実かと」
「それでどうして覚醒してるの？」
――猛烈な速度の音声会話、箱根の発令所では、その内容が理解出来なかった。
それが完全に共通の知識があることを前提にその部分をすべて飛ばした会話だとスタッフが気付いた頃にはその会話状態は崩れ、会話の内容が壊滅的に支離滅裂になった。
さすがにマヤとミナトも気付いた。
「よめて　あの子たち壊れちゃうわ、眠らせるの！　脳活動及び代謝制御を生命維持レベルに！」
再び二人が昏睡させられた時にはバイタルデータも正常ではなかった。
S²機関外装のエヴァにカンマ線レーザー砲、ニかハかで使っていう物はつもない。
搭乗パイロットの心神喪失、すなわち、ネルフJP.Nが二年以上掛けて構築した探査撃滅システムは二人の少女に依存することで機能してきたが、同じ理由でいま事実上崩壊したのだ。

「領注一　強襲展開の戦自が攻撃を開始した」
お部タワー九メートの画像がメインディスプレイに割り込むと東の空が紫に焼けるのが見えた。
数秒遅れた画像が揺れる。
「戦自の警備編成指揮官から通達、〇二五時に戦闘状態に突入、市民の避難が完了していないため上空支援はない、だそうです」
「だったら避難誘導先で、戦端開くのまだ早いでしょうが、近くのシェルターへ誘導」
東方向の山稜、稜線から発砲の瞬間だけ銃首を上げると一ム兵器の機動が見えた。
光の速さが土肌を吹き飛ばす。
「何からう」
ミサトがマユをひそめた映像に、日向はピンときたのか思わず立ち上がる。
「あー　実験中だったメーザーキャノンが」

メインディスプレイの画像の中、東の向こうから進行してくるエンジェルキャリヤーにビームが集束を結ぶ。地表方向に沿って焼かれた空中分子がプラズマ化し、弾けると同時にカーテン状に発雷が起こった。
「すごい…」
「戦自の新型メーザー砲車　カバの中身が不明なハーフボギー連結式の装甲トランスポーターが、箱根湯本方面から入った話はどうだったのか」
「ウチにも送電用のメーザービームはあるけど、これはとんでもないわね」
このメーザー砲は、出力はネルフのガンマ線レーザー砲やポジトロンライフルには及ばない。
ただし四秒近くの連続照射が可能で累積エネルギーはこちらが上回る。その猛烈な消費を支えるパワープラントはJA改でせに出たN²リアクター。N²爆連の反応を発電に技術転用した機関だ。
すぐにフィールドを張られたが、アームに載った大きな総端リフレクターから三気に入反射されたビームの最初の焦点がフィールド展開直前にキャノヤーが肋骨で捉えるマユを殴っていた。

「こちらが宮労した情報は　」
「そりゃつかから伝わってますよ」
残りのビームはすべてフィールドで跳ね返されて周囲の山を焼いた。
「初号機崩壊の巻き添えで"メンぼかりにあかしま。は第三東京に下げたくせに」
「後腐れない場所た実証実験だしょう。コレ完成したとはまだ聞いてなかった」
キャノヤーの巨体はようやいたが、
「、止まらないわね。観測機飛ばして」
ミサトがそう言った時だ。
――いや、もうあの巨人はしゃがみ込む。
接座する、そう見えたエンジェルキャリヤーを眼に貯めただけで、次の瞬間飛び上がっ



体をくるりと回すと、着地した時には相当な距離を飛んだ、戦自のメーザー車を踏み潰していた。
「回ってこだー　外したのかまかったのか　」
「みたいね。それに今回のヤツも、以前のキャノヤーと形が少し違わない？　層がウチの工ヴァみたいだわ」

ボーンとステータスボードのサインが点滅。
「他人任せた高みの見物なんて、いままだ出来た試しないじゃない、忘れた？」
アスカの声が発令所に響いた。
「弐号機はレクチナ装備で上がるわよ。メーザー送電お願い、戦自のを電源に借りようと思ったのにやっぱれのの幸いわ」
「冗談ー　あんな大型のメーザー受けたらお電どころかレクチナに穴開くぞ！」
まりに返すスコトにミサトも問う。
「日向君、ウチのメーザー送電タワーは？」
「全塔同期してます」
「アスカ、言いたいことは解るけど、こちらの備えが不完全なとも忘れないで」
事実上、ネルフJP.Nでいま出動出来る工ヴァはアスカの弐号機だけだった。
切り札になるはずだった軌道上からの狙撃網は、たいま当てに出来なくなった。
ネルフJP.Nにはまだ弐号機の上を仕様が存在

そして初号機は――

「エヴァ弐号機発進！」

思いを振り切るように赤い巨人が立つ。

その右手には最初からロンギヌスの槍が握られていた。

本部直地下側の発進ゲートから出現した弐号機はケーブルを引いていなかった。

左肩バインダーに折りたたまれたプレートを開くと、それは大きな十字になった。

「ウェポン展開」

「送電五秒前、ニ、一、マーク――ガガッ」

発令所の日向の声は最後がノイズでエラー表示で切れたが、それがちゃんと受け取れている証拠なのでノズカは慌てない。

「メーザー受信、利得ノ高率値内」

「ＣＰより弐号機、対象がモノレール駅に近付かないよう戦域設定をするように。市民がいる」

通信管制をシフトした日向の声が入る。

「弐号機了解。私もその辺りに近付きそうになったら先に送電止めてくれという。ウェーブで減衰するヒト焼きたくない」

山間や海岸の見通し距離の短い場所を除いて第三新東京の周辺には上空へ送電用のメーザータワーが立っている。これは各国から国連を通じて、その傘下にあるネルフＪＡＰＡＮへの押しつけのインフラで、ＥＯＴ予算にＳ²機関を載せ無限航続にしたことへの能動的抗議、ケーブルや送電ビームのような鎖で行動を限定せよというメッセージだ。

送電効率はなかなかでケーブルからは解放されるぜわりに電磁波遮蔽でセンシング能力は半分以下に低下する。だが今回のように、ケーブル給電が出来ない場所ではそれなりに使える。送電タワーの発信器は弐号機のレクテナを追いかけ自動で動く。メーザー、位相のそろった極超短波送電を受けた弐号機は歩き出した。受信用の大きな十字架を肩で背負い上げるようにして広告塔のように見える。

拘束されないライク口座がＡトライバル上で激しく変わりチリチリと光っていた。

轟音の響く第一ケージ、初号機の胸部を新パーツ（古いのだが）で締め上げる作業は手間取り終わらないうちに別の拘束装甲――衝角ノーズをなりになった無骨な頭部装甲が吊られて第一ケージに入ってきた。

回転灯が回り足下でクレーンの移動を知らせるアラームが鳴っているはずだが、騒音でまるで聞こえない。

「頭まで覆えるんですか？」

「えっ！　なに？」

怒鳴り合いの中で、トウジは自分の頭を安全ベルメットの上からガンガンとノックしてスチャーも加えてマヤに聞き直した。

「ヒカリも　覆えはるンですか？」

「えぇ、地下にあったこの拘束具は全体にサイズが大きいの――ありがたいことにね。すいぶん凶悪なボディを想定した感じ！　先――たちの恐怖の形なのかも　ホラ、目はんか無理矢理開けられるわ」

「…何やら悪趣味ですが――！」

ガクンと作業が止まった。

「もう少し右だ！」

どうやら作業クレーンがもう限界のようだ。ここで前に稼動範囲限界のように技術部が、続いて科学部も詰めかけ

「鈴原君も引いてエ！」

「アホウやなあ」

「既製品じゃない　品物の現場だ　モノよ！」

将来、そういう物を制作するとすれば、そうだと解るのだろうか。

――将来進路、先生は訊くとスイーツな話を始めるようになった。

だがトウジは声とロープを引も実感がない

将来の展望にはない、のせ

アスカはわずかに思案した。弐　ー向かう方向が、そもそも東　あたり、モノレールもある。

「コントロール、少し北側から回　車輌を改修した姿を見たとも

――前回は時間停滞フィアに　的で、進路上以外は無視した

「釣れる、そう思うのね」

発令所　コントロールポストはミサトが答えた。

「ヤー、ボス、送電停止、クリアランスだわ」

弐号機は谷々底のわきを抜けて全力疾走、旧三十八号線をまたぎ越し小塚山北方、キャリヤーから見て北西方面に至ると再びクラッチを開いた。

「ＥＶＡ弐号機、リフトオフ！」

「ＥＶＡ弐号機、リフトオフ！」

ＥＶＡ弐号機は跳ね飛ばされた。

「ぶっ！」

アイランドで見ていた発令所はさわめき、ミサトも思わず訊いた。

「ＥＶＡ弐号機、リフトオフ！」

ＥＶＡ弐号機は跳ね飛ばされた。

「ぶっ！」

アイランドで見ていた発令所はさわめき、ミサトも思わず訊いた。

ドンッ　度にぶつかったような感覚、大きな力で弐号機は跳ね飛ばされた。

「ぶっ！」

アイランドで見ていた発令所はさわめき、ミサトも思わず訊いた。

「何をやったの？」
解りきったようにアスカが答える。
「バリーシールドを飛ばしたんでしょ、こんな芸も出来るのね、それとも私とシンジがやったの見てたかな」
「あの時点からいたって言うの？」
「言ってみただけ」

第一デッキの騒音に青葉は驚いたが、そのままヤシトウォークを駆け抜けてきたらコントロールブースに入った。
彼が持ち帰ったデータ中、紙の部分をマヤは猛烈な速度でMAGIに読み込ませている。
どうしてっと思うトウジが思わず訊いた。
「その何とかミラーで囲めばそれでエンドちゃうんですか？」
「ただの鏡だって、狙った所に光を跳ね返したければ微妙な調整がいるでしょ」
「そらやまあ」
「これはルベリエのコアを永久凍結するため赤木博士が造った拘束装甲なの」
「そしたら、そのまま…」
残念がらって、と青葉がさえぎった。
「その使い方が出来たのは、この大騒ぎの前までだよ。もう外界と切り離してもすでに流れ込んでる力で砕ける、それくらい強い。でかいま見たばけたよ」
だからっとマヤはキーを叩き
「手段を変える、だから微妙な調整が肝心なの。恐らく乱雑無制限な流れを経ればこれ以上次元の窓を刺激しないようにする、そのあたりがやっとね。上手く行ったらその先は後で考えましょう」

地上は意外な前線戦になっていた。だがアスカのもくろみ通り、エンジェルキャノンは弐号機に向かって進路を変え距離を詰めてきている。
もう少し市街地と交通網から引き離したいアスカは敵のシールド攻撃をかわしつつ、時折短く発砲し、攻撃の意思をちらつかせながら、背後のカンデラ北部へ戦線の後退をしていた。
――が、
「このあたりで十分でしょ」
突然、相手が放つシールドを左右に跳ぶようにかわした弐号機はレクテナをたたむとエンジェルキャノンに向かって一気に加速する。

す。
「やっぱりあいつ、瞬間の未来予測には反応が遅れる――それなら――」
ムンスピードまで速度を上げると、前方、円錐に展開した自分のATフィールドの中に弐号機は頭から飛び込んだ。
シールドが反発し弐号機は低く走った地表をシールドでバリバリ吹き飛ばしながら莫大な運動エネルギーを保ったままキャノンに突っ込んだ。
エンジェルキャノンはシールドを張ってアスカの突撃進路をそらせた。

弐号機の円錐フィールドからキャノンのわきをうにそちらに向き直った弐号機はエンジェルキャノンの間合いの――と胸のマエに――赤く光っていたロンギヌスで貫いた。

わっと発令所が騒ぎマユの中の使徒の力リヤーの急所と同時に放しはめた。
「アスカうまい――子は」
「うるさいわね――

わざと言葉を遮ったアスカに――なにこのまま――
傷を握った弐号機の腕がのびの先へ入ってと引き込まれ

「な？」
感じた――その手応えどころか手応えとして感じる前に――れる。槍の穂先の侵入はATに届く前に切る長さなのには――
ドンッ
弐号機をキャリヤのバリアが叩き――を握った腕を強引に――その衝撃で破れた――の中に見えたのは――

が集中、あっという間に過充電になり、次の瞬間内蔵キャパシタの超伝導格子が崩壊した。
――弐号機の視界がホワイトアウト。
数テラワットの電磁爆発、送電線塔の鉄骨は誘導電流で融解しコンクリートは砂のように砕けた。地中の水分が一気に蒸発し、地面がゴッと盛りょがって弾けた。
アスカはパワードエイトを弐号機の右手に持ち替え構える。ゼロへ向かってカウントダウンし始めた内蔵電源タイマー越し、稲妻が走るキノコ雲の中からもうもうと湯気を上げるエンジェルキャリヤーが現れるのが見えた。
「ああ、そうでしょうね――…やンなっちゃうわ、まったく」
そのときアスカは音を聞いた。最初、高ぶる自分の心臓の音かと思った。
――ザーン――ザーン――ザーン――
遠い…どこから?
視線は正面のキャリヤーを見つめたまま、だがその音になぜかとらわれた。
「何の音 ?」

■次への課度

暖かな優しい世界の空
シンジと母が広げた。それ。が
風の中で揺れている
縁側に二 人並んで腰掛けそれを見ていた

すべてが終わったら――
母だと思えるその人は
シンジにそう話し始めた
――すべてが終わった日暮れ前にはまた
これをたたんで取り込まなくちゃならない――
なぜ?
――この力は大きすぎるの
でも広げたときと同じように一人じゃ無理
そのとき一緒にたたんでくれる人を
あなたは見つけないと――
母さんは?とシンジは問う
一緒にたたんではくれないの?
ここでの存在とうき替えだから――
白い世界に一瞬光が増 て
母のイメージがその光にかすんでいく
お別れよ

どうするんだ母さん
――行ってみたい所があるわ
そのあとは――』
気付いた――今までそこにあったもの
カタチとしてはないがたびたびシンジを
救ってくれたその存在が消えるのだと解った
シンジに全て託して――
緩慢な思考のままでシンジは泣いた
情けなく恥もなくただ泣いた

第二ケージの轟音が変化したよう聞こえた。
青葉はデッキから見下ろし最後の大声を出す。
「いいトコきてますよー 修正、東コンマ〇」
遠い…どこから?
視線は正面のキャリヤーを見つめたまま、だがその音になぜかとらわれた。
「何の音 ?」
――ドウ…シン――
境界を境に そ、ある場所は骨格となり、ある場所は筋肉となった。
かつて初めてシンジが初号機に乗って戦った際、ビルの窓に映った初号機ボディの顔、シンジがよく見ようとして瞳が生まれた。
エヴァのボディは万事がそうだ。
ヒトの構造に倣って人型なのではなく、その場でヒトの、人間の模倣をする。
血など流れてない無機物のくせに、切られれば血を吹き、有機物のように腐敗もする。量子テレポートで百メートルを超える巨大な全身くまなくとゼロ時間でつながり、まるで神経網があるように振る舞うことで二メートル弱のちさなヒト並み速度で反応する。
――ドウ…シン――
「干渉波って言うけど、これはまるで 」
そしていままた心臓など持たないくせに、S²機関跡が鼓動を打っている。
破滅と紙一重の再生の大河は、ヒトの力を借りて整流され、いま脈打って胸に納まった。
――ドウ ンー――
いまでも十分に恐ろしい音を立てている。
いま外界ではエンジェルキャリヤーが襲来し、弐号機が苦戦している、避難途上の市民も多く巻き込まれただろう。戦目の兵も――
だが皆なぜか高ぶって微笑み、笑いさえ漏れていた。たぶん理屈ではない、なぜなら。
――ドウ…シン――
それは原始的なリズム。
番最初に生まれたリズム。

「…いま、なんて?」
ハッとしてマヤはトウジに独り言を問う。
「え? ワシなにか言いました?」
天啓のよう聞こえたのだ。
彼女は慌てて内部を再スキャンするが、ノイズの奔流に叩かれていた走査アレイの解像度は半分以下に機能低下しはっきりしない。
「だっていま !」
――ドウ…シン――マヤはびくりとし、周囲のものがビリビリと揺れる。

修理よりはもうスクラップかもしれない、そのスキャナーが切れ切れに内部を写す。
新たに境界が走り新たな役割分担を始めた初号機の体内は落ち着いて上手く安定し始めていた。
――ドウ ンー――
境界を境に そ、ある場所は骨格となり、ある場所は筋肉となった。
かつて初めてシンジが初号機に乗って戦った際、ビルの窓に映った初号機ボディの顔、シンジがよく見ようとして瞳が生まれた。
エヴァのボディは万事がそうだ。
ヒトの構造に倣って人型なのではなく、その場でヒトの、人間の模倣をする。
血など流れてない無機物のくせに、切られれば血を吹き、有機物のように腐敗もする。量子テレポートで百メートルを超える巨大な全身くまなくとゼロ時間でつながり、まるで神経網があるように振る舞うことで二メートル弱のちさなヒト並み速度で反応する。
――ドウ…シン――
「干渉波って言うけど、これはまるで 」
そしていままた心臓など持たないくせに、S²機関跡が鼓動を打っている。
破滅と紙一重の再生の大河は、ヒトの力を借りて整流され、いま脈打って胸に納まった。
――ドウ ンー――
いまでも十分に恐ろしい音を立てている。
いま外界ではエンジェルキャリヤーが襲来し、弐号機が苦戦している、避難途上の市民も多く巻き込まれただろう。戦目の兵も――
だが皆なぜか高ぶって微笑み、笑いさえ漏れていた。たぶん理屈ではない、なぜなら。
――ドウ…シン――
それは原始的なリズム。
番最初に生まれたリズム。

――ドウ…シン――
間近で見る打ち上げ花火のような衝撃。トウジも鼓舞され極まって吼える。
「威勢ええやんけ うおお~~?」
――ドウ…シン――
鼓動に合わせて誰かが手にったI鼻で手すりを叩き始めると、あっという間に皆が続き、すぐ全体に広がった。技術部だけでなく科学部スタッフも加わり何かを鳴らす。
――ザーン――ザーン――ザーン――
アスカが聞いたこの音を、発令所でミサトも聞いた。
「何なの…?」
別棟で耐爆制震構造のこの場所に聞こえるはずはない音が遠く近く響く。

――ザーン――ザーン――ザーン――
まるで原始的な祭儀のような興奮の中、初号機の中に新たな器官、大きく強化された骨格と筋肉とともに果たして小さなヒト型が生まれつつあった。
レイトロウがつぶやく
「香りが変わる あの人が消えた 泣いているのは――碇君?」

■舞台へ

アスカが脱むパワードエイトの照準サイトの中、弐号機に正面から迫るエンジェルキャリヤーは立ち止まると、
「!」
白い巨人は、そのときならぬ音源を見た。
――ザーン

第二ケージの中、初号機はその視線を感じ取ると、地中から見通すようにそちらに顔を上げた。
「動いた !」
次に響いた音は、肩を固定していたガントリー壁のロック。初号機が体を揺すり、鋼鉄のラッチがきちぎれる音だった――壊れるほど劣化していなかった外部拘束機構が簡単にもがれ壊れた。
数トンの部品が小石のように宙を飛んで初号機が焼いていたコンクリート壁を直撃したとき、よう

やく人々は我に返った。
――バキバキと破壊音があふれ出す。
「みんなケージのみんな出ろー」
誰かが叫んで――全員わあっとなり出した。
「私たち　なにやってたの？」
「それは　後あと！」
赤面しているマヤを青葉が強引に引っ張っていく。
「シンジ！　お前が動かしとるんか？！」
トウジが振り返って問いかけた。
「いいから出るんだ　」

「マヤ――
ミサ
とき
ると
基地外縁部
旧
ぶ瞬間
紫の巨
り
「初号
こちらの
能
るこの鉄
うに大き
ムを

「シンジ？　というはシールドも力も強い、Aフィールドを張らないとやられるー」
その初号機は動物的な突進を繰り返す。
――暴走してるの？
拳をシールドに叩き付けた――無理なのに。
アスカがそう思った時、シールド境界面がバチバチと光って初号機の腕が通った――
キャリヤーの顔面をつかみ――そのまま握り潰す――どういうことだ？
初号機の拳や腕装甲のサーフェスが光り干渉縞が体に沿って次々にまった。
「なに？　体の周囲じゃなく、体の表にAフィー

き出した。
「こいつ……」
アスカが再度通じないと解っている攻撃に出ようとしたそのとき、地に着いた弐号機のすぐ近くで振動を捕らえた――どっち？　八幡山の向こう。
突然その影が山を飛び越えて現れた。大きな跳躍のままどんどん大きくなる。
――ダーン！
地表を容赦なく吹き飛ばし着地する。
「初号機？　シンジなの？」
答えはない。新装甲らしき初号機は、その見た目

キャリヤーは頭を潰されたくらいではびくともせず、妖状武器を振るう、それをかわして初号機の巨体が軽々と跳ね上がる、踊られた地面の方は巨大な水柱のように爆散し、逃げもならないエネルギーが加えられたと感じる。
――本当にこれ子供なの…？
上から飛びかかられたキャリヤーのシールドは耐えたが、シールドごと本体も倒され、地面でワンバウンド、その衝撃は凄まじく、次に初号機がシールドの上から踏みつけたときには、先の衝撃で地面は液状化しており、キャリヤーは半分以上地に埋もれた。

「あ」

アスカはそのとき、エルキャリヤーの中、黒い紋章の形状、エヴァのようなモノが赤く発光、左右の肩にひとつずつ……。

――あの肩の赤黒いプレシンプルな紋章のような……

れている赤い光にアスカは見覚えがあった。

以前見たのはジオフロント、最初に倒したエンエルキャリヤー　サキエルが入っていたマユの奥――

「！」

彼女は思い立ち、弐号機は起き上がる。

次に初号機がキャリヤーに飛びかかった瞬間を狙って左から　右手には杖状武器を持っている――反対側から回り込んだ。

内蔵電源はあとわずかだ。

そのときはすぐに訪れた。正面から初号機に飛びかかられたキャリヤーは、杖状武器にシールドを

キャリヤーはシールドが

左から右へと振り払ったのだ。

重も実幻」

ガラ空きになった左肩、肉のプレートのがけアスカはパレットライフル

叩き込む。

――コオンッ！　残っていたのは六発だったが、レールガンならではのリロードゼロタイムの三点加重射撃、音速を弾丸が突き込むと――やはり初号機の方に集中してるーープレートは赤い結晶体になって砕けた。

初号機は四つん這いになって杖をやり過ごし、キャリヤーは振り抜いた杖をそのまま右から回し、弐号機に向かって投げつけた。

腹部にまともに食らいアスカは吹っ飛ぶ。歪む視界の中で初号機は低い姿勢のままキャリヤーを蹴り崩し――何て強い。

撃たキャリヤーの足を折った。

彼女は激痛のフィードバックの中で叫んだ。

「シンジ　仕留めて！」

視界が開けた。彼はハッと跳ね起きる。

閉じられていたヘッドバイザーが展開し、初号機の瞳が見開く――

――鮮やかで、そして醜悪な現実が目の前いっぱいの情報量でシンジの思考を駆け上がってくる。

戦況を理解する前に、戦術だけが動いた。キャリヤーの肩に残った赤黒い

「そのプレート」

ネルフ、ＰＮの情報通信システムで繋がるそのヒトがシンジのその言を聞いた。

撃たキャリヤーの足を折った。

彼女は激痛のフィードバックの中で叫んだ。

「シンジ　仕留めて！」

視界が開けた。彼はハッと跳ね起きる。

閉じられていたヘッドバイザーが展開し、初号機の瞳が見開く――

――鮮やかで、そして醜悪な現実が目の前いっぱいの情報量でシンジの思考を駆け上がってくる。

戦況を理解する前に、戦術だけが動いた。キャリヤーの肩に残った赤黒い

「そのプレート」

ネルフ、ＰＮの情報通信システムで繋がるそのヒトがシンジのその言を聞いた。

重い新装甲の巨体が激しく転がり、その体の向こうから繰り出された右腕が、言葉をついて残っていたプレートをシールドもろとも圧倒的な力でもぎ取った。

砕けた赤い結晶が血のように飛び散る。

それが地面に落ちる前に幻のように消えた時、エンジェルキャリヤーはあやつり糸が切れたように崩れ、地に伏したときにはもう白い巨体は三年前と同じ屍体だった。

初号機の足元で急速に風化、崩れていく。

初号機は見回し

内蔵電源を使い果たして膝をつく弐号機が、どういうワケか少し小さく見えた。

「……アスカ、どうなってるの？」

「そっくり返すわ、その言葉」

〈続く〉

POSTSCRIPT BY IKUTO YAMASHITA

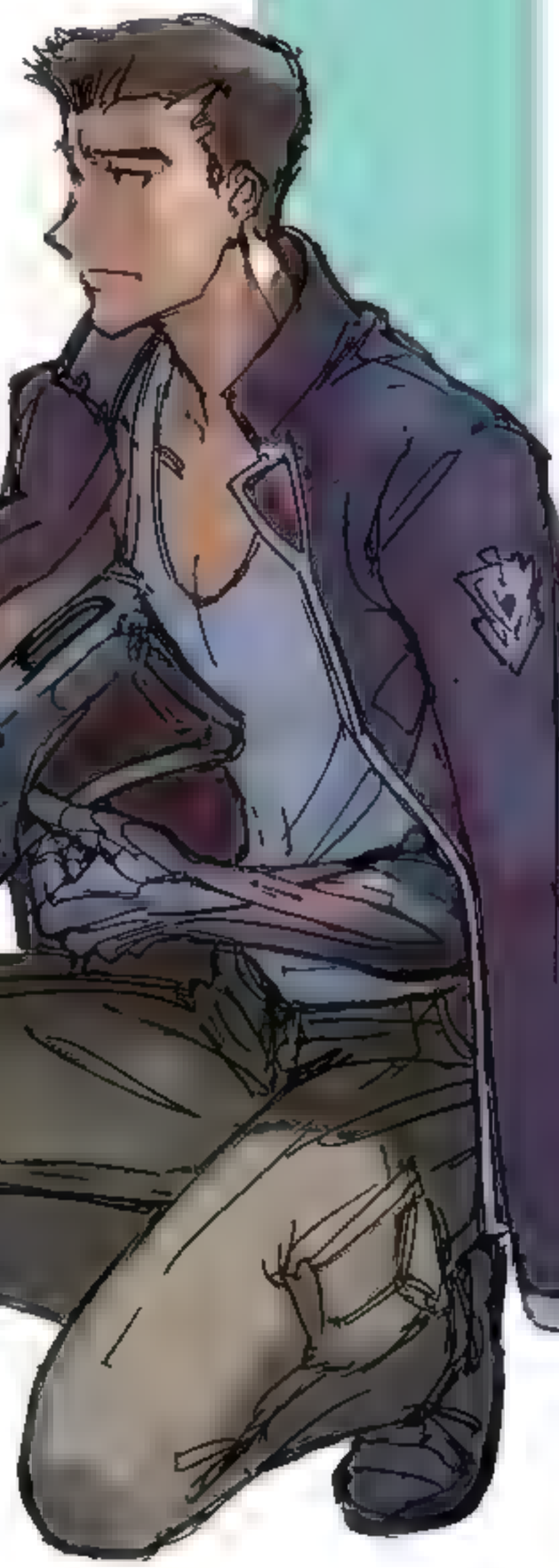
そんな場面に出くわしたら彼は、あの娘はどう言う？ どう行動する？
——それぞれの魂の名において
ANIMAはそんな問いかけでもあります。

昔、それこそ昔、エヴァのTV版の企画中、シンジ君の性格があまで、ゲンドウさんの性格がこう、エヴァに乗る理由が～作りにくい～となりまして、じゃあ、部署が違うだけでリツコさんとまだ同じ様なイメージだったミサトさんを、外部から最近このプロジェクトに加わった、大人なんだけどスタンスが違う、今の状況がシンジに近い人物にしたらどうかと言ってみました。それが彼女ののちの姿まで繋がるわけですが、提案した時監督からこう言われました。
「女シンジになっちゃわないかな・」
言われたときはピンと来ませんでしたが、でも彼女、行動的という設定で転がりだしたボールなので、謎には自分で辿り着こうとするし信念貫くし感情豊かだし、ロボット乗ってないだけで主人公ですよ…逆に今ANIMAでシンジ君を考えずに活躍させると男ミサトさんになってしまう危険があるなあと、最近になって占いことに肩叩かれた気分です。

■頼れる仕事が出来るアスカ嬢もしばらくするとS²機関ではなくヒトの技術N²リアクターで無限航続に近いエヴァ、エヴァ2アレゴッカを得ます。ただそこからがハードワークの連続 孤立無援の月面強行偵察などろくなモンじゃありません。ちゃんと有給使ってくださいね。
でも何だか彼女には徹底的に出来る女を目指して欲しい。

——槍は空を巡るリングとなり
その日も高度二万kmから地球を絞め殺す
迫る数々の敵は終末を予告する——

■トウジは便利なキャラです。彼に頑張ってもらう気は当初なかったのですが、協調性破綻者が多いエヴァの世界で、どこに混じっても、いい意味で自分の色を変えずにやって行けそうに思える人物。
——これは貴重。
　加持さんは？　彼まで行っちゃうと今度は逆にスタイルを崩しにくかったりします。



EVANGELION ANIMA

■綾波嬢が複数形になったのと、よくこんがらかる名前は担当さんの入れ知恵から始まりました。色違いでフィギュア作れば模型作例楽じゃね？てな所でしょうが、そうは問屋が卸しません。
　彼女は散らばってしまった自分の感情に現実世界で出くわす苦行待ちです。

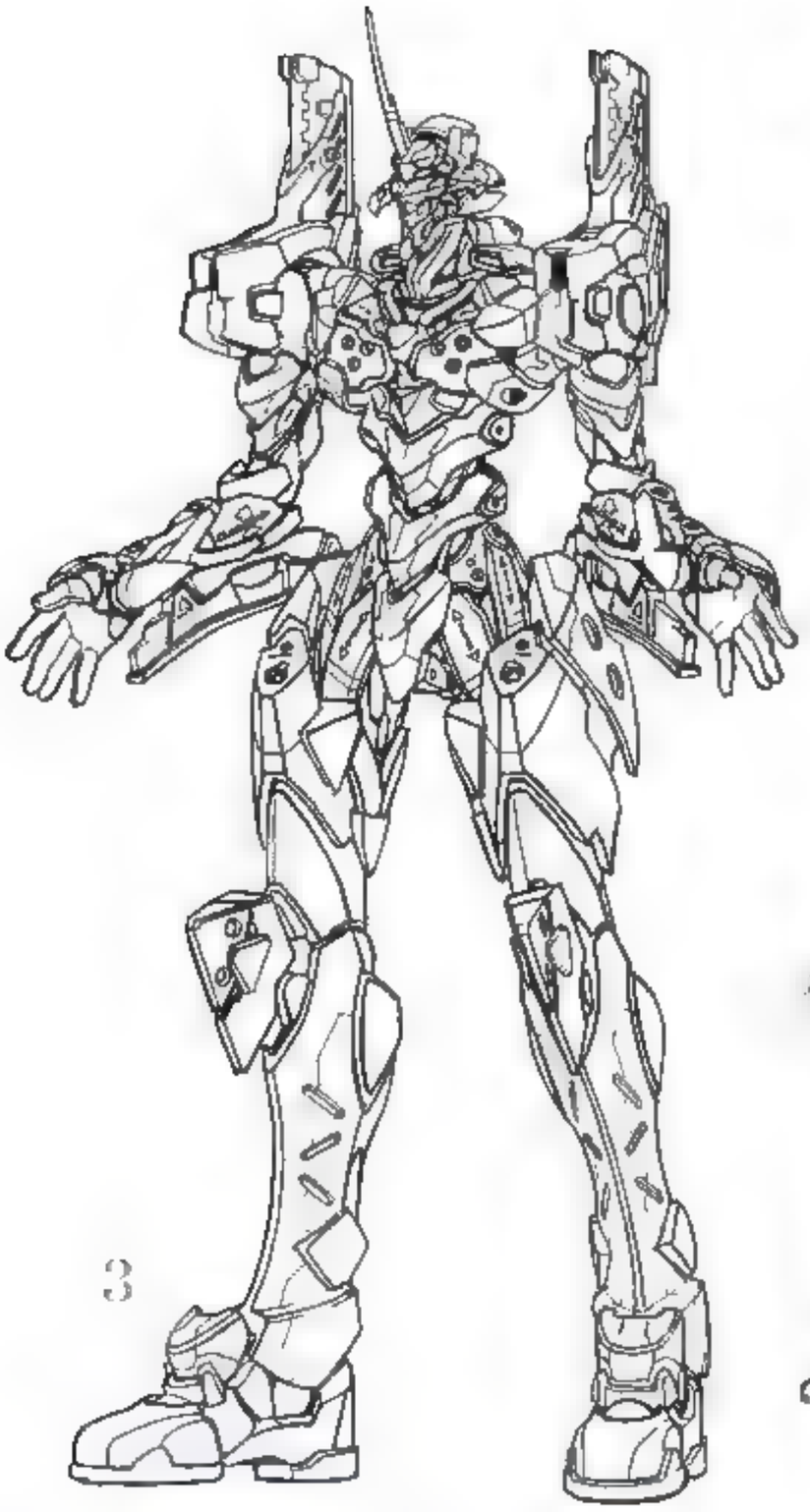
　むすめさんがたは、単純な興味として3年経つとどのくらい綺麗になってるかな～ッてお楽しみがございます。
　でも3年を、ただ変化を期待したい時間ではなく、彼ら彼女らは変化せざるをえなかった、そんな風に描いていこうかなと。
　きれいどころはうたたね先生と岡宮先生合作の扉イラストでどうぞ～。

ANIMAはまだまだこれからですorz
——いやいやいや、かんばるぞっと

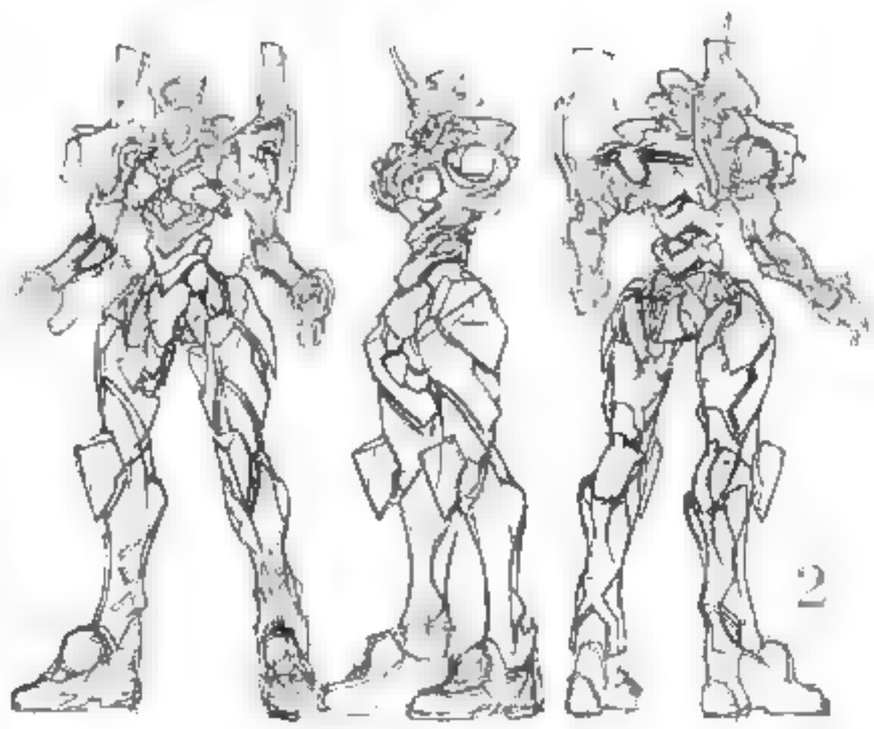
Material before the illustration completion：Mechanism

[山下いくと]

ここで紹介するラフ等は連載前の準備中に描かれたものが大半である。この時点でアニマの全体イメージは決まっていて、連載開始後はボツ稿など非常に少なくなっていった。イラスト類も下書きと完成稿の間で大きくデザインが変わることはほぼない。

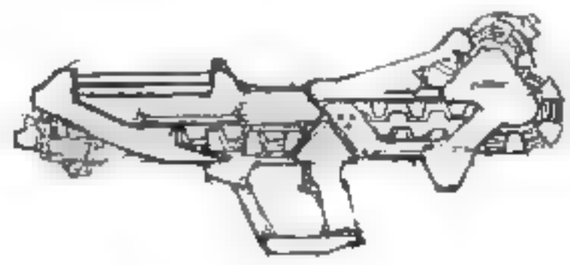


3

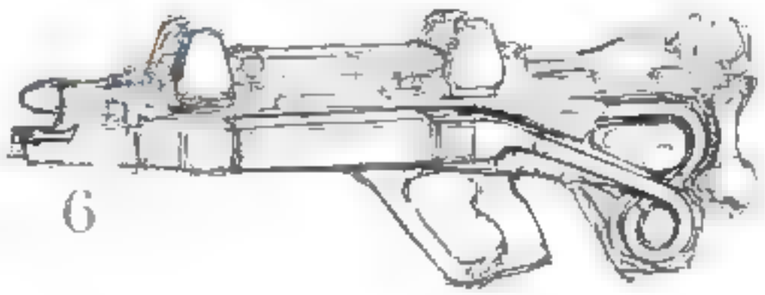


2

1



5



6

エヴァ
ネクストクラス
タービュランス

1

①もっとも最初期に描かれたスーパーエヴァンゲリオン。頭部はTV版に近い形状だが、全体のラインはこの段階ですでに定まっているのがわかる。レールシステムはすでに描かれている。

②第　稿。腰のアーマーなど細部の構成が決まり始める。股間のオビ状筋肉などポイントになる部分が形となってきている。

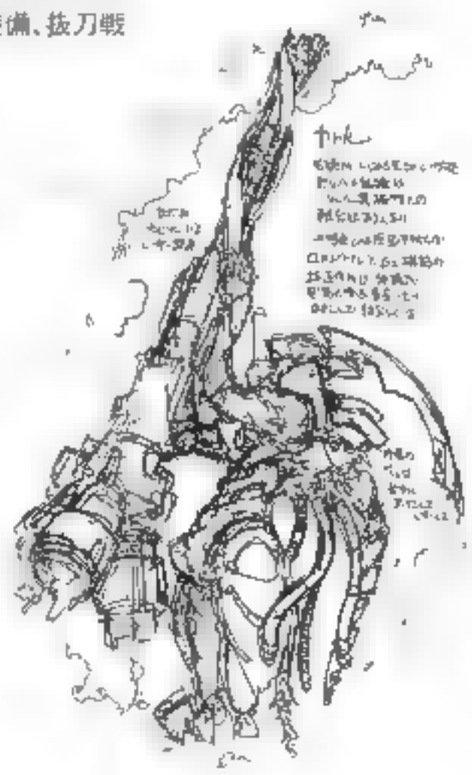
③第二稿。一度クリンナップに入る。掲載時はステージ3仕様エヴァ初号機として掲載された。決定稿の直前であるが、このあと大幅なディテールの練り直しがおこなわれている。

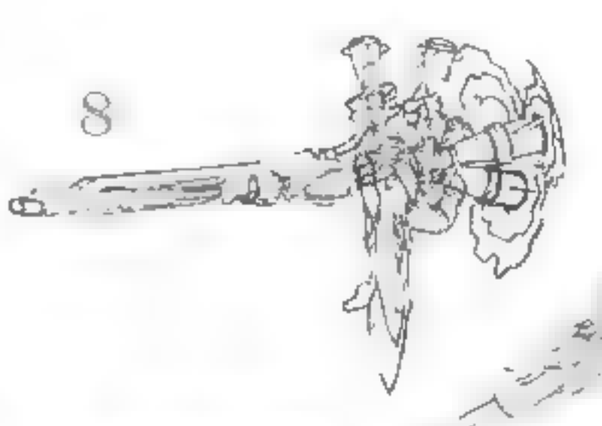
④スーパーエヴァンゲリオン空戦装備準備稿。この段階ではターピュランス装備と呼ばれている。巨大な羽型であり、決定稿のヴォルテックスとはまったく別物と言ってよい。文字設定のみだが、これ以外に砲戦装備、抜刀戦装備なども検討されていた。

⑤⑥パレットライフル新型。パレットライフルの大元のデザインはきお誠兄のアイディアを基にしてある。八の字型の帯磁レールを残し再構成、最終的にスーパーエヴァのレールシステムと組み合わせ、パワードエイトにつながっていく。

⑦⑧00エヴァラフ。軌道上の衛星形態の第　稿。天使の羽型の追撃プレートと十字架型の下半身アタッチメントを有する。宗教的なイメ　ジが強かった。第二稿でバランスの調整が行われ、決定稿となる。

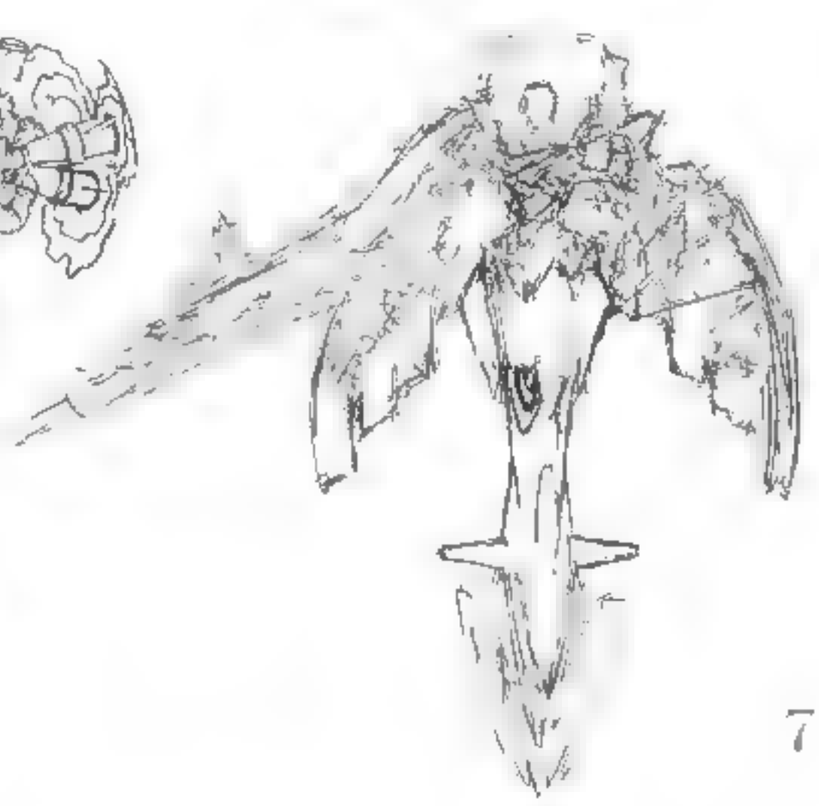
⑨00エヴァカトル機のラフ。このラフでイメージが決まり、いきなり決定稿に。





8

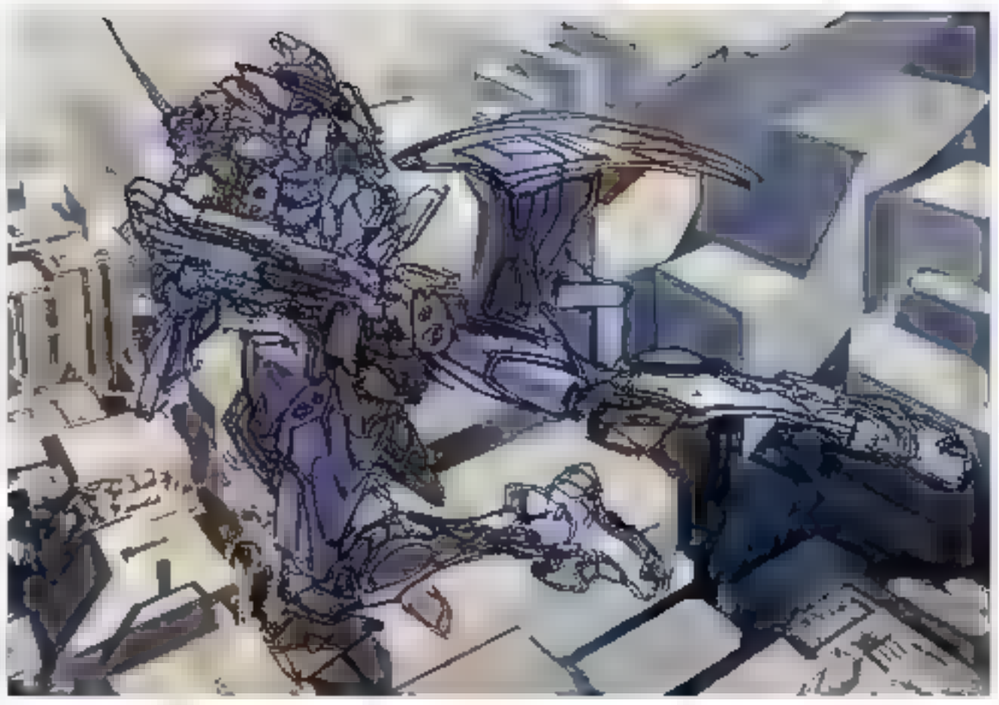
9



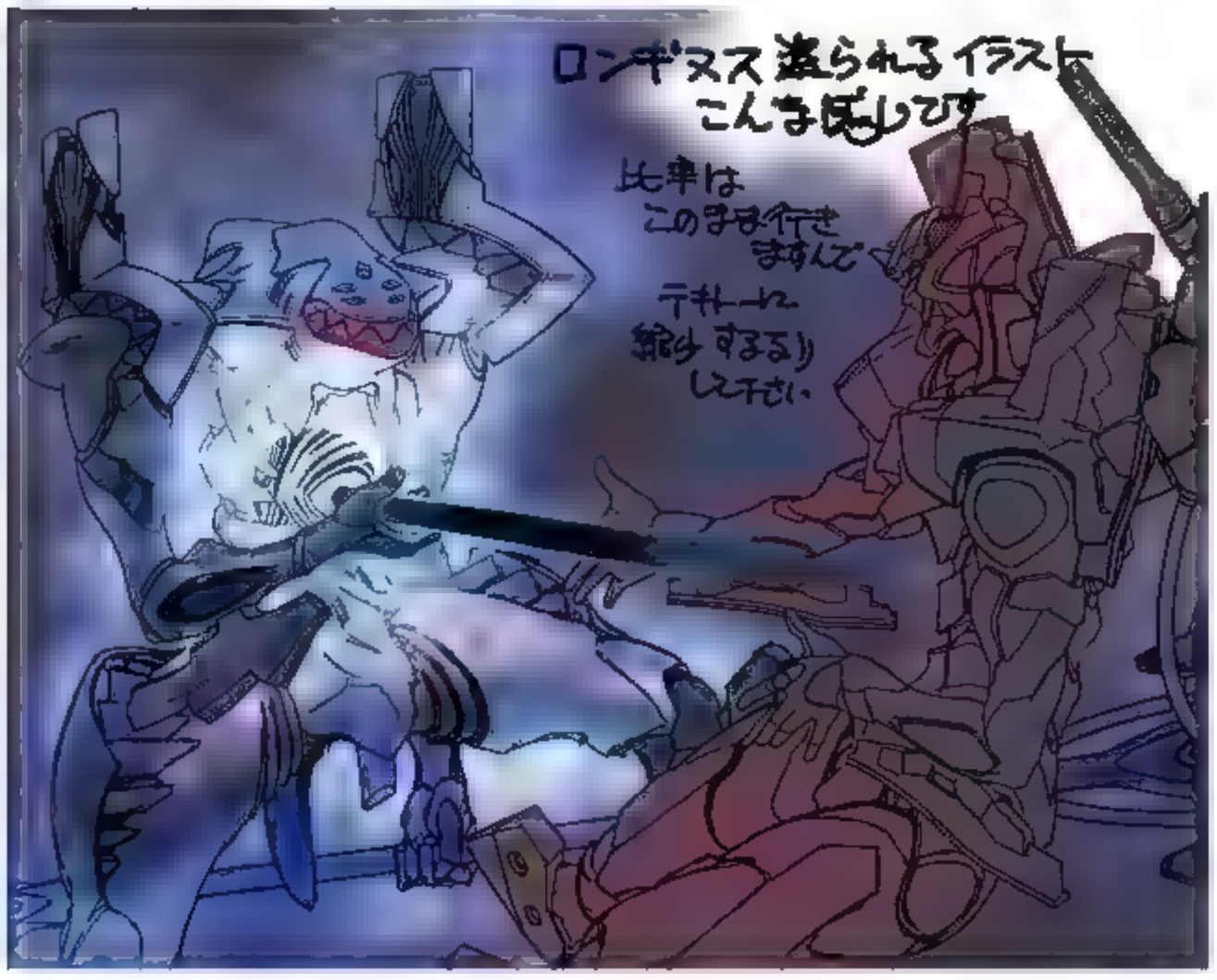
7

⑩ヴォルテックス装備イラスト途中稿。実際に掲載された原稿では背景は空となっている。メカディテールがわかりにくくなるので単純なものに背景を変えたのだが。ここまで仕上げた労力を考えると…締め切りがたいへん。
⑪装甲を換装中の初号機ラフ稿。完成稿だと暗くてわかりにくいが、F型装甲を排除して新型の装甲拘束具に切り替わりつつある様子がわかる。

11



10



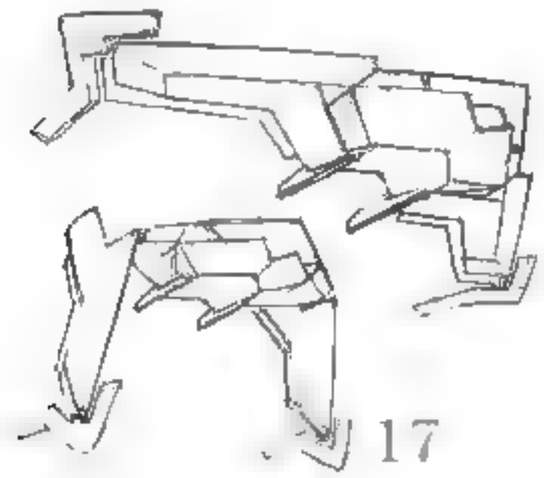
13

⑫エンジェルキャリヤー。第一稿だがほとんど決定稿と変わらない。この段階だとベースに量産機が存在していることがよくわかる。
⑬ページレイアウト用のイメージラフ。デザインや記事のイメージ決定用に、先行して描かれたアタリ取り用のカットラフ。エンジェルキャリヤーがとってもかわいい。
⑭アレゴリカのフル装備イラストラフ。完成稿では下半身の形状がわかりにくくなるため、腰部ラックのN²ペネトレーター爆弾は割愛された。本当はここまで複雑な形態だった。
⑮月面のアレゴリカイラストラフ。完成稿ではレゴラスをはね飛ばしながらスライディングしているより躍動的なポージングに変更になった。
⑯戦自の機動兵器。分離合体型のJ.A。2機のステルス機が合体して雷電風の四足歩行戦車に変形する。
⑰ゼーレ残存勢力の偵察メカ。無人ステルス機に使徒の神経系統を移植したもの。エンジェルキャリヤーにコンセプトが引き継がれた。

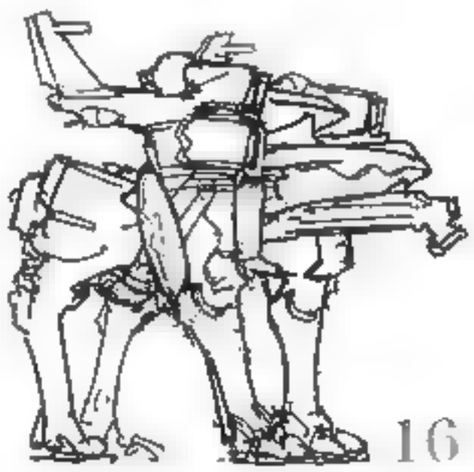
12

11

15



17

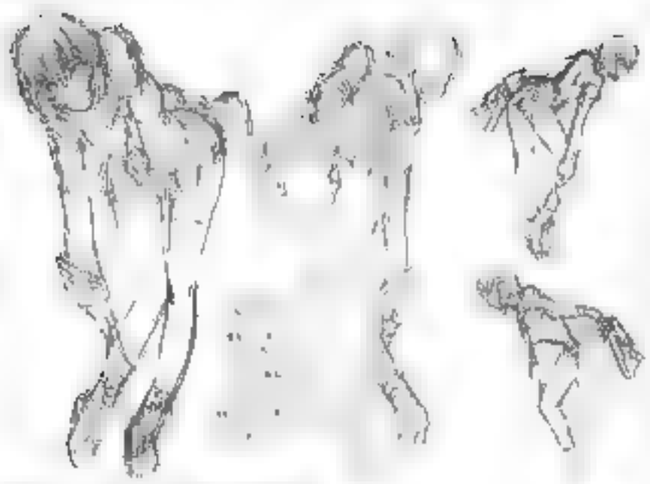


16

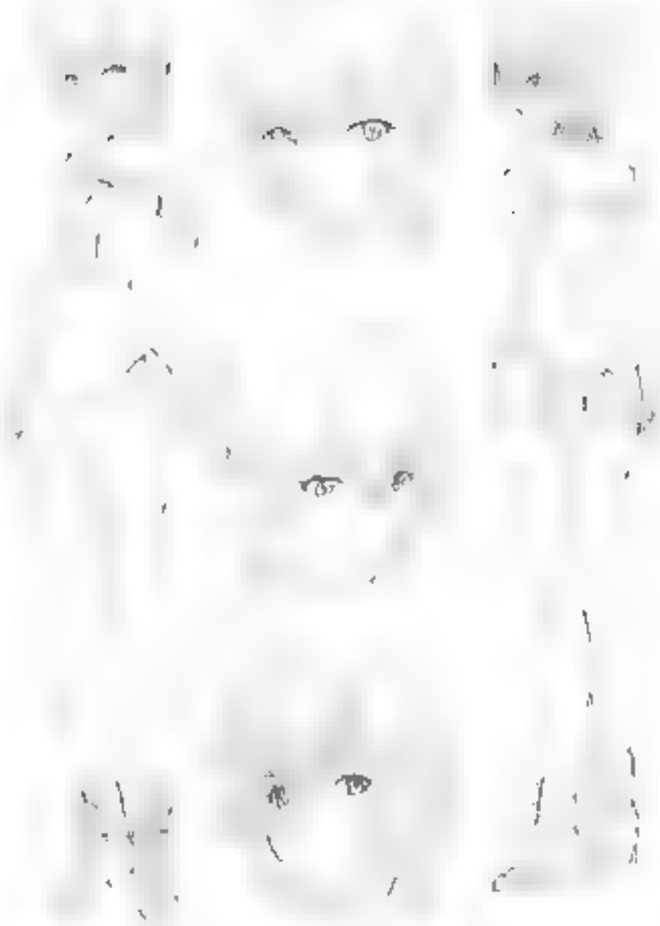
Material before the illustration completion：Character

[うたたねひろゆき]

うたたねひろゆき氏による、連載扉イラスト用の検討資料だ。単なるイラストワークではなく、キャラクターの細部を作り込み、最終的に破綻のないポージングへと近づけていく行程がわかるだろうか？　また、1枚のイラストにも数種のポーズ案を検討、綾波レイの構図検討稿など各方向からの参照稿も用意し、完成形まで煮詰めている。うたたねひろゆき氏の並々ならぬキャラクター作成へのこだわりが伝わってくる。

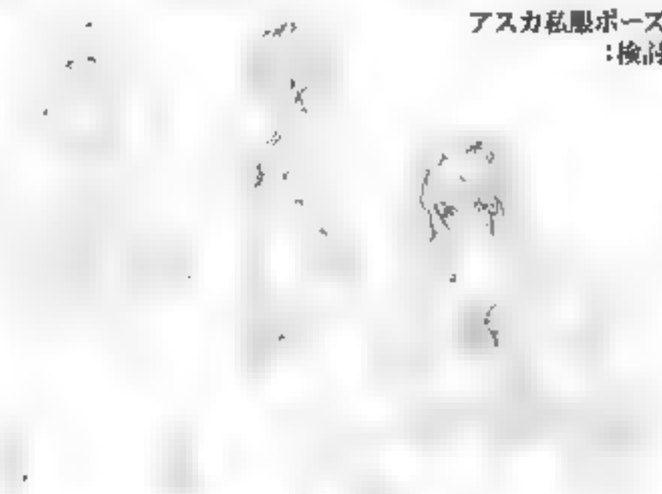


綾波レイポーズ設定：検討稿



綾波レイ設定・決定稿

アスカ私服設定：決定稿

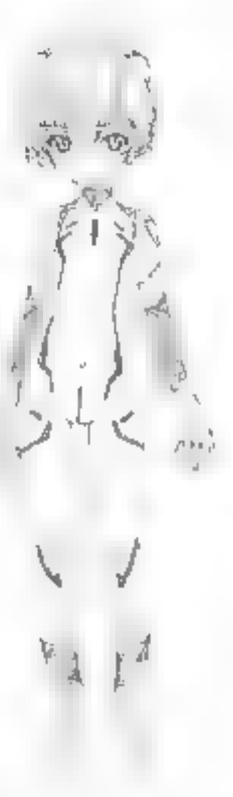


アスカ私服ポーズ案
：検討稿

アスカ・ラングレー設定：決定稿

綾波レイ・No.シス
惣城ミサトポーズ案
：検討稿

綾波レイ・No.カトル：下書き



綾波レイ・No.シス：決定稿

補完計画発動せず

色々な番狂わせがあった。

人の集合世界の終焉となるはずの局面、ジオフロントは空に向かって口をあけ、そのとき量産型エヴァの輪舞の中心に居たのはエヴァ弐号機であった。

ロンギヌスの槍に刺し貫かれたエヴァ弐号機を頂点に空中に描かれた生命の樹は崩れ、シンジは結果、人類補完計画の成立を壊してしまい、そこからANIMAは始まる。

すべての量産機の撃退に成功し、隔てなきヒトの世界を創造するゼーレの望みは断たれ、シンジたちは自分のスタッフも飲み込み、行動にプラスマイナス両面で理由を与えれくれる人々を失った。

加えて復元の阻止とS²機関を取り出すために量産型エヴァ二機はNERVで即時解体が始められたが、それ以外の量産型エヴァの屍骸は、損壊し低下した基地の実働キャパシティーと危険分散のために他国NERV施設に解体委託で送り出されたが、それらは次々と姿を消す。

懸念を多く残したまま、これからは自分たちでやっていくしかなく、司令部で球体に呑まれずに済んだミサトらを中心にNERVは再建されてゆく。

消えた量産機、そして実像としてのゼーレは存在も消滅も確認には至らず、シンジたちは備えを解くわけには行かなかった。

各国NERV施設との連携は量産機消失事件で微妙になり、日本のNERV本部はゼーレの蠢動に即応できるように、歯獲S²機関で無制限の作戦時間を与え強力なガンマ線レーザー砲を携えた宇宙型零号機O・Oエヴァ二機を軌道周回させる。

量産機復活の誤情報などあって、この全地球監視狙撃網の完成に各国の承認を得なかったことが後々尾を引く。

やがて所在国日本も含めて世界はNERVこそを脅威とみなすようになった。それでも脅威の消失が定かでない以上ミサトたちは、結果として武力を背景にした駆け引きで権限を拡大し続け、ついには他国の支部を切り離し名をNERV・JPNと改める。

悪夢の再来

そして三年、シンジ、レイ、アスカたちは高校生になっていた。

いよいよゼーレの再襲来もネルフJPNの誇張論に過ぎないと人々が感じ、シンジたちも思い始めていたときに事件は起こる。

軌道上のO・Oエヴァ一機が、撃墜されたとおぼしき墜落をはじめたのだ。落下予測地点でシンジがエヴァ初号機でATフィールドを展開、莫大な運動エネルギーを消散させるに成功するも、受け止めたOOエヴァは異常に変容した姿で熱と蒸気の中から現れ初号機に襲い掛かった。

二機のOOエヴァにはレイのクローン体三人、サンク、カトル、シスがそれぞれごく部の知覚のみ覚醒させた休眠状態で乗り込んでいる。

現状オリジナルのレイ、トロワがプライマリーとなり、精神ミラーリンクで他の二人の綾波と三つの思考を共有している。

いま初号機に襲い掛かってきたのはカトル機で、他の姉妹たちと精神リンクが断たれ、彼女には孤独と混乱という形で自我が生まれた。加えて自分を撃墜したであろう存在の巨大な思考と力が、彼女の中に流れ込んでO・OエヴァとOOエヴァを変容させ、生まれたばかりの彼女の意思とは関係なくこの先カトルとO・OエヴァはOOエヴァ カトル機はいま狂乱の異象と化していた。

見討らったように恐れていた脅威、かつての行方が解らなくなっていた量産型エヴァが、まったく存在を感知されないまま現れる。

むき出しの肋骨でマユを抱えたような形になって現れた量産機に、初号機はカトル機との格闘のままやむを得ず接近を許してしまうと、マユを破ってかつて倒した使徒～サキエルの腕が飛び出し初号機を襲う。

その瞬間だけセンサーはかつてのパターン青をとらえた。この量産機の屍骸は使徒を乗せて動いている、そしてATフィールドでないシールド能力があり、攻撃をさえぎるとと

まっていた。

――シンジは夢の中で母に声を掛けられる。手伝いなさい、二人なら出来るかもねと彼女は言う――大きなシーツを干す要領だと…。シンジはぼんやりしつつワケがわからないが、こちら側は私が持っているから、そちらをもって広げろと母に言われてそうするイメージ。

現実世界では初号機のS²機関はどんどん形を変え始め、あらゆるサイクルの波があふれ出、飽和する中で初号機は修復成長しはじめた。

その現実世界に使徒のマユを抱いた死せる量産機、二機目のエンジェルキャリヤーがネルフ本部に襲来する。

綾波たちは、反逆したカトルと不規則に回復する精神ミラーリンクから流れ込む敵性存在の情報のため、プライマリーのトロワを含めた全ナンバーズが疑われ行動が規制されるなか、弐号機単騎で出撃するアスカ。

手にしたロンギヌスの槍で量産機を使徒の潜んだマユごと突いて、すべて解決しようという作戦は裏目に出てしまう。

マユの中に居たのはノリエル、その体内の虚数空間にロンギヌスの槍を飲み込むとノリエルはキャリヤーを残して姿を消す。ロンギヌスの槍は人類が現有した最大の攻撃力だが、それを奪われてしまう。

他のあらゆる武器に対してエンジェルキャリヤーは無敵だった。

――そのころ他の宇宙につながる窓を開くとユイはシンジに別れを告げその向こうに消え、シンジはエヴァの中から母が消えることで自分がエヴァと同 になってしまったことを自覚する。

溢れる波動は人の技術によってどうにかか制御され「鼓動」と呼べるものに落ち着いた。

新初号機誕生に居合わせた人々は、魂を鼓舞するような鳴動の中で、それが次世代用になるはずの試作拘束具と新型装甲で覆っても、覆っても、とても隠しおおせない力に満ち満ちていることだけは肌で感じられた。

すべてを理解するには長い時間が必要だろう。

エンジェルキャリヤーの存在を感じた初号機は本能のまま施設を破壊し世界に躍り出ると、いくつもの物理法則をまげて、シールドもろともキャリヤーを一撃で粉砕、エヴァの中で新たなシンジの体が紡ぎ出され、彼は覚醒する。

「心臓」を得たことで地球上最大のヒトとなったエヴァ初号機に、ミサトは、皆がうんざりする名前「スーパーエヴァンゲリオン」を与えた。

初号機はスーパーになり存在としてのシンジはこの世に戻ったが、エヴァを補完していたユイは去り、それはシンジの仕事になった。彼とエヴァの関係は二人で つというややこしい有様で、シンジが動くと初号機も動いて施設を壊した。

彼は精神波ミラーリンクで複数の自分とつながる綾波に助言を求める。だが、カトルの逸脱で残された綾波たちの相互リンクは崩れつつあり、空の器の中に生まれるはずのない自我がそれぞれ育ちつつあった。また、初号機の中から母親のイメージが消えたことを伝え聞いたアスカは、自分の弐号機に対する「ただ使役する道具」というイメージを、以降あらためていく。

遠きより呼ばわるものあり

スーパーエヴァの鼓動をかき消すように、全地球に響き渡る「音」で人類は月を見上げる。月に突き刺さっていたオリジナルロンギヌスの槍をその黒い巨人は抜き取り、槍尻で

月面を突いていた。

伝わるはずのない空間を距離を時間を越えて、突きとげるような衝撃をすべての人が感じた。カトルを経由して他の綾波にも何かが伝わり彼女らの口を介して言葉になった。

「その鼓動は聞こえてはならない」

ようやくシンジたちは敵の姿を見た。

黒いエヴァのような巨人、呼称名アルマロス。人類補完計画は人に科せられた原罪であり失敗を演じた現世界は次の補完計画のために大洪水でリセットされると言うのだ。

おおよそ伝わったそれら破滅の宣告の後、アルマロスは地球に向かってロンギヌスの槍を投げた。槍のらせんがほどけて二本の光る線になったロンギヌスは地球の周りを周回し始めると、あり得ないことに、その軌道が地球をしめつけはじめた。

黙示録的展開は続き、軌道上のO・Oエヴァ・シス機が槍を迎撃すると、レーザーがインパクトした瞬間、槍は極彩色の閃光を放ち、その軌道の下、アフリカ北部からヨーロッパ、ロシアに掛けて屋外でその光を浴びた百六十万人が瞬間に塩の柱となって砕けた。

人類にはそのメカニズムが不明なまま、地球の直径が縮みつつあった。

わずかな重力変動でも衛星は軌道を逸脱し始め、衛星による観測、測位、通信は成り立たなくなりつつある

軌道を離れた衛星はロンギヌスの槍が周回する軌道半径に達すると、見えない壁に突き当たるように砕けた。

マントルに浮かぶ地殻プレート群はマントルの収縮で異常な速さで重なりを強め、各地で海面が上昇しつつあり、以降世界各地で地震が頻発した。

夢の中でカヲルはシンジに語る。

エヴァ初号機は心臓を持つことでこの世で一番大きな存在の人となってしまった。鼓動は自己の存在を示すシグナルであり、強い存在の力は時間に強く定着する、彼らにもそれをうち剥がすのは難しい——

シンジは思う、だから災厄は徐々に来る、不安で世界を満たして個々人の自己の存在を揺さぶろうとしている。

ると、コピーロンギヌスが奪われたのも計画的であると推測された。

予想できない未来に世界が震えはじめたその日、シンジは別の人物をオリジナルのノイトロワの姿と見間違えてた。基地内の立ち入り禁止地区に入る姿を呼び止めにシンジが近寄った彼女は、レイ・カトル。彼女に導

「なぜ二年前補完計画を破綻させたのか」と。

なるほど、とシンジは思う。確かにあのとき補完計画が完遂されていればこの現状にはなっていないだろう。

「あなたの心臓が止まれば、また補完計画が始まる」

湖面から出現するO・Oエヴァ・カトル機、そしてシンジも、もう一つの自分の体を意識し

データはいくらか整理されエンジェルキャレヤーのパワー転送システムと思われる体表オブジェクトは、アルマロスの表面に点在するプレート、QRシグナムであると判明す

かれると異常なことに次々別の風景に場所が移り、最後一人は湖岸にいた。

以前よりは落ち着いている彼女だったが、アルマロスが彼女に伝えた言葉から、現状の元凶はシンジにあると結論してシンジに問う

呼び、スーパーエヴァはそれに応えた。

エヴァ同士の戦いの中でシンジはO・Oエヴァの胸の装甲の隙間にもしやと予想していたもの～アルマロスのプレート～QRシグナムを見出す。

シンジだったが、気持ちの上でレイ・カトルを倒すことが出来ず、0・0エヴァの逃亡を許してしまう。

国連機関であるネルフJPNは国連の決定には従わざるを得ず、月面に出現、そのまま姿を消した黒のアルマロスの探査を、アスカの弐号機とバックアップに0・0エヴァ・サンク機の二機のエヴァが下命を受ける事になり、アスカは宇宙軌道訓練をはじめ、弐号機は巨大な翼にN²リアクター二基と重力場浮揚ユニット、ペイロードと馬のような後脚を持つ、有翼四脚のエヴァ2アレゴリカに換装されていく。この無限航続ユニットの調整と同時に、地球と目的の月の間に立ちはだかるロンギヌスの槍と、その周回が作り出すロンギヌス境界面の突破方法もプランが練られた。

そんな中で、個々の存在の力が時間への定着を強くするなら～と言うミサトの発想で、つかのま学生に戻ったシンジ、アスカ、そしてトウジと複数の綾波達。ことに個々の人格を持たなかった綾波サンクとシスの個性はどんどん花開いていて、逆に本来綾波達を単一人格で制御していたトロワは無個性のままで、変化していく他の自分に戸惑っていたが、それを表現するすべも知らず、誰もトロワの戸惑いに気付かず時間は過ぎていく。出発のときはすぐに押し迫り、それらを思い出に換えるとアスカはエヴァ2アレゴリカの翼を広げて宇宙へと離陸する。一足早く従来型の反動推進で軌道に上がった0・0エヴァ・サンク機と合流、周回を重ねて、まずはロンギヌス境界面へ向かった。

ロンギヌス境界面は一種のATフィールドのようなものを推測されていた。使徒との接触時と同じくATフィールド同士の接触から融合なり切開なりに持ち込むのだ。

ロンギヌス境界面は接触してみると物理的抵抗を感じる見えない壁で、その場で視線を巡らせると周囲に淡い虹色が見えて境界面はかすかに視認できた。アスカは直ちに境界面の突破に掛かる。そこに地球側が急報を告げる。境界面の内側を滑るように周回しているロンギヌスの槍が突然向きを変え、アスカ達に迫る！　スに進路を変えたのだ。

エヴァ2アンゴリカと0・0エヴァ・サンク機の二機は、境界面接触後、今度は境界面から離れられなくなっていた。このままではまもなく降ってくるロンギヌスの槍に挽き潰されてしまう。綾波サンクは0・0エヴァのS²機関のパワーで境界面を突破することを提案し、検証の間もないままアスカはそれを受け入れる。

彼方にこちらへ突進してくるロンギヌスの槍の光の弧が見えた時、綾波サンクは0・0エヴァの外装型S²機関をオーバーロード状態で解放、ロンギヌス境界面に一瞬の穴を開けると、0・0エヴァが暴走パワーに飲まれる直前にエヴァ2アレゴリカを境界面の外に押し出した。振り返ったアスカが見たのは、閉じていく境界面の穴の向こうでロンギヌスの槍の光に飲まれて消える0・0エヴァで、アスカは、サンクがアスカ二人を通過させるために初めてのウソをついたことを知る。ロンギヌス境界面を越えて見る月は、異常に大きく見えた。

地球からの観測では、0・0エヴァだけでなくアスカのエヴァ2アレゴリカもロンギヌスの槍の光に飲まれて消滅した。シンジは激しく動揺し、彼の動揺はそのままスーパーエヴァの動揺となり施設を揺るがす。精神ミラーリンクでサンクと繋がっていたトロワは、サンクから流れ込んだ記憶で、アスカはどうにか境界面を越えたことを告げたが、サンクの死、すなわち己の死のイメージを強くぶつけられて精神バランスを崩してしまう。

白い弐号機

シンジとSエヴァの動揺は収まらず、トウジは緊急避難措置でシンジを乗せたSエヴァを北海道～震災で荒れ果てた地へ弾道投射した。いまこの場所には国連軍、UNT第3旅団が演習のために駐留、その後の震災による災害派遣の前線として居座り続けていた。

スーパーエヴァの鼓動を求めてエンジェルキャノンヤーが現れ、シンジは怒りのままにナイフ　本でこれを撃退するが、キャノンヤーに

ゼーレの復活

加持リョウジと相田ケンスケは、ゼーレの足跡をたどってキプロスの古い教会遺跡地下を探るうち、かつてのゼーレメンバー、キール議長の遮光器を発見する。
それを加持が掛けたことで異変は起きる。ケンスケは通常の機密保持要項をいくつか飛ばして直接ネルフ司令部に急を告げた。加持が自我を喪失し、ゼーレになってしまったこと、ゼーレは人類補完計画を円滑に進めるために失敗した過去時間の記憶を次の時間に受け継ぐ管理人であり、最初のメンバーの名がノアであるということ――にわかには信じられないことばかりだった。

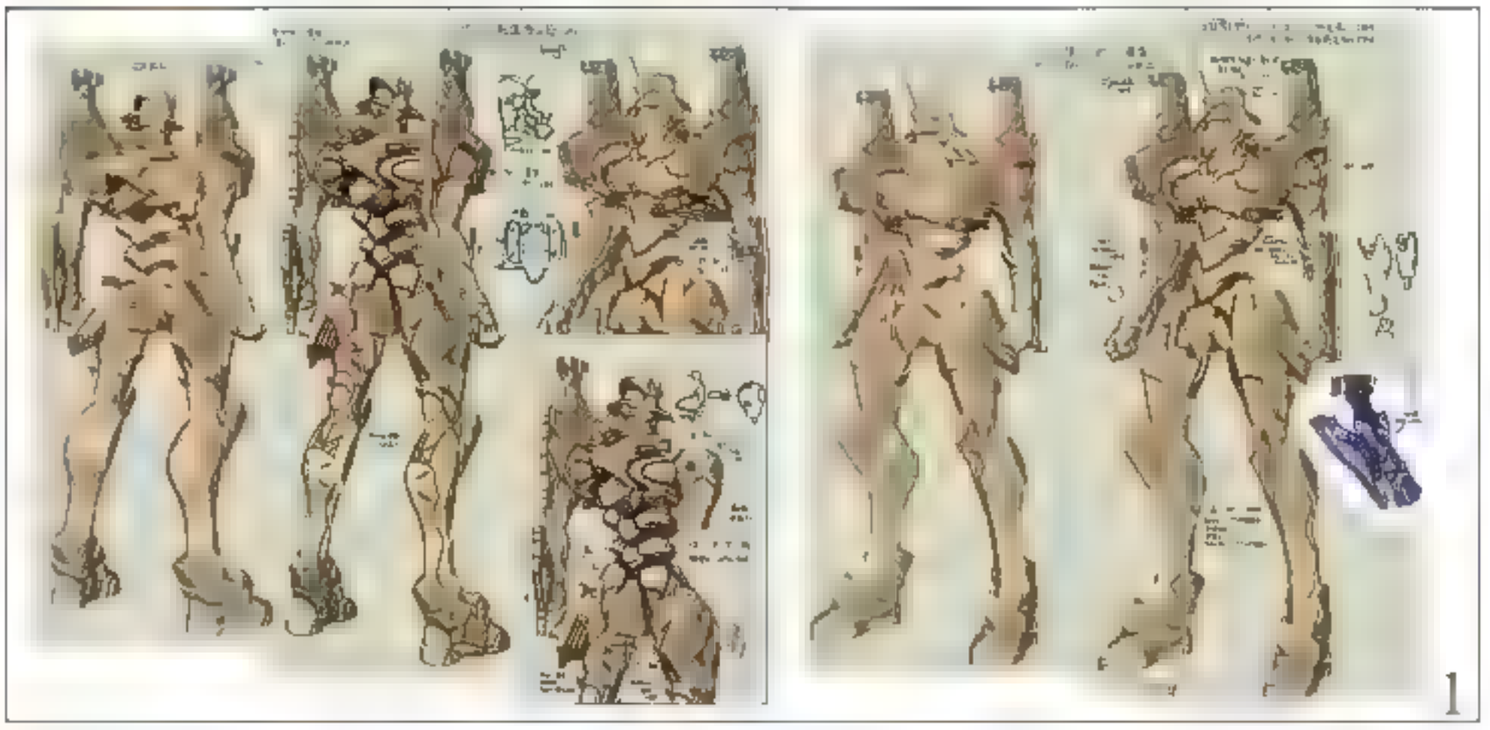
EVANGELION ANIMA

Product supervision

山下いくとによる製品監修指示

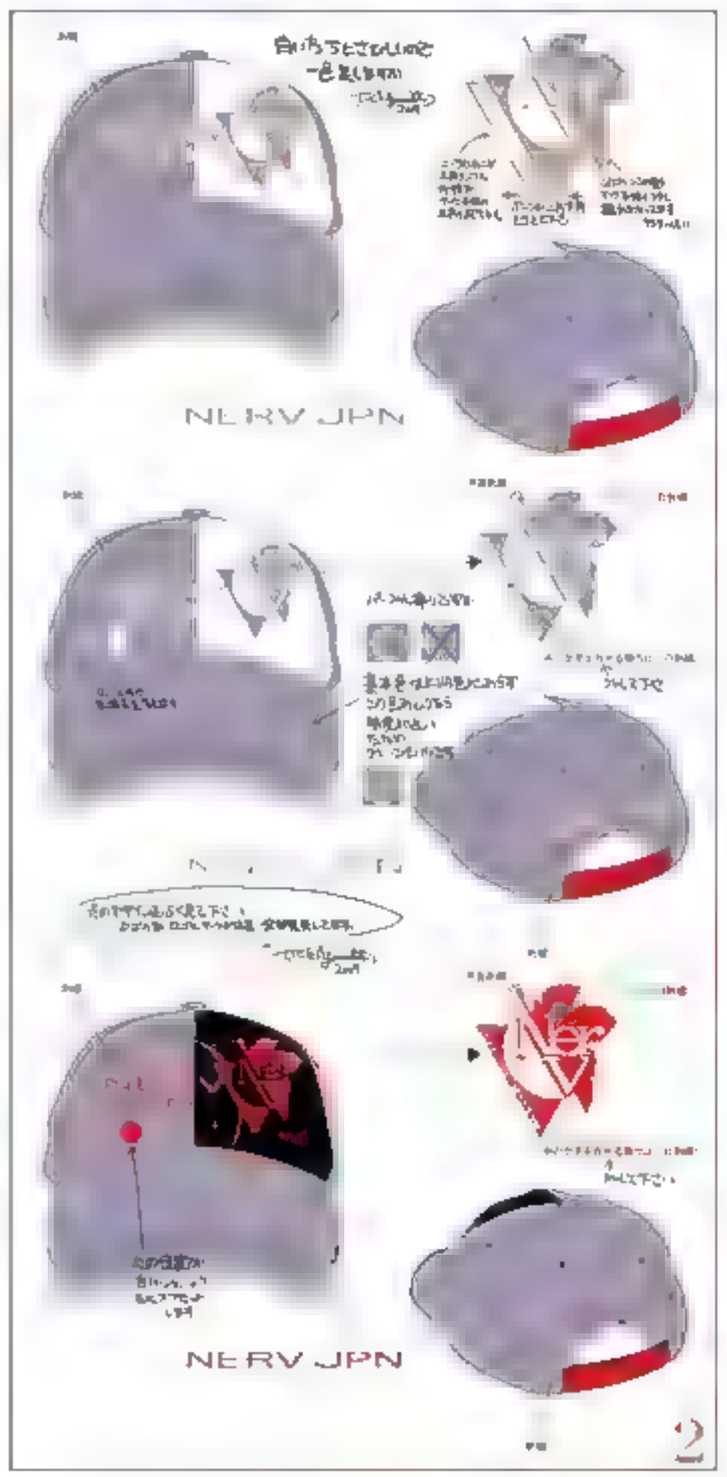
この項は山下いくとによるANIMAからの
派生製品への監修指示稿を紹介しよう。

「超合金スーパーエヴァンゲリオン」は3DCGによる設計のため、ストレートにデザイナーのこだわりが製品に反映される。そのため、山下本人による厳密な監修が行われた。ここで紹介するのは修正用指示書の一部だ。3Dデザイナーから送られた画像に修正指示を入れるのだが、より強くイメージを伝えるため、画像修正ソフトを用いてプロポーションそのものにまで手を入れている。その際、新規のディテールが追加されるなど製品の仕上がりに合わせ元デザインの変更まで行われているのだ。これは3Dデザイナーにとってはいささか酷な仕打ちであるが、山下のこだわりが感じられる一幕である。



1

3



2

1.超合金スーパーエヴァンゲリオン

山下いくとは岐阜県在住のため、要所要所の会合は上京して行われたが、成々にわたる微調整は画像や試作品のやりとりで行われた。

2.ネルフ正式キャップ

山下にとっては珍しい布製品へのアプローチ。布見本や試作品を検証しながら、刺繍のタッチまで考えつつ修正指示を加えている。

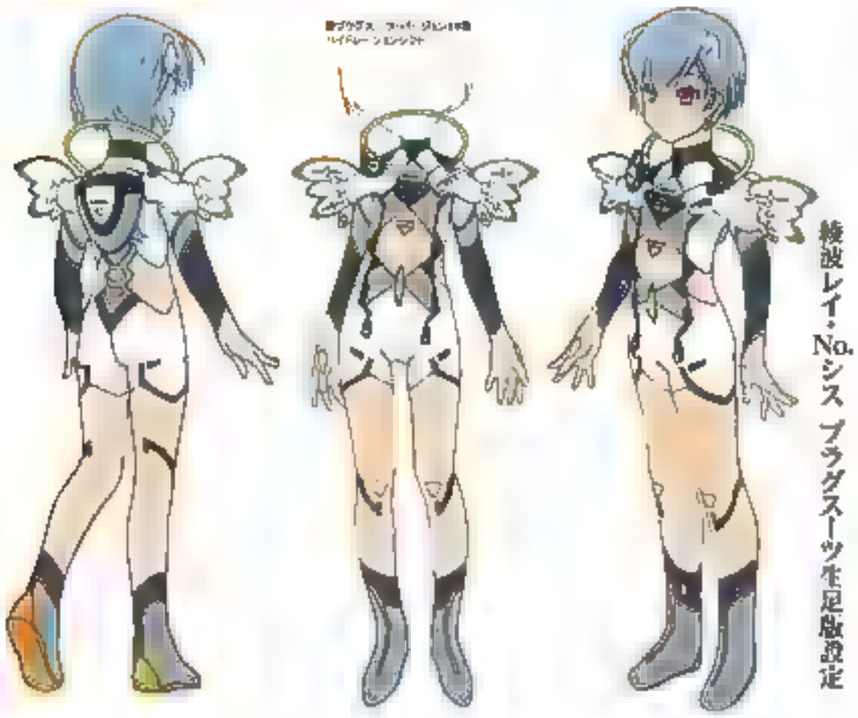
3.アーミングツリーと武器セット

超合金スーパーエヴァンゲリオンでは価格の問題もあって入れることのできなかった武器類と飾り台を別販売しようと考えた企画だったが、最終的に本体を超えるボリュームの巨大基地にまで成長してしまった。監修もこの通り、超合金本体をも凌ぐ苛烈さだ。

綾波レイ No.シス 造形計画

山下いくとが挑戦する初(?)フィギュア企画「綾波レイ Noシス」の造形試作を紹介しよう。原型は可動フィギュアでは定評のあるリキッドストーンが担当する。山下いくと自ら「ロリ波やるならぜひリキッドストーンさんで」と交渉、鋭意進行中のフィギュア化計画。2010年夏のホビーイベント等で見本展示予定だ。

EVANGELION ANIMA



綾波レイ・No.シス プラグスーツ生足版設定

綾波レイ・No.シス プラグスーツ設定

綾波レイ・No.シス プラグスーツ（呼吸器）設定

CREDIT

制作総指揮・メカデザイン・イラスト・ノベライズ：山下いくと

キャラクターデザイン：うたたねひろゆき

原案協力：陰山琢磨

デザイン協力：きお誠児

企画補佐・文芸・構成：柏原康雄

編集：歌田敏明

カバー・本文デザイン：株式会社ビィビィ

撮影：株式会社エルクラフト、編集部

模型製作：射水 宏、GAS、芹沢博士、岬 光彰、米澤辰哉

協力：株式会社カラー
株式会社ガイナックス
株式会社バンダイ コレクターズ事業部

©カラー
©GAINAX・カラー
©2010 ASCII MEDIA WORKS

IKUTO YAMASHITA
山下いくと

漫画家・デザイナー。岐阜県に生まれる。
主要なコミック作品に「ダークウィスパー」、「風の住処」等がある。アニメーション作品では、「新世紀エヴァンゲリオン」をはじめ「ふしぎの海のナディア」、「トップをねらえ!」などのデザインを担当。「戦闘妖精雪風」最終話では演出・脚本もこなし、ダイナミックな画面演出は高い評価を得た。

DENGEKI HOBBY BOOKS

新世紀エヴァンゲリオン ANIMA ヴィジュアルブック

著者　山下　いくと

2018年2月15日　発行

©カラー
©GAINAX・カラー

本電子書籍は下記にもとづいて制作しました
DENGEKI HOBBY BOOKS『新世紀エヴァンゲリオン ANIMA ヴィジュアルブック』
2010年8月11日　初版発行
2017年11月30日　3版発行

発行者　郡司 聡
発行　株式会社ＫＡＤＯＫＡＷＡ
http://www.kadokawa.co.jp/
プロデュース　アスキー・メディアワークス

アスキー・メディアワークス　「お問い合わせ」
[WEB]http://asciimw.jp/info/inquiry/

本作品の全部または一部を無断で複製、転載、配信、送信すること、
あるいはウェブサイトへの転載等を禁止します。
また、本作品の内容を無断で改変、改ざん等を行うことも禁止します。
本作品購入時にご承諾いただいた規約により、有償・無償にかかわらず
本作品を第三者に譲渡することはできません。
本作品を示すサムネイルなどのイメージ画像は、再ダウンロード時に
予告なく変更される場合があります。
本作品の内容は、底本発行時の取材・執筆内容にもとづきます。
また、ご覧になるリーディングシステムにより、表示の差が認められることがあります。

カバー・本文デザイン　株式会社ビィピィ

BOOK☆WALKER